# 建築と社会

# ARCHITECTURE AND SOCIETY



特集＿まちなかのサードプレイス

4
日本建築協会　2011

日本建築協会企画・販売

# 出版図書一覧

1917年３月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈳日本建築協会事務局（TEL06―6946―6981、FAX06―6946―6984）まで。

日本建築協会創立70周年記念出版

## 住宅近代化への歩みと日本建築協会 1988年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

## 工高生デザインコンクール入選作品集 1992年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格2,000円

## 昭和生まれ　関西の建築家50 1987年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念講演記録集

講演記録集 **話のはなし** 1997年

Ｂ６判５分冊　企画：日本建築協会建築クラブ　販売価格2,500円（税・送料込み）

民間（旧四会）連合協定

## 工事請負契約約款（平成21年６月改訂）

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項・建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律第13条および省令第4条に基づく書面

販売単位：２部１単位とする

価　　格：１単位700円（税込）送料は実費

日本建築協会事務局（06-6946-6981）で販売

### 近刊 平成21年3月10日発行

## 写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

管理の良い現場、悪い現場が一目瞭然！
現場のブロークンウィンドウズを見逃すな

著者　玉水　新吾
四六判　224ページ
定価　1,900円＋税

### 最新刊 平成22年11月10日発行

## プロが教える住宅の植栽

門廻り、アプローチ、壁、インテリア、屋上、住空間で緑（樹木・草花）を効果的に使いこなすための知識と考え方

著者　藤山　宏
Ｂ５判　176ページ
定価　2,800円＋税

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇・四六判２色刷イラスト入

## 〈プロのノウハウ〉シリーズ

企画：日本建築協会　発行：学芸出版社　本体価格￥1,600～￥2,800

- 衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
- 建築と音のトラブル　中川清ほか
- 建築工事の祭式　「建築工事の祭式」編集委員会
- 飛躍する構造デザイン　渡辺邦夫
- 改訂版　建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- プロが教えるキッチン設計のコツ　井上まるみ
- 現場で学ぶ　住まいの雨仕舞い　玉水新吾
- 住宅エクステリアの100ポイント　藤山　宏
- 第三版　建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
- 写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント　玉水新吾
- 建築の現場管理システム　伊東貞夫
- 新版コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
- 建築基準法の性能規定を読みこなすコツ　高木任之
- 第二版 環境と共生する建築25のキーワード　大西正宜
- 木造住宅のしくみ　在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
- インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
- 木づくりの常識非常識　上村　武
- 建築トラブルにみる常識非常識　荒川治徳
- 第三版　都市計画法を読みこなすコツ　高木任之
- 建築主が納得する住まいづくり　玉水新吾
- プロが教える住宅の植栽　藤山　宏

日本建築協会創立70周年記念事業・B5判

## 選書特装版

企画・日本建築協会　発行・学芸出版社　本体価格￥3,000～￥4,000

- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会
- 建物の汚れ－トラブル事例と解決策　「建物の汚れ」編集委員会
- 建築デザインのための構造計画　須賀好富
- 入門・建築積算　生島道春
- 建物の結露－トラブル事例と解決策　「建物の結露」編集委員会

被災地の皆様へ

# 謹んで地震災害のお見舞いを申し上げます

この度の東北·関東大震災（東北地方太平洋沖地震）により被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます
一日も早い復旧をお祈り申し上げます

社団法人　日本建築協会
会長　中井　進

2011年は9月号掲載で、応募締め切りが6月30日となります！

# 若き創造者たちへ

## 「建築と社会」平成23年9月号
## 「第58回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに57回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

58回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

### 応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成23年７月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
（選考時までに入会が必要です）

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5．「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第58回青年技術者特集号」（平成23年９月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

6．提出資料

**■すいせん用紙**

請求は、本会事務局、またはすいせん依頼先担当部署へ。

**■略歴**

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

**■選考資料**

資料は、④を含めて**A3判用紙5枚以内にまとめる。**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、**本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。**このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。**

7．**提出期限**　平成23年6月30日（木）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
Email：ken-sha@aaj.or.jp

9．**青年技術者選考委員会**（平成23年度）

委員長　設楽　貞樹／安井建築設計事務所常務取締役
委　員　木多　道宏／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
北村　潤／東畑建築事務所理事設計部長
吉田　文男／一級建築士事務所アトリエフォルム代表取締役
髙梨雄二郎／竹中工務店プロジェクト開発推進本部副本部長(西日本担当)
太田　寛／鴻池組大阪本店建築設計部長
桑原　進／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
高山（こうやま）　真（まこと）／日建設計設備設計部門設備設計部長
井村　隆／清水建設関西事業本部設備設計部設計長
阪井　聡／大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長
山辻　直樹／大成建設関西支店建築部購買管理室課長

第58回青年技術者は、本年6月30日(木)までに応募できるよう準備をお願いします。

主催　日本建築協会

平成23年度　第57回工高生デザインコンクール

# 設計課題　バックパッカーのための施設

## 課題の趣旨

バックパッカーとは、少ない予算で個人旅行をする人々のことをいいます。

その旅の目的は、パッケージツアーとは違い、土地固有の暮らしや文化、現地の人々との密接なふれあいなどを直接感じることではないでしょうか。



最優秀賞牌

日本においても諸外国より多くのバックパッカーが訪れています。しかし、その人々が利用できる施設はあまり多くありません。

本課題では、バックパッカーの現状を十分研究し、他国や違う土地の人々と交流するなど、魅力的な空間のある施設の提案を期待しています。

### 設計条件

1．敷　　地：敷地の大きさ・形状とも自由とする。
2．規　　模：延べ面積は自由とする（ただし、500㎡を上限とする）。構造・階数は自由とする。
3．所 要 室：提案の趣旨に沿って必要なスペースを適宜設ける。

### 所要図面等

1．敷地周辺図：縮尺自由（建築する場所を特定し、敷地周辺の環境や状況を示す）
2．配 置 図：縮尺自由（敷地と建築物・道路との関係、方位などを明示する）
3．平 面 図：縮尺1：100とし、1階平面図は配置図と兼ねてもよい。
4．立 面 図：縮尺1：100（2面以上）
5．断 面 図：縮尺1：100（1面以上）
6．透 視 図：設計意図が最も反映するところ（アイソメも可）着彩可。模型写真に代えてもよい。
7．施設概要：延べ面積・構造などを必要に応じて適宜記入。
8．設計説明：設計趣旨（立地・周辺の状況等についての説明も含む）、サブタイトル（設計意図を表すもの）
9．そ の 他：敷地の大きさや形状により、1、2は兼ねてもよい。
平面図・断面図には、室名・寸法を記入する。
その他、必要とされる図面は加えてもよい。

### 応募条件

1．用　　紙：製図用紙A1判（594㎜×841㎜）1枚を使用し、その中にすべての要求図面を描くこと。
2．仕 上 げ：図面は黒色鉛筆仕上げとし、ワープロ、CG（透視図を含む）やCAD、スクリーントーンなどによる仕上げは禁止する。（ただし、色鉛筆による着色は可）
透視図は彩色用紙を用い、製図図面にのりづけしてもよい。
透視図や模型写真以外のものを貼りつけることや、図面のパネル化は行わない。
3．応募資格：平成23年4月現在、高等学校在籍の生徒で、個人または共同で制作したものとする。
4．そ の 他：用紙や図面には、学校名・学年・氏名など応募者がわかるような表示は行わないこと。
※以上の条件に違反した応募作品は、失格とすることがある。

### 応募方法

1．別紙用紙に、学校名・所在地・学年・氏名を記入の上、封筒に入れ密封し、図面の裏に貼りつけること。（記入用紙が足りない場合は当会HP（http://www.aaj.or.jp）からダウンロードして下さい）
2．共同制作で応募する者は、1.の記入用紙に連名のうえ、代表者に丸印をつけること。
3．応募作品は学校を通じて提出すること。

### 締切期日

平成23年9月30日（金）の消印、あるいは受付印のあるものをもって締め切る。

### 送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMMビル7階
社団法人 日本建築協会　第57回工高生デザインコンクール係
TEL.06-6946-6981　FAX.06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp　URL：http://www.aaj.or.jp

### 入選作品の数および賞

1．入選作品は10点とする。
2．入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点を選ぶ。
3．最優秀賞作品には賞状および賞牌を贈り、優秀賞とその他の入選作品には賞状を贈る。
4．応募者全員に参加賞を贈る。
※入選作品の版権は本会に属する。

### 入選者発表および表彰式

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年1月号に掲載する。
表彰式は、平成23年11月12日（土）に行なう。

審査員（50音順・敬称略）

委員長　長坂　大／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
委員　伊藤　直幸／㈱大林組大阪本店建築設計部課長
上原　徹／㈱日建設計設計部長
上羽　一輝／㈱東畑建築事務所大阪事務所設計部主管
内海　慎介／㈱竹中工務店大阪本店設計部副部長
木下　光／関西大学環境都市工学部建築学科准教授
武田　史朗／立命館大学理工学部建築都市デザイン学科准教授
中平　勝／中平勝建築設計事務所代表
細田みぎわ／Migiwa　Hosoda　Archi-Studio主宰
三好　裕司／㈱安井建築設計事務所設計部設計主幹

このコンクールは、高校生の設計技能の向上を目的とし、昭和30年より毎年テーマを変えて開催しています。

# 「建築と社会」誌

## 特集一覧●1989〜2010

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

| 号 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1989 vol.70 | ●夢をのせる輸送設備 | ●リゾート事情<br>●竹中工務店 創立90周年記念 | ●色の復権<br>●東海の新建築と伝統技術＊ | ●省力化のための材料・工法 | ●まちづくりと法 | ●博覧会とまちづくり | ●都市環境創造と設備I | ●建築とアート | ●構造の省力化<br>●鹿島建設大阪支店 建築設計部作品集 | ●都市環境創造と設備II<br>●ユーザー参加のハウジング | ●第36回青年技術者 | ●最近の博覧会パビリオン |
| 1990 vol.71 | ●商品化住宅のデザイン＊ | ●ニュータウン・ルネサンス | ●東海の都市景観<br>●佐賀市文化会館＊ | ●スケール感 | ●プレハブ住宅技術の現在と未来 | ●国際花と緑の博覧会 | ●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー | ●高強度化—設計の多様化をめざして—＊ | ●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割 | ●都市のナイス・プレイス<br>●兵庫県営緒の歩み | ●第37回青年技術者<br>●和歌山県の展望と景観＊ | ●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材 |
| 1991 vol.72 | ●新しい都市空間づくり—I— | ●オフィス・プレジャー<br>●新しい都市空間づくりーII—<br>●建築の風景 | ●東海支部復活30周年記念 | ●大阪東京海上ビルディング | ●今、京都<br>●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー | ●建築と土木<br>●毎日放送本社ビル<br>●近畿地方建設局営繕部 | ●一般号＊ | ●建築をめぐるトラブルとその解決<br>●建設現場のイメージアップ作戦 | ●空間のアイデンティティ<br>●きんでん写真集<br>●大建設計40周年 | ●自治体住宅政策への提言<br>●大林組創業100年記念 | ●建築と土木—構造技術の世界—<br>●第38回青年技術者 | ●スリムでタフなコンクリート<br>●21世紀の住まいを考えるシンポジウム |
| 1992 vol.73 | ●夢物語—人がかわる、まちがかわる— | ●こだわりのインテリア<br>●近畿の郵政建築15年の歩み | ●建築とデザイン—東海支部—＊ | ●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム— | ●地球環境時代の建築 | ●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年— | ●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊ | ●接着—建築分野への限りなき可能性 | ●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊ | ●屋台一仮設の魅力に学ぶ—<br>●ハウジングのメインストリームを探る | ●いま建築教育に何が期待されているか | ●京のかたちと色 |
| 1993 vol.74 | ●第39回青年技術者<br>●東畑建築事務所 創立60周年 記念作品集 | ●大阪府営緒 | ●東海の美術館・博物館 | ●市民劇場の舞台設備 | ●環境—限りある自然と建築とのかかわり | ●都市のスカイライン | ●映画の中のインテリア<br>●けいはんなプラザ・住友ホール | ●建築の再生—構造技術の役割—<br>●大阪市営緒 | ●国際的パートナーシップの可能性 | ●福祉のまちづくり | ●都市型住宅再考 | ●第40回青年技術者<br>●環境—人にやさしい空間創造をめざして |
| 1994 vol.75 | ●コピー文化の新時代<br>●広島の街創りアジア競技大会 | ●九州のインスタレーションと貌 | ●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊ | ●建築のエネルギーシステム | ●明日に向かって—会員作品＊ | ●いま、医療施設は | ●住空間における居どころへの視点 | ●まちなかの看板<br>●竹中工務店の集合住宅 | ●水と建築<br>●日本建築総合試験所 | ●建築設備のCGシミュレーション<br>●村野、森建築事務所 | ●構造美—建築の中の美<br>●集合住宅団地リニューアル | ●第41回青年技術者<br>●関西国際空港 |
| 1995 vol.76 | ●光がつくる風合の世界＊ | ●音—騒音から操音/創音へ | ●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化＊ | ●トイレから見た都市文化 | ●トイレ空間 | ●接合<br>●コスモタワー | ●ユニバーサルデザインとは | ●私の空間物語—会員作品 | ●新しい「都市・建築」の視点＊ | ●建築構造と社会の接点<br>●日建設計＊ | ●ライフラインと建築設備＊ | ●第42回青年技術者<br>●滋賀県建築課 |
| 1996 vol.77 | ●阪神大震災から学ぶ＊ | ●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊ | ●遠江—その地方振興と文化＊ | ●立体駐車場設備<br>●大建設計 | ●災害！非常時に生きる法体系<br>●OAPタワーズ | ●いま、プールがおもしろい | ●住まいの未来像 | ●マルチメディアがつくる世界 | ●キーコンセプトの新時代 | ●最新の大規模スポーツ競技施設の設備 | ●私の空間物語'96<br>●九州の元気<br>●りんくうの3作品 | ●第43回青年技術者<br>●近畿地建営繕部 |
| 1997 vol.78 | ●建築のロングライフ化をめざして | ●鉄ものがたり＊ | ●東海支部会員作品<br>●金沢・能登—風土・文化とまちなみ・建築＊ | ●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊ | ●木造建築物の伝統技術とその将来 | ●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ—<br>●住都公団関西支社 | ●素材の不思議<br>●大阪ドーム | ●新エネルギー<br>●住宅・都市整備公団改革への提言 | ●クロスワード都市OSAKA＊ | ●モザイク都市の住むかたち<br>●昭和設計40周年 | ●私の空間作法—会員作品— | ●第44回青年技術者<br>●京都駅ビル |
| 1998 vol.79 | ●新しいまちづくりの予感<br>●東畑建築事務所 創立65周年 | ●Concrete<br>●九州とわたし、そして建築 | ●東海支部会員作品<br>●信州—諏訪とその周辺— | ●街並みの演出—最近の外構材料 | ●生活環境の安全・安心 | ●地球環境保全と建築 | ●心と体を元気にするインテリア | ●建築設備—ビルメンテナンスの立場から | ●建築への証言'98—21世紀に向けて | ●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ | ●私の空間作法<br>●2001年の医療施設 | ●第45回青年技術者<br>●駅とともに歩んだJR西日本の12年 |
| 1999 vol.80 | ●“らしさ”のデザイン<br>●建築を綴どる 小粋なモノの仕掛人 | ●大阪市都市整備局 | ●東海支部会員作品'99<br>●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築 | ●都市のパブリック | ●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる | ●大阪城天守閣平成の大改修 | ●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開— | ●私の目でみた環境問題 | ●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア | ●木とともに | ●私の空間作法 | ●第46回青年技術者 |
| 2000 vol.81 | ●21世紀のデザインの動向を見る<br>●安井建築設計事務所創業75周年 | ●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり— | ●東海支部会員作品2000<br>●越中・富山—地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ | ●こころを癒す環境デザイン | ●測る—測定方法と測定結果が意味するもの— | ●スケルトン&インフィル | ●改正建築基準法—パートII— | ●100年後へのメッセージ<br>●日建設計創業100周年 | ●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ— | ●時間 | ●私の空間作法—会員作品—<br>●21世紀の高齢者の居住環境 | ●第47回青年技術者 |
| 2001 vol.82 | ●エヌ・ティ・ティファシリティーズ | ●21世紀の建築設計教育 | ●東海支部会員作品<br>●岐阜・大垣 | ●IT社会におけるきずな | ●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」 | ●成熟社会をささえるまちづくり | ●現代の日本の空間・文化を探る | ●環境—近未来に向けて今できること—<br>●大建設計—作品特集1996〜2001— | ●建築の力都市の力 | ●緊張<br>●都市基盤整備公団関西支社 | ●私の空間作法—会員作品— | ●第48回青年技術者<br>●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊ |
| 2002 vol.83 | ●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊ | ●再生・リサイクル | ●東海支部会員作品<br>●愛知・名古屋 | ●生活環境の安全・安心—パート2— | ●塗装のいろいろ | ●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方 | ●いま、インテリアデザインは<br>●漆町 リバープレイス | ●建築をささえるセンサー | ●建築とボランティア | ●時を超えて〜サステナブルエンジニアリングの現在〜 | ●私の空間作法—会員作品— | ●第49回青年技術者<br>●大阪市中央公会堂 |
| 2003 vol.84 | ●東畑建築事務所 創立70周年 | ●九州の地域づくり・まちづくり | ●東海支部会員作品2003<br>●愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える— | ●サスティナビリティ〜次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン〜 | ●建築と五感 | ●都市計画法及び建築基準法等の改正 | ●コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ— | ●介護と建築・設備 | ●建築とノスタルジー〜建築の主観的価値について〜 | ●力と楽しくつき合う方法 | ●私の空間作法—会員作品— | ●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年 |
| 2004 vol.85 | ●大阪市住宅局 | ●都市緑化 | ●東海支部会員作品<br>●愛・地球博＊ | ●省リスクな「まち再生」＊ | ●リニューアルの技 | ●地域住民主体のまちづくりと支援制度 | ●Product Design＋1 | ●銭湯〜心地よさを求めて〜 | ●建築家とは何か | ●巨大地震にそなえて | ●私の空間作法—会員作品— | ●第51回青年技術者 |
| 2005 vol.86 | ●震災から10年 | ●「健やか」<br>●長崎医療センター | ●東海支部会員作品2005<br>●東海における施設づくりへの新たな試み | ●建築の経済化 | ●住まい方の変化 | ●人工栽培 | ●次世代に伝える「木」の建築<br>●「建築と社会」1000号記念 | ●改正建築基準法と景観緑三法 | ●火災から守る | ●構造の過去から未来へ＊ | ●私の空間作法—会員作品— | ●第52回青年技術者 |
| 2006 vol.87 | ●都市環境デザインと参加のまちづくり | ●「地方空港の時代」〜まちと共存する空港づくり〜 | ●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊ | ●都市再生の本質〜光と影のはざまで〜 | ●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル | ●身近な省エネルギー〜エネルギーをたくわえ、有効利用する〜 | ●設計図が伝えるもの | ●建築物の安全・安心＊ | ●第53回青年技術者 | ●「セキュリティ」 | ●もしも…〜構造が未来へつなぐ夢〜 | ●私の空間作法—会員作品— |
| 2007 vol.88 | ●光り輝く京都の景観まちづくり | ●学校新時代 | ●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作 | ●創立90周年記念—この10年、これからの10年 | ●あそび考 | ●こだわりが創る住まいのカタチ | ●住まいの設備と空間の移り変わり | ●建築系雑誌が伝えるもの | ●建築基準法等大改正 | ●第54回青年技術者 | ●ガラスを考える | ●楽しい構造の世界 |
| 2008 vol.89 | ●私の空間作法—会員作品— | ●PFI事業、その後 | ●東海支部会員作品2008＋東海支部特集3部作 | ●まちづくり2011年宣言 | ●新ホテル物語 | ●設備に役立つ地震対策 | ●中国地方を訪ね歩いて見えるもの<br>●小林聖心女子学院 | ●建築と景観 | ●第55回青年技術者 | ●木造住宅を巡って | ●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？ | ●自然と戦う構造 |
| 2009 vol.90 | ●私の空間作法—会員作品—<br>●京阪電車 中之島線—新線が拓く中之島新時代— | ●水の都 にぎわいのある未来に向けて | ●東海—TOKAIオムニバス | ●楽しい福祉 | ●体感するインテリア | ●建築空間が求める空気環境（空気質） | ●建築と水 | ●実用レベルで展開される施工管理のIT化 | ●第56回青年技術者 | ●地域の歴史資産を活かしたまちづくり | ●第16回会員作品特集“私の空間作法” | ●構造家日記〜頭の中をのぞいてみたら〜 |
| 2010 vol.91 | ●創業110周年記念特集 NIKKEN SEKKEI | ●建築とエコ技術 | ●東海支部復活50周年記念号 東海—TOKAIオムニバス | ●食と建築・都市 | ●ホスピタリティのあるケア空間 | ●太陽光発電 | ●建築と石 | ●再生・受け継ぐ・繋がる | ●第57回青年技術者 | ●建築ストック社会の形成への展望 | ●LED照明の活用・将来を考える〜人・地球への思いやり〜 | ●東京スカイツリー |

＊は欠号

# 建築と社会
ARCHITECTURE AND SOCIETY

|No.1069| 2011 4
日本建築協会

Journal of the Architectural Association of Japan


■特集予告
5月号／身の置きどころ～めくるめく生活空間～
6月号／ECO―建築設備ができるECO技術―


編集委員会(平成22年度)

■副会長
本多　友常
松村　孝治
■編集担当理事
浅野真一朗
上原　正行
木戸　徹
佐藤　栄一
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
吉村　英祐
■副委員長
米井　寛
勝山　太郎
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
△飯田　匡
鈴木　克彦
田中　直人
髙橋　和也
紅谷　昇平
松田奈緒子
三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
荒木　宏之
奥村　朋孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
△静　茂夫
下坂　浩和
所　千夏
野田　隆史
桃杷　健一
松森　織江
米山　剛史
★インテリア・住宅系
小倉　一平
加藤　力
△神谷　浩司
黒柳　亮
田中　浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
間渕　一博
■構造分科会
秋田　智
△石田　大三
岸本　光平
小芝　淳一
志摩　好宣
瀧野　敦夫
角田　耕一
雛波　尚
橋本　宗明
松村　健
向井　洋一

■設備分科会
△赤澤　正治
梶井　宏修
北野　勝也
谷野　太志
夏井　重行
難波　利幸
橋本　直樹
福谷　周
桝井　貴廣
宮崎ひろ志
村上幸三郎
渡邊　裕之
■施工材料分科会
桜井　和男
髙橋　秀一
△中川　恒
藤丸　啓一
山岡　篤人
渡邊　聡
■法令分科会
近都　学
河野　学
田上　幸二
西林　浩一
濱崎　秀和
山上　佳之
△吉田　純
鷲尾　真弓
■作品作風小委員会
居内　章夫
○池上　明
稲垣　和江
井上　雅祐
加嶋　章博
倉橋　尉仁
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
鞆野　淳司
豊田　充広
鳥居　久人
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
上田　訓将
大波名俊介
永平　達也
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
山辻　直樹
■10年委員会
赤木　隆
門野　陽
川上比奈子
熊田　将男
清水　健司
△菅原　幸也
△中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事



印　刷　2011年3月25日
発　行　2011年4月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕



©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。


# 特集●まちなかのサードプレイス


●総論
「サードプレイス」考●舟橋國男 ―― 12

●各論
地域と都市の居場所のために ～建築・都市の専門家の心構え～●鈴木　毅 ―― 15
オフィスワーカーにとっての「サードプレイス」●林田大作 ―― 17
高齢者の居場所●松原茂樹 ―― 19

●事例
地域のコモンズとしてのサードプレイス ～長崎県島原湧水群の共同洗い場より～●吉住優子 ―― 21
ひがしまち街角広場～ニュータウンの空き店舗を活用した地域の「ひろば」～●田中康裕 ―― 24
団地内の空きスペースを活用した地域住民の居場所づくり●飯田 匡・上田明法 ― 26
まちなかの会員制レンタルオフィス●中村智一 ―― 28
くつろげる移動空間を目指して ～新幹線新型車両の取り組み～●影山真佐富 ―― 29
居場所を設計する ～吹田市立子育て青少年拠点 夢つながり未来館～●北村　潤 ― 30

●エッセイ
「私のサードプレイス」
●吉村英祐・守井　辰・三宅次郎・松田奈緒子・田中直人・紅谷昇平・高橋和也 ―― 32

会告　被災地の皆様へ―東北地方太平洋沖地震のお見舞い―. 若き創造者たちへ「第58回青年技術者特集号」へのおさそい. 第57回工高生デザインコンクール（設計課題：バックパッカーのための施設）　1
作品作風　池田泉州銀行夙川支店　6
研究の風景　門内輝行研究室　●京都大学大学院工学研究科建築学専攻建築環境計画学講座　8
gallery　モノコックの家●桝田洋子　10
法令コーナー　京都市の景観政策の進化●岡田圭司　35
設備の頁　ポンプのトラブル事例とその対応●仲　信吾　36
再読 関西近代建築　大阪中央郵便局●橋寺知子　37
関西の建築界群像　澤田　充●奥　貴人　41
公開研究会 REPORT　環境保全部会公開研究会　都市空間デザインの展望―日伊の比較を通して―●伊丹康二　42
REPORT　藤山宏著『プロが教える住宅の植栽』出版記念講演会 もよおしの記●山田　修　44
information　調査・研究助成、普及事業助成（第1回）応募受付. 没後150年　歌川国芳展. 幕末・明治の超絶技巧　世界を驚嘆させた金属工芸―清水三年坂美術館コレクションを中心に. 特別展　The Birth of Chinese Civilization誕生!中国文明.「松園の描く唐美人」～唐美人に託した想い～. 受贈記念　水彩の魅力　青山政吉展 日本百景・万葉百景. 江里康慧・江里佐代子展 仏像と截金―光 放たれるとき―. ベルギー木の匠の技. Gallery銀座一丁目展示会. 膜・空間デザインコンペ作品募集. 建築社会研究/Architecture-Society Studiesプラットフォーム開設のお知らせ　45
月間の動き　平成23年2月分　48


本文　デザイン　高橋善丸

## 今月の表紙

作品：柳澤顕　表紙デザイン：灰田瑞穂　撮影：表 恒匡　協力：アートコートギャラリー

**untitled**　2009年／パネルにアクリル絵具、カッティングシート／950×613cm

生命は単体では存在しえない複数の集合体であり、外部に開かれている。絵画の内外空間のダイナミックな応答が、そのまま絵画という境界を形づくるために、カッティングシートを用い、生み出された形態をキャンバスの内部にとどまらせず壁面、床面、空間へと向かわせ、生命の持つ柔軟さを獲得しようと試みた。（柳澤 顕）


池田泉州銀行


池田泉州銀行
若松町
Wakamatsucho

作品風

建　築　主　株式会社池田泉州銀行
設計・監理　大林組大阪本店一級建築士事務所
施　　工　大林組

# 池田泉州銀行夙川支店

池田泉州銀行合併後の第１号店として、閑静な高級住宅地である夙川に相応しい、富裕層をターゲットとした銀行店舗が求められた。山手幹線と交通量の多い県道の交差点に立地し、北側に阪急神戸線の高架に接している敷地のポテンシャルを最大限生かすこと、また、地域との連携強化や環境配慮を積極的に進める銀行のイメージ向上に寄与することを目指した。

**■上質感を持つ端正な平屋建ての銀行**

地区計画に因る店舗面積500㎡の条件の下、極限までコンパクト化した店舗部分と、独立した駐輪場の、大小２つのボリュームにより、敷地を最大限活かしたコの字型プランを形成し、同じファサードで全体を覆うことで、平屋建てでありながら、制約を超えた大きさと広がりを持つ豊かさを得た。ガラススクリーンと白い押出成型セメント板で構成された外皮と、緑化された屋根プレートの構成とし、『１枚の屋根＋パネル壁』というシンプルな形態を、『ガラス・白・緑』という最小限の要素で表現することで、空間の豊かさが端正な上質感として感じられることを意図した。

**■高い透明性と強い開放感を印象付ける中庭**

石貼の中庭は、駐車スペースだけでなく、敷地内の豊かな緑化と共に上質な雰囲気を作り出し、エントランスとしての風格と快適さを醸し出している。

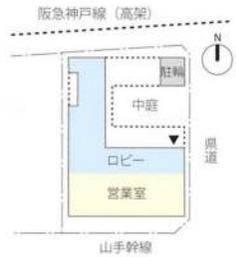
また、ガラススクリーンを介してロビーや多目的室などの来客ゾーンと空間的に繋がっており、明るさと広がりを内部空間にもたらすと共に、高い透明性と強い開放感を印象付けている。

**■彩りある屋上緑化**

平屋建てとしたことで、電車や周辺の集合住宅から大きな屋根面を望むことができ、スミレなど四季折々の彩りを見せる屋上の風景は、見る人に安らぎと街に潤いを与えると共に、環境配慮に対する銀行の積極的な姿勢を効果的に発信し、イメージ向上に寄与している。

この建築が銀行の新たな第一歩を示すと共に、地域の一員として長く愛されることを期待している。　（井上雅祐・杉本憲祐・伊藤翔／大林組）

所 在 地――兵庫県西宮市寿町
敷地面積――982.07㎡
建築面積――621.77㎡
延床面積――659.98㎡
構造規模――S造、地上１階、塔屋１階
工　　期――2010年７月～2010年10月
最寄り駅――阪急夙川駅
撮　　影――河合止揚（アトリエリベラ）





















研究の風景

京都大学大学院工学研究科建築学専攻
建築環境計画学講座

# 門内輝行研究室



図1　ゼミ旅行（富山・砺波）における集合写真



図2　日本の伝統的街並みへの旅（近江八幡）

## ■はじめに

京都大学門内研究室は、門内が京都大学に着任した2004年４月に始まり、ちょうど７年が経過したことになる。当初は４回生３人であったが、現在23名の陣容で様々な活動を展開している（教授１名、助教１名、博士課程学生５名、修士課程学生10名、学部４回生４名、研究生１名、研修員１名）（**図1**）。博士課程学生のうち２名は国費留学生である（レバノン、チリ）。

門内は1973年に京都大学工学部建築学科を卒業後、東京大学大学院工学系研究科建築学専門修士課程を修了し、同博士課程を中退して1977年に東京大学生産技術研究所助手となり（池辺陽、原広司研究室に在籍）、1989年から早稲田大学理工学部で助教授、教授を勤め、2004年に母校である京都大学に戻ったが、この間、京大では「建築論」を学び、東大では「設計方法論」「建築・都市記号論」の研究を行い、早大では「都市論」の研究・教育に携わってきた。これらの幅広い経験を踏まえて、建築から都市に及ぶ多様な研究・設計活動を展開している（詳細は下記URLをご覧下さい：http://www.monnai-lab.archi.kyoto-u.ac.jp/）。

## ■人間―環境系のデザインをめぐって

現代の生活環境では、コンクリートの建物内で体調を崩しながらかけ続けているクーラー、低層の町家と高層マンションが混在する景観、大量の廃棄物などの人工物による歪みが集積し、生活の質を低下させる多くの困難な問題が生じている。

門内研究室では、こうした問題群を解く鍵の一つが、個々の人工物を超えて、人工物相互の関係や人工物と人間・環境との関係に調和をもたらすことにあると考え、それを広い意味での「デザイン」と呼び、「人間―環境系のデザイン」の理論と実践を展開している。具体的には、建築・都市記号論、設計方法論を基底として、人間―環境系の多層性を解読し、それを豊かな生活環境のデザインに統合していくシンセシスの科学の構築とそれに基づくデザインの実践を推進している。主な研究内容及びプロジェクトは次の４つに分類できる。

### ①建築・都市空間のデザインに関する記号学的研究

20世紀における近代化の過程で、建築・都市空間の均質化・意味喪失といった現象が浸透し、意味づけられた環境や美しい景観が次々に姿を消してきた。この問題の解決をめざして、意味に関わる現象の仕組みを扱う記号論の視点から、魅力的な建築・都市空間のデザインの可能性を探る。

（研究例）

- 街並みの景観の美的秩序とそのデザインに関する記号学的研究（**図2，3，4**）
- 京都らしい都市景観のデザイン原理の解明とその創造的再生
- テクストとしての建築・都市空間の解読とデザイン
- 建築・都市空間デザインのための設計言語・空間文法・物語構造

門内は、日本の伝統的街並みの分析を行い、限られた数の要素の組合せから無限の景観のバリエーションが生成される仕組みを解明したが、現在研究室ではその成果を踏まえて、京都の都市景観のデザイン原理の解明に力を注いでいる。

### ②建築・都市設計の方法論に関する研究

技術合理性に根ざして問題解決を図るシステマティックな設計方法だけでは、現代の複雑で不確実な設計問題に対応できなくなっている。そこで、状況に応じて柔軟に設計を進める設計主体に焦点を結び、人間・自然と人工物の関係、人工物相互の関係のデザインを可能にする対話型の設計方法の研究を行っている。

（研究例）

- 記号過程（記号の生成・退化・変形・結合等）としての設計プロセスの記述
- メタファー（隠喩）（**図5**）、アブダクション（仮説推論）と創発的プロセス
- コラボレーションによるデザインの方法・協調設計環境の開発
- 建築における表現行為の解読

### ③環境における人間の行動・認知に関する研究

人間は環境から形・色彩・音・香り・動きなどの多様な情報を獲得し、自らの行動を通して環境への働きかけを行っている。環境に対する基本的ニーズであるアイデンティティ（固有性）とオリエンテーション（定位）に焦点を結び、行動・認知からみた人間―環境系のあり方を探求する。

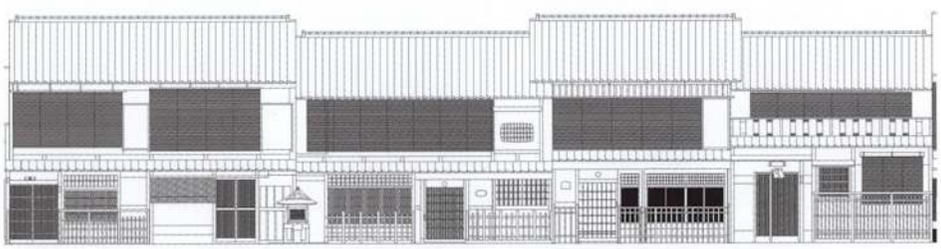


図3　街並みの連続立面図（祇園新橋）

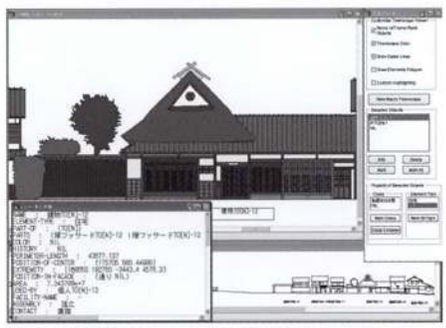
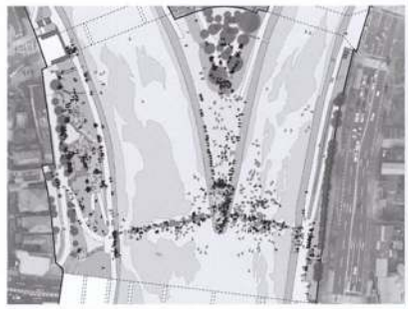
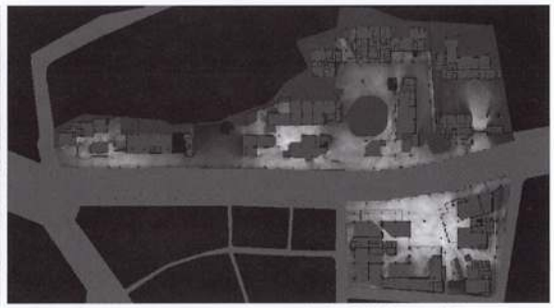


図4　景観との対話システムの構築



図5　創発的プロセスとしてのメタファー


図6　京都・鴨川における人間行動


図7　代官山ヒルサイドテラス可視領域特性の解析

（研究例）
- 建築・都市空間が誘発する人間行動の記号過程の研究（**図6**）
- 環境の知覚・認知、イメージ・記憶、空間図式、様相の研究の研究（**図7**）
- 環境における経路探索とそのシミュレーションに関する研究

**④生活環境のデザインとその評価に関するシステム理論の研究**

人間―環境系としての生活環境は、多種多様な要素の集合からなる総合システムであり、人間を要素として含むダイナミックなシステムである。この複雑なシステムを望ましい方向に導くために、生活環境へのシステム理論的アプローチを多岐にわたって展開する。

（研究例）
- 活動理論に基づく街並みの景観形成の方法に関する研究（**図8，9**）
- アジア歴史都市の居住環境と都市景観のための都市ガバナンスの研究［京都大学グローバルCOE研究］
- 街・人・生活との関係性からみたモビリティの検討［日産自動車との共同研究］
- 都市空間の自己組織化とそのシミュレーション

以上の研究内容を軸に研究を進めているが、具体的なテーマは、学生との対話の中で柔軟に設定している。自分がやりたいことを研究することが、研究を進める上で大きな力になるからである。

**■研究室のアクティビティ**

研究室は、①研究室会議、②大学院生ゼミ、③4回生ゼミ、④プロジェクト、⑤研究会、⑥その他（歓送迎会、飲み会、ゼミ旅行など）によって活動している。

週一度開催している研究室会議は、会議前の出来事についての報告、スケジュールの打ち合わせ、興味深いテーマに関する発表と討論を行うものである。

大学院ゼミ、4回生ゼミでは、博士論文、修士論文、卒業設計の指導を中心に行い、プロジェクトでは学年を超えて、関心を共有する学生たちと共同で取り組む。研究会では、記号論、設計プロセス、データマイニング、ランドスケープなどの理論・方法の研究を進めている。

最近力を入れているのは、異領域の研究者との共同研究である。学術創成研究では、機械工学、生命工学、情報科学等の研究者と「記号過程」の研究を行い、グローバルCOEでは、土木工学・資源工学・環境工学の研究者と「アジア・メガシティの人間安全保障工学」の研究に従事している。

**■デザインの実践**

研究室ではデザインにも力を入れている。私は大学院・助手時代を通じて、実施設計を含む実践に携わっていたので、研究を進める上でも実践の重要性を実感している。その意味では、研究室の学生が卒業設計やコンペで多くの優秀賞を獲得していることは心強い限りである（**図10，11**）。

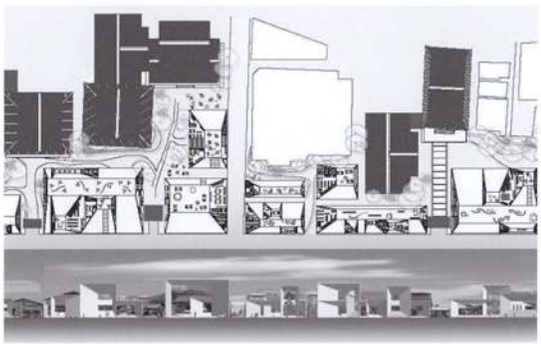
他に、京都市、京都府、鹿児島市、大津市などで、景観・建築・都市行政に関与しており、研究成果を社会に還元することにも注力している（京都市美観風致審議会、岡崎地域活性化ビジョン検討委員会など）。また、まちづくりの現場にも学生たちと共に足を運び、地域の人々から多くを学んでいる（京都市修徳学区、三条通りなど）。

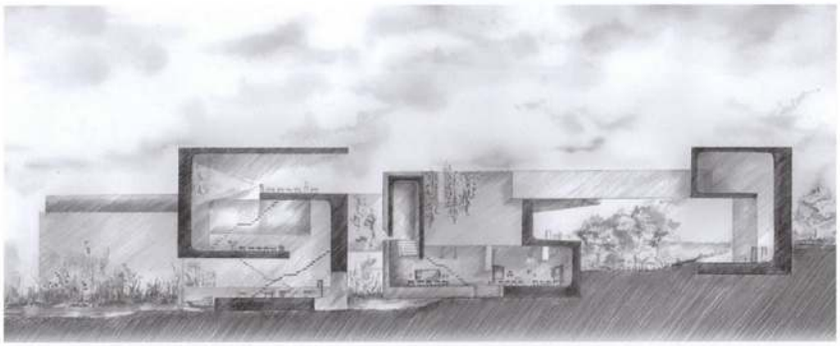
実を言うとお酒が一滴も飲めない私が飲み会にもしっかり付き合い、日頃から学生との対話を大切にし、年に一度は建築・都市を見て回るゼミ旅行にも出かけるようにしているのは、彼らを育てることを密かな楽しみとしているためである。

（文責：門内輝行）


図8　京都市修徳学区におけるワークショップ


図9　3DCGを用いた街並み景観デザイン


図10　太田匠哉「寺町百景」（京都六大展で銀賞）
電気屋街の背後に隠れたお寺の境内を可視化


図11　藤原真名美「Bird's Eye to Bug's Spirit」（京都大学最優秀賞（武田五一賞））
淀川水系の小学校群を水と人間との関係性で関連づける生態学的デザインを展開

まち　建築　ひと

gallery

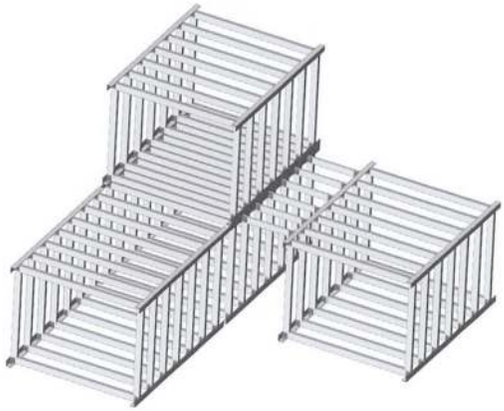
# モノコックの家

構造設計
桝田 洋子

コンクリートと鉄の世界で仕事をしてきましたが、12年前に「木」に出会い、木の世界を知るうちに、構造技術者として取り組むべき問題の多さに愕然となりました。阪神大震災を経て、安全な木造建築のあり方が問われていましたが、木造の耐震設計法は法体系の中に明確に位置づけられていませんでした。一方、森は荒れ、環境の悪化のみならず森林産業の衰退が加速していました。その一つ一つに取り組む中で、一つの回答として仲間と開発したのが、j.Pod工法という木造のユニット工法です。スギの板材をロの字型に一体化したリブフレームをモノコック状に組み立てて箱（Pod）にし、Pod同士をjointして建物にするシステムです。Podの安全性は実大実験で検証済み。伝統構法の粘りを備える強固な箱ができました。現場での組み立ては中ボルトのみなので、解体、再利用も簡単。国産のスギやヒノキを循環して使えるリカレント建築です。このシステムを選択して環境に貢献し、シンプル&コンパクトに暮らしませんかと消費者に呼びかけています。

桝田洋子（ますだようこ）

1984　京都工芸繊維大学卒業
1984-1988　㈲川崎建築構造研究所勤務
1989　桃李舎一級建築士事務所開設
1993　京都工芸繊維大学大学院修士課程修了



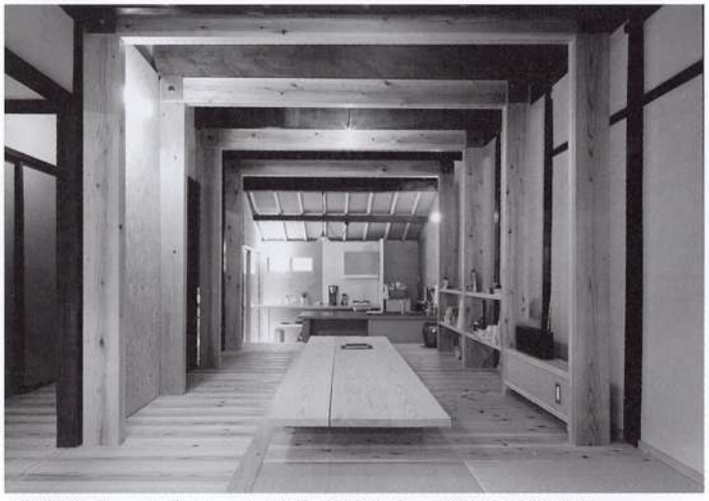


京都大学国際交流セミナーハウス　ロの字型のリブフレームは水平力に抵抗できるので間口方向には耐震壁が不要である。





現場では中ボルトだけで組み立てるので、逆の順番で解体し、移設することができる。仮設建築物に最適だが、本設としてそのまま使える安全性と木質空間の豊かさを兼ね備えている。



豊崎の長屋　リブフレームを耐震補強に使った戦前長屋の改修





Podを耐震シェルターに適用するために、(財)日本建築総合試験所にて鉛直方向と斜め方向からの載荷実験を行っている。住宅の１階に設置すれば、建物が倒壊しても生存空間を確保できる。右上は実験後のシェルター。

図および写真はすべて有限責任事業組合j.Podエンジニアリング
http://www.jpod-eng.com/

企画編集　池上　明(作品作風小委員会)

特集

# まちなかのサードプレイス

住む場所＝第一の場所、働き学ぶ場所＝第二の場所、その経路上に人はひそかに楽しむ第三の場所をつくり出す。第一の場所・第二の場所では多くの役割と責任がかかり、身動きがとれない状況に陥ってしまう、…この閉塞感から逃れるためか。

Ray Oldenburgは、これらの空間から離れて緊張感が解放され、自分の職種や階層にとらわれない人間関係の広がりが得られる機会を持つことの重要性を主張し、家庭とも職場・学校とも異なるパブリックでインフォーマルな空間を「サードプレイス」と呼んだ。

いま「サードプレイス」という言葉は、われわれの耳には何と新鮮に響くことか。日常の生活の中で空間と空間、時間と時間の隙間が身近に感じとられる言葉であるからかも…。

この特集において、まちなかの「サードプレイス」を探ってみたい。

計画系分科会幹事●飯田　匡


●総論

「サードプレイス」考／舟橋國男

●各論

地域と都市の居場所のために～建築・都市の専門家の心構え～／鈴木　毅

オフィスワーカーにとっての「サードプレイス」／林田大作

高齢者の居場所／松原茂樹

●事例

地域のコモンズとしてのサードプレイス～長崎県島原湧水群の共同洗い場より～／吉住優子

ひがしまち街角広場～ニュータウンの空き店舗を活用した地域の「ひろば」～／田中康裕

団地内の空きスペースを活用した地域住民の居場所づくり／飯田　匡・上田明法

まちなかの会員制レンタルオフィス／中村智一

くつろげる移動空間を目指して～新幹線新型車両の取り組み～／影山真佐富

居場所を設計する～吹田市子育て青少年拠点 夢つながり未来館～／北村　潤

●エッセイ

「私のサードプレイス」

吉村英祐／守井　辰／三宅次郎／松田奈緒子／田中直人／紅谷昇平／高橋和也



本号特集企画担当：計画系分科会

飯田　匡／鈴木克彦／田中直人／高橋和也／紅谷昇平／松田奈緒子／三宅次郎／守井　辰／吉村英祐

総論

# 「サードプレイス」考

大阪大学名誉教授

**舟橋國男**

「サードプレイス」の定義・特徴と主な機能

**定義：**

○ places outside the workplace (the second place) and the home (the first place),

**特徴：**

○ informal public gathering place,
○ homes away from home,
○ a public setting accessible to its inhabitants and appropriated by them as their own,
○ the heart of community's social vitality and the foundation of a functional democracy,
○ possibility of pure sociability,
○ voluntary, informal, happily, friendly, open, democratic, comfortable, conversation,
○ free, inexpensive, food and drink, highly accessible, proximate for many, involve regulars.

**主な機能：**

○ uniting the neighborhood, ports of entry, storing areas, staging area, public characters,
○ caring kids and the elderly, mutual aid society,
○ diversity and novelty, the important vestiges of community, perspective.

## ■「サードプレイス」とは何か

今や広く流布している感のある「サードプレイス」(注1)とは何か、隠遁の身ではやむを得ないのだが、筆者には実感が無いのでよく分からないし、懐疑的でもある。

提唱者とされるオルデンバーグは、大略以下のように述べている文(1)。

「多くの人びとの生活にとって社会参加の可能な範囲が、仕事場と住まいというtwo-stop modelに非常に強く制約され、彼らの時間と関心を奪っている。いわば、『子宮』と『際限の無い競争』の間を行き来する」

「多くの人びとの生活の質は、家族と仕事の質に大きく依存してきている」

「このtwo-stop modelの欠陥はかねてより指摘され、コミュニティ感覚の衰退が論じられてきた。コミュニティは本質的には社会的関係性と人間の多様性を経験する機会を提供するが、それこそが仕事場と住まい以外の場所、即ち『サードプレイス』、の活用と自己表出に関わっている」

後に、この「サードプレイス」をthe great good place と呼び文(2)(注2)、それはまたinformal public gathering placeであり、homes away from homeであるとした。

オルデンバーグの言う「サードプレイス」の定義・特徴と主な機能は、おおむね左の**表**の通りと言えよう。

主な事例としては、文（2）の副題に挙げられている、cafes, coffee shops, bookstores, bars, hair salonsや、post office, drug storeにも言及され、さらに文（3）には、上記のほかに、garden shop, main street, shopping mall, churchの事例も紹介されている。当然ながら、「サードプレイス」は、建築物の類型と言うより、その場所の運営者・参加者や実際の運営状態・雰囲気により創出されるものと言えよう。

「サードプレイス」に類似するものとして、例えば、場、場所、居場所、繁華街、ネット上のバーチャルな空間等を思いつく。これらの中では、「居場所」が恐らく「サードプレイス」に最も近い概念であり場所であろうかと思われ、時に同義に用いられたり、いずれかが他方を包含するかの説もある。「居場所」自体が必ずしも厳格な意味も排他的な性格も主張しないので、両者の区別や関係性は紛らわしい。「居場所」について、一般には「コミュニティ」概念やpublicnessを明示的に論じることは少ないかに思われる。もとより、実態として結果的に、その「居場所」の存する近隣や「コミュニティ」との関係が深くなり、それを強く意識して運営されている場合もあろう。さらには、日本の都市に関して論じられている「サードプレイス」が果たしてオルデンバーグの主張するような特徴を有しているかは、甚だ疑問であり、例えば、「サードプレイス」を自称する大手のコーヒーチェーン店のほとんどでも、来客相互の関係性は皆無に近く、それぞれの単なる逃避の場、憩いの場、あるいは多少の仕事の場に過ぎない趣さえも感じられる。

また、例えば、かつての下町でごく普通に見られた「井戸端会議」は、確かにinformal gathering placeではあるがpublic placeとも言えず、何より、職住の分離に起因する「第三」の場所ではない。

近頃流行の「哲学カフェ」や「科学カフェ」も、形こそ「第三の場所」的ではあるが、話題の限定、「コミュニティ」からの遊離など、やはり、**表**に示したような「サードプレイス」の性格は持っていない。

## ■なぜ「サードプレイス」か

ところで、なぜ「サードプレイス」が求められるのか。われわれは、面倒な「他者」との関わりを避け、刺激やストレスから逃避し、もっぱら休息や息抜きなどを求めつつ、しかしその一方で、「他者」との出会いや繋がり、コミュニケーション欲求を持つ。ジェイ・アプルトン文(4)のprospect-refuge theoryに照らせば、これは動物としての人間の本性かもしれない。

しかしながら筆者にとって、オルデンバーグの説に何より特徴的だと感じられることは、その著作のタイトルにも含まれ、**表**にも摘記した通り、community, public setting, democracy, social relationships, sociabilityといったキーワードである(注3) 文(5)。

「サードプレイス」を逃避の場として特徴づける論も見受けられるが、オルデンバーグ

はそれ以上のものであるべきだと主張し、「正常な社会における重要な社会的関係性と経験を提供し、福祉の感覚を保持させ」、ジンメルが言う通り、「pure sociabilityにおいては、最も純粋な民主主義的な経験を得て、個人性の独自の感覚が発揮され、人びとは全く異質であるが真に平等である」とする。

オルデンバーグが「サードプレイス」の必要性と重要性を、これらのキーワードに言及しつつ主張する背景には、アメリカ合衆国の社会的動向に関する社会評論や関連研究において、1930年代頃から指摘され続けてきたという「コミュニティの衰退」があり、これに対する都市社会学者としての危機感と緻密な観察の裏打ちがある。既に1950年初版の名著「孤独な群集」[文(6)]において指摘され、またさらに時を経た2000年にも、政治学者パットナムによる膨大な実証的著作[文(7)]が、「コミュニティ」の「概念的な親戚」である「社会関係資本」をキーワードとして、まさにその副題の通り、「米国コミュニティの崩壊と再生」を論じている。それによると、アメリカ社会におけるコミュニティの崩壊あるいは市民参加の衰退には様々な要因が絡まって単純ではないが、特に大きな影響をもたらしたのは、「世代的変化」であり、次いでそれに重なり合う「電子的娯楽（テレビ）」の普及、「郊外化とスプロール」「時間と金銭面のプレッシャー」とされている。

こうしたアメリカ合衆国の社会的状況を背景とする「サードプレイス」論議は、日本の都市における「サードプレイス」とは当然に文脈を異にすると言えよう[注4]。

今日の日本では、私たちの家庭生活および住まいの著しい私化・閉鎖性が指摘され続けて久しく、さらには、「無縁社会」「匿名」「匿顔」「孤族」といった造語が一定のリアリティをもって受容されるほどに、人びとは退嬰的に引きこもり、引きこもらされている。だがしかし、人は一人では生きることも棺桶に入ることも出来ない存在である以上、決して引きこもり切れるものではない。結果的にそこでは、多くの社会心理学者が指摘するように、「ゆるやかで浅く軽い」関係性を、それならば辛うじて受け入れても良いという状態に陥り、空気を読みつつ巧みなうわべの付き合いがもてはやされている。安手の日本人論に逃げてはならないが、しかし自らを振り返って、私たちはやはりコミュニケーション、会話や対話や熟議が苦手である。沈黙が金であり奥ゆかしい美徳とされ、「和を以て貴し」とされてきたとは言え、価値の多様化を良しとする時代と社会に生きようとし、もしくはそれを築こうとするからには、自らの意見を発し自己を表現し、その価値を訴えねばならなくなっている。「No！と言えない日本人」とも揶揄されたが、「異を唱え」ることは向き合っている「他者」を否定するものではなく、むしろ誠実に対峙することであり、自立した個人同士が共に新しい状況を切り開いていく協働の途である。こうした見方は、正当かもしれないが、いささかアロガントなアメリカ人たちの流儀でもあり、これに染まることを潔しとはしないけれども、しかし、彼らの言う「サードプレイス」を求めるならば、いったんは考えねばならない問題であろう。

もちろん、既に、積極的に社会的活動を模索し取り組み活躍する人びとも決して少なくはないけれども、政治・経済の混迷も相俟って、現在の社会的気候・空気はまさに閉塞的な「巣ごもり」状態である。

こうした状況であるがゆえに、それを乗り越えて日本の現在に相応しい「サードプレイス」のあり方を志向する試みが各方面で見られ始めている、と期待したい。近隣や仕事を取り巻く様々な範疇の「コミュニティ」を活性化し、私たちの生活における真正の社会性を回復し、力強い民主主義を築き上げる展望が切り開かれ得るか、困難ではあるが重要で意義深い課題に直面している。

## ■「サードプレイス」の理解を巡って

オルデンバーグの言う「サードプレイス」が、定常的にいつもの会話等が行われている特定の場所であるとすれば、それは生態学的心理学者ロジャー・バーカーの言うbehavior setting（「行動場面」とも訳される）[文(8)]が成立していると言えよう。ただし、定常性を強調するこの古典的な概念をその後さらに発展させたアラン・ヴィッカーの見解[文(9)]による方が、よりリアルで理解しやすいであろう。すなわち、「行動場面」はいつの間にか自然に形成される所与の静的なものではなく、それを生みだし運営していく人びと（「主」と「客」）[文(10)]の創造的な努力のたまものであり、その「プログラム」が継承されない時には「行動場面」も終焉を迎えるという力動的なものである。当然ながら「行動場面」もより広範な社会的・物理的環境に包含され影響されているゆえ、状況の変化に応える創発性が重要である。「サードプレイス」の成立と持続をこの視点から検討することも有意義であろう。

「サードプレイス」が、産業革命以降の近現代社会における職住分離に起因する、「コミュニティの衰退」に対する処方箋として提唱されているとすれば、職住分離に対するアンチテーゼの一つとして、クリストファー・アレグザンダーのパターンランゲージ[文(11)]から「9．仕事場の分散」を想い起こす。「仕事の分離は人間の情緒生活に計り知れない亀裂をもたらす。……この分裂を克服し、健全な社会の基礎である愛と仕事の結合を再構築するために」「都市全域に仕事場を分散」させ、仕事場と家庭生活がいわば相互浸透する姿を提唱している。それは当然仕事場にも「41．仕事コミュニティ」の形成を求める。そのラジカルなロマンティシズムを筆者は賛嘆しつつも現実性には懐疑的ではあるが、もしもこのような都市の姿を築き得るなら、そこでは「サードプレイス」は新たな意味と形をもって、人びとの純粋な社交性pure sociabilityを楽しみ、生き生きとしたコミュニティを築いて草の根のデモクラシーを支える場として生まれ変わるであろう。

## ■誰にとっての「サードプレイス」か

「サードプレイス」は、一般にサラリーマン等の通勤勤労者を主たる対象者に想定して論じられることが多いが、では、その他の属性の場合、例えば、無職の人、職住一体の人、いわゆる「専業主婦」、住まいの無い人、老人や子ども等々、ファーストまたはセカンドプレイスのいずれかを、持たない・持ち得ない・疎外されている人びとにとって、「サードプレイス」とは一体何だろうか。特に、現在深刻な無職や無住にとっては、「サードプレイス」論議以前に職と住を持ち得ることが何より先決であることは論を俟たない。

そうした状況におかれている人びとは、社会のいわば「現場」から隔離されてしまいやすいがゆえに、もし「サードプレイス」が単なる憩いの場ではなく、人びと相互の真正のコミュニケーションの機会と場を意味するものであるならば、彼らこそより一層強く「サードプレイス」を求めているに違いない。その充足は多くの人びとが有する本来のポテンシャルを発揮させ得るはずであり、社会にとっても重要な課題の一つであるだろう。既に現在でも、どこの地域においても、社会福祉協議会やいわゆる「コミュニティ」センター等をはじめとした様々なNPOやボランティア団体等によって、例えば老人や子育て中の親たちに関わる各種の活動等に熱心に取り組まれている。遺憾ながら、筆者の仄聞するところ、関係者の真摯な善意の努力にもかかわらず、おおむね目的的で閉鎖的な場であるかに見受けられ、publicな「開かれた場」をつくることの難しさを痛感する。

なお、老人や子どもたち、さらに一般的に女性たちは男性に比し、他の人びとが築くどのような「サードプレイス」であれ、参加しやすくより受け入れられやすい属性であり、彼らの「活躍」を促す仕組みが望まれる。

## ■「サードプレイス」はつくれるのか

ところで、建築やまちに関わる者にとって、「サードプレイス」は誰がどこにどのように「つくる」のかという問いは恐らく関心事の一つであろう。だが、そもそも「サードプレイス」をつくる必要があるのか、つくれば良いのか、つくれるのだろうか。

言うまでもなく、ファーストプレイスたる住まいや居住地も、セカンドプレイスたる職場も総じて貧困であり、「サードプレイス」をいかにつくるかよりも、まずは何よりもファーストおよびセカンドプレイスを、人間の尊厳に相応しい生活環境に整え充実させることが重要である。もしも、現在目の当たりにしているそれらの貧困を棚に上げて、「サードプレイス」のみをうんぬんするならば、本末転倒も甚だしいと言わざるを得ない。ただし人間の全体性から観て、「サードプレイス」の充実による精神的な充足が他の二つの場所とそこでの生活を豊かにさせ得る可能性はあるから、たとい逃避の場としてであれ「サードプレイス」が無意味であるとは限らず、それをしも、強く求めるゆえん無しとはしない。

昨年末、日本建築学会にしては珍しい好著『居場所をみつける／つくる』[文(12)]が出版された。タイトルの通り、直接的な主題は「居場所」であるが、これに関連の深い「サードプレイス」を考える上でも非常に示唆に富み、有益である。ぜひご一読をお薦めしたい。そこでも論じられているように、意味深く興味深い「居場所」は、いわば「素人」が彼ら自身の必要性と想いに駆られて「つくり出し」ており、いわゆる「専門家」は少なくとも場所の生成には無関係である事例が多い。近代のgrand narrativeに基づく在来の建築観や法定の都市計画にとらわれている「専門家」は無用であるが、彼らが不勉強で無能であるというよりも、それ以上に、「素人」が「素人」でなくなりつつあると言え、広原盛明[文(13)]がその慧眼をもって展望した通り、建築の計画や設計が徐々に市民の「日常生活の延長線上にある『教養文化』の領域に接近し」つつあることは明らかである。

その意味で、2010年度建築学会大会建築計画部門研究協議会「『利用』の時代の建築学へ：建築計画にとって何が課題になり得るか？」[文(14)]は、いくつかの刺激的な論考は含まれているものの、その主題の措定自体の的外れおよび副題の無意味さを感じないではいられない。新築需要が減って既存建築物が余っているから、それらを有効に「利用」する時代であり、そこでは何が課題だろうか、という問いの発想自体に、その裏側には、依然として、モノをつくる専門家を自負する建築界の人びとの宿痾（しゅくあ）がある。以前にも紹介したが、建築デザインとその教育のあり方を糾弾するエイムズ・ラポポートの議論[文(15)]や、「利用者」像の再検討を試みているマリー・ギーの論考[文(16)]を参照されたい。

この時代に「専門家」とは何か、彼／彼女は一体何を成し得るか、起案し指導し提供する者ではなく、人びとに「寄り添い」「伴走する」者であるという表現が、かなり烏滸（おこ）がましくはあるが、多少の意味を持ち得るのかもしれない[注5]。

（ふなはし　くにお）

注1：「サードプレイス」を「第三の場所」と直訳すれば、「第三」が含意する非当事者性、気楽さ、無責任さを感じてしまう。

注2：ヘンリー・ジェイムズの短編「The Great Good Place（いとよき所）」（1900）との関連は不明である。

注3：筆者には、英語のcommunityやpublicそれぞれの意味も両者の関係もいまだに明晰ではない。文（5）は、政治学や社会学ではなく「環境行動論」分野の論考であり、興味深く参考にはなる。

注4：日本に関する実証的・理論的研究も多数行われていることと想定されるが、それらを渉猟する暇が無いままに、今、呻吟愚考している不明をどうか恕隠いただきたい。

注5：かつて医学哲学者中川米造は、科学者を「観察者」、技術者を「支配者」、医師を「援助者」と措定した。筆者はその医師像に共感しつつも、そこに潜んでいる傲慢さをやはり堪え難く覚える。

**参考文献**


（1）Ramon Oldenburg and Dennis Brissett (1982), The Third Place, Qualitative Sociology, Vol. 5, No. 4, pp. 265-284

（2）Ray Oldenburg (1989), The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community, Paragon House

（3）Ray Oldenburg (ed.) (2001), Celebrating the Third Place: Inspiring Stories About the "Great Good Places" at the Heart of Our Communities, Marlowe & Company

（4）Jay Appleton (1975), The Experience of landscape, John Wiley.

（5）Michael Brill (2001), Problems With Mistaking Community Life for Public Life, Places, Vol. 14, No.2, pp. 48-55.

（6）デイヴィッド・リースマン、加藤秀俊（訳）(1964)、孤独な群集、みすず書房

（7）ロバート・D・パットナム、柴内康文（訳）(2006)、孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生、柏書房

（8）Roger Barker (1968), Ecological Psychology: Concepts and methods for studying the environment of human behavior, Stanford University Press.

（9）アラン・ヴィッカー、安藤延男（監訳）(1994)、生態学的心理学入門、九州大学出版会

(10) 田中康裕 (2007)、主がしつらえる地域の場所に関する研究、大阪大学学位論文

(11) クリストファー・アレグザンダー、平田翰那（訳）(1984) パターン・ランゲージ：町・建物・施工、鹿島出版会

(12) 日本建築学会編 (2010)、まちの居場所をみつける／つくる、東洋書店

(13) 広原盛明 (1997)、建築計画学における周期変動論、建築雑誌、1997.8, p.47

(14) 日本建築学会建築計画委員会 (2010)、「利用」の時代の建築学へ：建築計画にとって何が課題になり得るか？
2010年度日本建築学会大会建築計画部門研究協議会資料

(15) Amos Rapoport (1992), Interview with Amos Rapoport, Architecture and Behaviour, Vol. 8, No. 1, pp. 93-102.

(16) Marie Gee (1994), Questioning the concept of "user," Journal of Environmental Psychology, 14, pp.113-124.



中安智子「ゆめいろ」
子どもたちが自分で自由に迷路をつくることのできるキット。分譲マンションの一画に生まれた子育て支援室を、より魅力的な居場所とする試みである佐竹台スマイルプロジェクトで提案された
（撮影　中安智子）

各論1

# 地域と都市の居場所のために

## ～建築・都市の専門家の心構え～

大阪大学大学院工学研究科
准教授

**鈴木　毅**



レム・コールハース「シアトル中央図書館」
落ち着ける都市の居間であると同時に、斜めの幾何学構造越しに周囲の風景を見せることで、ここではないどこかへ繋がる場としての図書館の性格を強調している

### ■居場所と出番

「なんとなかならんかなぁ」「……民主党ですか？」――最後のM－1グランプリ決勝、スリムクラブ真栄田の絶妙なボケのネタにされた民主党だが、2009年10月26日の鳩山内閣総理大臣による所信表明方針演説で示された大きな方向性は今も有効であり、なかでも「居場所と出番のある社会」という目標は、政府や行政というより、現場の当事者たちによって大きな動きになりつつある。

居場所という言葉は地域・都市環境の一つの要素・概念として定着したと言ってよいだろう。バブルに向かう1980年代後半、再開発によって生まれる数々の鳴り物入りのプロジェクトにもかかわらず「街はきれいになったが居場所は増えていない」という問題意識のもと、居場所や人の居方について考え始めた頃と比べると、隔世の感がある。

### ■当事者が創るまちの居場所

実際、新聞の地域欄を見ていると、ほとんど毎日のように居場所的スペースが各地に生まれつつあることがわかる。コミュニティカフェに代表されるこれらの居場所は、当初の目的は様々であるが、気軽に立ち寄ることができ、多様な社会的接触・交流が可能で、地域の拠点的な役割を持つ点で共通している。

究極の住居形式だと思われたワンルームマンションに対し、近年シェアハウスが広がりつつあるように、地域においても人々はまた他者とのつながりを求め始めているように見えるのである。

宮台真司氏は、イタリアのスローフード運動、カナダのメディアリテラシー運動、アメリカの反ウォルマート運動のような、他の先進国で生まれた〈生活世界〉を保全するオルタナティブな〈システム〉を目指す運動、言い換えれば「共同体の共和」によって成り立つ「社会の分厚さ」を保つ運動は日本になかったとしているが、近年の日本の地域の居場所づくりの動きは、これらに匹敵する運動になりつつあるのではないか。

居場所的スペースの特徴の一つは、いわゆる地域施設のように行政や専門家主導ではなく、地域の当事者が自ら開き運営している例が普通であることだ。もちろん現在は政府や自治体、さわやか福祉財団のふれあいの居場所推進プロジェクト等による支援もあるが、それはむしろ後付けであって、その多くは、やむにやまれない思いを持った個人・当事者によって日本の各地に同時多発的に誕生し、運営されているのである。居場所はこの当事者＝場所の主（あるじ）抜きには語れない。

われわれの研究室が昨年度参加した佐竹台スマイルプロジェクトも、千里ニュータウンの佐竹台住区の府営住宅の建て替えの際に、地域からの要望によって分譲マンションに設置された子育て支援スペースに対し「これは、地域の皆が考えていたものとは違うでしょ。もっと魅力的で有効な場として使えるはず」という一人の主婦の思いが自治会や吹田市、専門家を巻き込んで生まれたものである。

もはやセンスのある市民は、「住民参加」という言葉や、抽象的な「住民主体」という概念が完全に古くさく感じられるほど、構想力と実行力を持っているのである。

### ■専門家は何をすればいいのか

居場所は、生活環境の再構築や都市デザインにとって重要なテーマになりつつあり、建築や都市の専門家もこの営みに参加することを求められているわけだが、一つ厄介なのは、こと居場所に関する限り、しばしば専門家より当事者の方が詳しいことである。

いつも例にあげる千里ニュータウンの「ひがしまち街角広場」の主である赤井直さんがその代表だが、居場所的スペースを運営している当事者の方が、こうした居場所の質とそれを保証する設えのあり方（家具の選び方と配置、掲示物はじめ場の質に影響する運営の仕組みもろもろ）について、建築の専門家よりもずっと明確なポリシーを持っているのである。このように当事者の方が専門家より詳しく、自ら居場所をつくり出す時代を迎えた現在、われわれ専門家はどう考え、何をすればよいのか。

### ■居場所自体は計画できない

何よりもまず、居場所自体は計画・デザインするものではないということを認識した方がよい。いくつかの省庁が居場所を「設置す

る」計画を進めているが、どう考えても違和感がある。居場所は「設置できる」ものではなく、最終的には、個人個人が環境の中から見いだし、獲得して成立するものであろう。従って専門家の役割としては、居場所になりやすい空間や施設をつくること、また無味乾燥な施設や空間を居場所にするためのサポートをすることが課題となるだろう。

## ■様々なタイプの居場所

次に居場所的スペースには、いわゆるまちの居場所の他に、以下のような様々なタイプがあり、それぞれ重要であることを理解する必要がある。

**●止まり木的な居場所**　居場所というにはおおげさかもしれないが、鳥にとっての止まり木のような、しばし座れる場所は都市空間が自分のものに感じられるためにも極めて重要である。心地よく座れるベンチや椅子はまだまだ少ない（むしろホームレス対策のために減らされる傾向がある）。

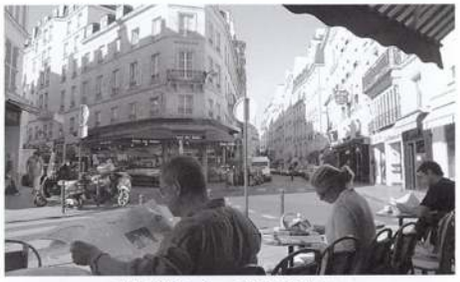
**●切実な居場所**　もともと居場所という概念が社会に登場したのは、不登校児童のための居場所としてのフリースクールがもっとも早い例である。ケアの必要な高齢者や障がい者学童など、そこがないと生きることさえ困難な人たちの拠点となる切実な居場所は、今後も生まれてくるだろう。

**●別の世界につながる居場所**　居場所は、外部に対して閉じた空間になってしまうことがある。切実な居場所としての質を確保することは重要であるが、次の段階として他者や社会、都市へとつながっていくことのできる居場所も必要である。

これらの各種居場所の計画やデザインを、建築や都市の分野はどのように受け持てばよいのだろうか。切実な居場所やまちの居場所について、当事者が気づかない場所の質をデザインすることも十分ありうるが、空間をあやつる専門性という意味では、止まり木や、別の世界につながる居場所のデザインを当面担当すべきではないかと考えている。

## ■居場所と文化

スターバックスがサードプレイスという概念を普及させ、人々がカフェを語る時、おしゃれで演劇的な場としてより、そこで過ごす時間の質について語るようになって久しいが、よくよく観察してみると、カフェの利用は国や文化ごとにかなり違っている。たとえば、われわれの調査によれば、日本の主婦の場合は、いわゆるサードプレイスというより、現実逃避の場として利用するパターンが多い。



**パリのビュシー通りのカフェ**
それぞれが思い通りに居られる場所



**インドネシアの縁台的空間バレバレ**
スラヴェシ島の都市マッカサルの沖合にあるLaeLae島のバレバレ。オーナーが自分の家族のために置くが、島の誰がいつ利用してもよいコモンズ的なスペースである

こうした傾向は固定的なものではなく、時代とともに変化するが、ある場所での振る舞い、どのような社会的関係を結ぶかについて、相当文化差があることを理解すべきである。

## ■ネットの中のリアルな居場所

ネット空間は、既に多くの人にとってリアルな居場所である。たとえば、同時にアクセスしていなくても、皆が居合わせ参加している感覚を持てるようにデザインされたニコニコ動画・生放送は、誰でも参加して自由な議論ができる場であるばかりか、他者をリスペクトしつつ、音楽や映像を共同で制作し、新しい価値を生み出しつつある点で、既に日本社会の基本インフラになったと言ってよい。

いわゆるSNSも含めて、今後の地域環境の計画はこれらを前提として、あるいは組み込んで考えられていくべきである。

## ■既存の計画での位置づけ

まちに居場所を生み出す動きは大きな流れになりつつあると書いたが、課題は沢山ある。たとえば、既存の地域計画や建設活動と必ずしも連動していないことである。

先日話をうかがった千里ニュータウンのある住区の女性は「千里に引っ越してきて、前に住んでいた町に比べあまりに寂しいので、集合住宅の建て替えの機会に、本のある、人の集まれるスペースが欲しいと意見を出していたのですが、打ち合わせの議論の中でいつのまにか消えてしまいました」と残念がっておられた。

集合住宅の建て替えは、住居以外の機能を近隣センターだけにまかせてきたニュータウンにとって、地域に新たな場や機能を組み込む絶好の機会のはずだが、現在、千里ニュータウンに建つのは共用施設は集会室のみの普通のマンションがほとんどである（サロンやおひさまルームを組み込んだ佐竹台のケースは数少ない例外である）。実験都市千里の精神はどこにいってしまったのだろう。

## ■おわりに

日本が未曾有の事態を迎えた今、地域社会や都市空間における居場所を再構築することはますます重要な意味を持ってくるだろう。様々なタイプの居場所を、それぞれ誰がどのように立ち上げ、デザインし、運営するのか。当事者と、幅広い専門家だけでなく、われわれ自身が当事者になる可能性も含め、新たな主体や職能も加わった意義ある試行錯誤と挑戦が始まろうとしている。


**文献**

1）日本建築学会編「まちの居場所」東洋書店、2010
2）ライフスタイル研究会編「住まいのりすとら」東洋書店、2010
3）拙稿「人の居方からみる環境」現代思想、1994.11
4）東浩紀・宮台真司「父として考える」NHK出版生活人新書、2010
5）鈴木毅、隅谷維子他「『好きな場所』にみる人と環境の関わり方の研究」、日本建築学会大会学術講演梗概集、2000
6）江藤道子「日常生活におけるカフェの場所性に関する研究―主婦のカフェの使いこなし方―」大阪大学卒業論文、2011
7）濱野智史「アーキテクチャの生態系」NTT出版、2008
8）拙稿「人々の接触と相互認識を支援する仕掛けとしての場所」（2010年度日本建築学会大会建築計画部門 研究協議会資料「利用」の時代の建築学へ）



（すずき　たけし）


※佐竹台スマイルプロジェクトSSPの概要は以下を参照されたい。http://satakedai.exblog.jp/




図9
寄藤文平氏による
マナーポスター
(2008年5月，東京メトロHPより)




図10
寄藤文平氏による
マナーポスター
(2011年1月，東京メトロHPより)

各論2

# オフィスワーカーにとっての「サードプレイス」

大阪工業大学准教授

林田大作

## ■「サードプレイス」と呼ばれる場所

「サードプレイス」と呼ばれる場所が日本に出現したのは1990年代後半であり、1996年のスターバックス日本1号店（銀座）の出店後、店舗数は確実に増加し、同種の店舗も増加した。同時に、これらの店舗を利用することは、日本のオフィスワーカーの都市生活に急速に溶け込んでいく。出・退勤時、移動時間、社外打ち合わせの前後、これらの店舗を利用するオフィスワーカーをよく見かけるようになった。

1990年代後半は私もオフィスワーカーであり、これらの店舗を頻繁に利用したが、何十回目かの利用のとき、「ふらふらと目の前にある店舗に入る場合」と「しっかりした足取りで決めごとのように決まった店舗に入る場合」があることに気がついた。さらに、いつも利用する店舗があることにも気がついた。私の都市生活には既に「ある特定の店舗を利用すること」が溶け込んでいた。もちろん、その店舗が「私のサードプレイス」であるという認識はなかったが。

「サードプレイス」という概念を初めて提示したのは、都市社会学者Ray Oldenburgである。彼は「人間には、住む場所＝第一の場所、働く場所＝第二の場所、遊び心にあふれ、家庭のように快適で楽しめる場所＝第三の場所が必要」と述べ、人間（ここではオフィスワーカーを想定）が必要とする「サードプレイス」としてカフェなどを示している[注1]。注意したいのは、「ある空間がサードプレイスである」のではなく、「ある空間がある人にとってはサードプレイスになる」ととらえている点である。さらに注意したいことは、サードプレイスとして示した空間はカフェだけではなく、書店、バー、ヘアサロンなどを含む「行きつけの場所」である点である。カフェはもちろん「サードプレイス」と呼ばれる場所であるが、カフェという建築・都市空間がサードプレイスとして計画される（つくられる）のではない。都市を生きる、ある生活者によって生活の一部として頻繁に利用され、その人特有の空間利用が起こったときに、その空間がその人にとってサードプレイスと呼べる場所に「なる」のはないだろうか。

## ■オフィスワーカーの第二の居場所

「オフィスワーカーの居場所はオフィスである」と言い切ってしまうと実も蓋も無いだろうが、オフィスワーカーは一日の大半をオフィスで過ごすのだから、この主張は一理ある。オフィスは仕事をするための場所であり、企業においてはオフィス環境の合理性・生産性・居住性が企業の業績と求心力に影響し、企業への愛着にもつながっていく。

ところが、このようなオフィス環境でバリバリ仕事をして、企業の業績と求心力を支え、愛着さえ感じているオフィスワーカーでさえ、つかの間仕事や仕事上の立場から逃れ、「素の自分」に戻りたいと思ってしまう。

また、「オフィスは工場であり、生産する場である」「創造的な発想は、むしろ通勤電車の中や、自宅のトイレや風呂の中で生じる」「短時間しかとれない場合は、まちなかのカフェの方が仕事がはかどる」などの告白を聞いたこともある。これは、「工場だから適当にリフレッシュタイムを設ける」「身体的・精神的にリラックスした状態の方が創造的な発想が生じやすい」「ある程度追い込まれた状態の方が逆に集中力が上がる」などと説明できるが、「オフィスワーカーの仕事や仕事上の立場はオフィスにとどまらず、まちなかや自宅にまで持ち出されており、オフィス以外の空間においても頭のどこかに仕事があるから、通勤電車の中、自宅のトイレや風呂、まちなかのカフェなどで仕事が進む」という説明も間違いではなかろう[注2]。

ある時は仕事や仕事上の立場から逃れるため、ある時は仕事や仕事上の立場を持ち出し、オフィスワーカーは第二の居場所を求めて、まちなかに出没し、自宅に帰ってゆく。Ray Oldenburgを真似るならば、「オフィスワーカーには、働く場所＝第一の場所、仕事や仕事上の立場から逃れ、あるいは仕事や仕事上の立場を持ち出せる場所＝第二の場所が必要」と述べられる。そして、「第三の場所」＝「サードプレイス」として、上述した「サードプレイス」と呼ばれる場所や「まちなかの居場所」が必要であり、オフィスワーカーはそのような要求を抱えながら都市生活を送っている。

注1）「Ray Oldenburg：The Great Good Place，MARLOWE & COMPANY New York，1999」より。わが国においても、磯村英一（1959年）による「第三空間論」、鳴海邦碩（1999年）による「第三の環境」などの類似の議論がある。

注2）林田大作，他：環境移行に伴う職場周囲の場所構築の変容に関する研究―神田地域から品川地域への職場移行をケーススタディとして―，日本建築学会計画系論文集　第576号，2004年2月

## ■まちなかに「居る」ことの意味

人間には第一の場所として「住む場所（住宅）」が、オフィスワーカーには第一の場所として「働く場所（オフィス）」が必要である。「人間が住宅に居る」「オフィスワーカーがオフィスに居る」という図式は、建築の計画・デザインに携わる場合に非常に考えやすい。それぞれ「住空間と居住者」「オフィス空間とオフィスワーカー」というように、「利用される側と利用する側」に変換しやすい。そして、たいていの場合、利用される側である建築を「もの」、すなわち「物体」として扱う。すると、相対的に利用する側である「ひとの行為」が浮かび上がりやすい。「人間が住宅に居る」「オフィスワーカーがオフィスに居る」という図式から、いくつもの生活場面を自らの経験から引き出してイメージできる。例えば「食べる」や「会議をする」という行為が、住居やオフィスの一部である「ダイニングのテーブルの上」「会議室の机の上」で起きていることは容易にイメージできる。

しかし、「サードプレイス」と呼ばれる場所や「まちなかの居場所」に関して、「ひとがまちなかに居る」という図式から、このような「もの」と「ひと」の関係や「ひと」の行為をたやすくイメージすることができるだろうか。カフェならばイメージしやすいのかもしれない。「お茶を飲む」という行為がカフェの一部である「コーヒーテーブルの上」で起きている、と。しかし、単に「お茶を飲む」という行為が問題ならば、住居やオフィスの方が「お茶を飲む」という行為が浮かび上がりやすく、はるかに自由度がある。

「サードプレイス」や「まちなかの居場所」に関しては、利用される側である建築や都市を「もの」として扱い、相対的に利用する側である「ひとの行為」を浮かび上がらせるだけでは不十分である。「ひとがそこに居る」ことの意味を読み取り、空間とひととの間にある親密な関係性を読み取り、その関係性をアフォードする空間の物的要素と社会的了解を読み取らなくてはならない。

## ■居心地の良い場所

オフィスワーカーの「居心地の良い場所・悪い場所」調査（2001年）でもカフェは上位に挙げられる。「なぜそのカフェが居心地が良いのか？」という問いの回答として、「長居できるソファがある」「照明がちょうど良い（**図1**）」などの空間の物的要素、「禁煙」「いつものマスター（**図2**）」などの管理者が設定する利用ガイドラインや管理者自身に関するもの、「みんなきまま（図1）」などの他者との社会的了解が挙げられる。「学生時代にそのカフェでアルバイトをしていて慣れている（図2）」からは、空間とひととの親密な関係性がうかがえる。

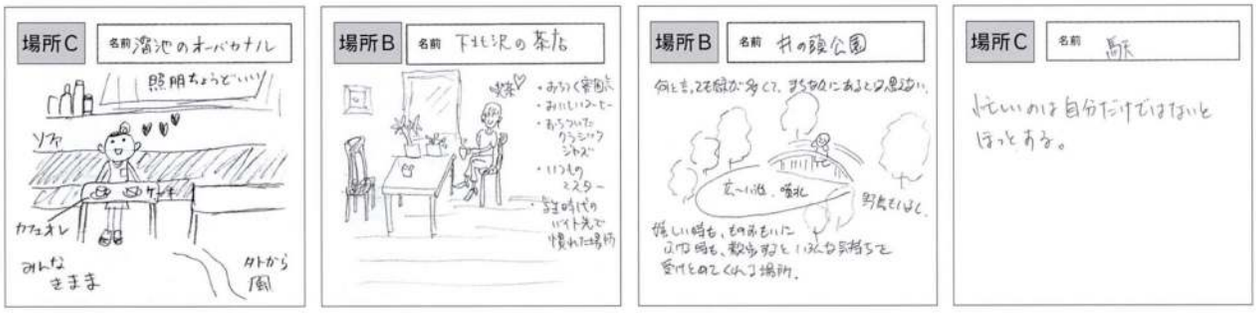
その他、公園（**図3**）や駅（**図4**）などもオフィスワーカーの「居心地の良い場所」となる。まちなかにおける身近な自然の重要性や、見知らぬ他者との社会的了解が存在していることがうかがえる。

## ■居心地の阻害

「居心地の悪い場所」からは、空間とひととの親密な関係性はうかがえず、居心地の阻害要因が抽出された。「携帯電話で話している高校生（**図5**）」「迷惑なゴミや自転車（**図6**）」「路上でのくわえ煙草（**図7**）」など、他者の利己的行為が問題となり、社会的了解の一線を越えている。そのような行為をアフォードする空間の物的要因が存在することや、管理者や利用のガイドラインの不在、または機能不全も問題であろう。空間の物的要素が主たる居心地の阻害要因となる場合（**図8**）もあるが、この場合は注意深く建築・都市の計画・デザインをすることで、ある程度解決できる。

居心地の悪い場所には誰しも行きたくない。しかし、オフィスワーカーはほぼ毎日通勤しなくてはならず、通勤経路や通勤電車を避けることが難しい。そのため、空間を共有する他者との間の社会的了解に呼びかける取り組みも見られる（**図9、10**）。「居心地の悪い場所」における居心地の阻害要因の除去は重要であるが、同時に都市生活者一人ひとりが、建築・都市の利用という感覚を超えて、まちに自分たちの「サードプレイス」をつくり、維持・管理していくような社会的了解を形成することも望まれているのではないだろうか。

（はやしだ　だいさく）


場所C
名前 溜池のオーバカナル
照明ちょうどいい
ソファ
ケーキ
カフェオレ
みんなきまま
タバコ風
場所B
名前 下北沢の茶店
・あいく家風
・おいしいコーヒー
・おうついたクラシックジャズ
・いつものマスター
・学生時代のバイト先で慣れた場所
場所B
名前 井の頭公園
何とも、その緑が多くて、まちなかにあるとの思えない。
広い池、噴水
野鳥もいる。
悩んでいる時も、その景色に
元気をもらってくれる場所。
場所C
名前 自宅
忙しいのは自分だけではないと
ほっとする。
場所C
名前 通勤電車（朝）
ギュウギュウに押しこまれて、
イヤホンとぴったりくっつく携帯が
カチッとキキケンない。
電車の中でも ケータイで話してる
高校生とかもタクシー。
場所A
名前 高田馬場駅付近（早稲田通）
ゴミ
自転車
早稲田通
駅から家の帰り道、
歩道に点字ブロックがこのところに
敷いてある。駅へ行く流れが多を使っているが、
残りの1/3はゴミや自転車が置いてあって通りにくい!!
場所C
場所の名前 天神橋からの道
・会社にもうすぐ着くというかうつ感。
・くわえタバコの人が多くていや。
場所B
名前 ホワイティうめだ（阪神梅田）
阪神梅田駅
阪神百貨店
梅田駅
女上A
男
男
男

各論3

# 高齢者の居場所

大阪大学大学院工学研究科助教
博士(工学)

**松原茂樹**

## ■居場所の種類

高齢者は住み慣れた地域で長年過ごしてきたので、多くの居場所を持っている。隣近所の人と井戸端会議をする道路・路地、友人と一緒に活動するサークル、自治会など同じコミュニティに暮らす高齢者が集うサロン、マスターや常連と談笑することができる喫茶店や飲み屋などがある。住み慣れた地域に多くの居場所があるからこそ、そこで最期まで暮らし続けることを望んでいる。しかし、高齢者は身体能力の低下や精神状態の変化、さらには介護が必要な状態になることにより居場所を喪失してしまう。住み慣れた地域で居場所を保ち続け、さらには新しい居場所を持つためにはどうすればいいのだろうか。

居場所の意味・類型は様々な分野で研究が行われている。藤竹による居場所の類型を引用すると、居場所には人間的居場所と社会的居場所がある[文1]。人間的居場所とは「自分であることを取り戻すことのできる場所」であり、「そこにいると安らぎを覚えたり、ほっとすることのできる場所である」。要は自分の身の置き所である。たとえば1人きりになれる個室や、家族を他人と意識していなければ家庭が挙げられる。「つきつめると、自分以外の人間かいるか、いないかとは関係がない」居場所である。社会的居場所とは、「自分が他人によって必要とされている場所であり、そこでは自分の資質や能力を社会的に発揮できる場所である」。例えば家事をする役割を担っていれば家庭であり、サークル活動をしていればサークル活動の場所であり、親しい友人と出会う場所である。すなわち他者との関係の中で成立する場所であり、1人がいくつも抱えている場所である。同じ物理的な場所であっても、他者との関係や役割によって変化する場所である。

これら居場所は2つとも必要不可欠な場所であり、それぞれが独立しているものではなく、相互に影響を及ぼしあう関係にあり、「人間的居場所は社会性の弱い居場所であるけれども、私的空間を形成し、社会的居場所で感じる緊張を解放する場所として、人間にとって不可欠の場所である」と述べている。

## ■高齢者の居場所を支える要素

住み慣れた地域にある居場所とは、社会的居場所である。高齢者が社会的居場所を確保するためには2つの要素、社会性と空間性が必要である。ここでは「ケア」と「環境」に解釈し、それぞれの内容を述べていく。

ここでは明確に「介護」と区別した意味で「ケア」(care)を用いる。広井によると「ケア」には多彩な意味があり、①「介護」「看護」②中間的なものとして「世話」があり、③広くは「配慮」「関心」「気遣い」という広範な意味を持つ概念である[文2]。また英和辞典でも「関心」「配慮」「注意」「世話」「保護」「介護」といった意味が記されている。このように「ケア」には広範な意味があり、高齢者にとって技術的な「介護」以上に「ケア」を受けることが重要である。認知症や身体能力の低下により今までの自分との葛藤を抱えている高齢者は、今まで以上に他者からの「配慮」や「気遣い」すなわち「ケア」を必要としている。また「ケア」は決して一方通行のものではなく、お互い心の通った人間同士の心のやりとりであり、双方向のものである。「関心」「気遣い」の意味を持つように、高齢者は「ケア」を受けるだけでなく、「ケア」を相手にも行い、それを受けて相手もまた「ケア」を行い、それらを繰り返すものである。その結果として、他人との関係が強く表れる居場所が形成される。

次に高齢者の居場所として必要とされる「環境」に注目する。ここでの「環境」とは、ひと言で説明すると「人を取り巻く総体的な環境」である。まずは物理的空間が存在する。さらに空間だけでなくイス、テーブル、趣味で利用するものなど、様々な家具や物に囲まれている。これら物理的環境に囲まれていることが居場所の構成要素の1つである。また居場所の構成要素の1つに社会的環境も含まれる。社会的居場所では他者の存在は欠くことができない。直接会話する他者や、同じ空間には居るが距離をおいている他者など、他者との関わりの程度や、さらには「ケア」の有無や「ケア」を行う者の資質にかかわらず、他者が存在しているからこそ居場所となっている。ここで言う他者とは、どのように当事

引用文献
文1　藤竹暁、居場所を考える、現代人の居場所(藤竹暁編著)、至文堂、2000
文2　広井良典、ケアを問いなおす－<深層の時間>と高齢化社会、筑摩書房、1997
文3　Bayley, M Mental Handicap and Community Care Routlege Kegan Paul 1973

者と関わるのかは問われず、同一の空間に存在しているかが問われるだけである。さらにはその背景を読み解くと、多数の人が使う物理的空間では、規範やルールが存在する。こうした居場所を構成するには欠かせない目に見えない環境も構成要素の1つである。ここでは、これらを「環境」と定義する。

介護保険のデイサービス事業である宅老所Aで観察された、ある高齢者の居場所の例を以下に紹介する。宅老所Aは、京都府京都市の中心部から最寄りの駅まで電車で1時間を要する農村の集落にある。住んでいた人が特別養護老人ホームに入居して、空いた農家を転用した（**図1**）。定員は8名で、近隣の集落の高齢者を対象とし、1日3・4名の介護職員が担当している。改修は最低限にとどめ、「ドマ」に床を張り日中の介護で必要になる浴室、便所、台所といった水回りの改修を行った（**図2**）。田の字型の間取りはそのまま残し、各室にデイサービスの所要室を割り当てているが、各室の用途や規範もできる限り残している。たとえば「ダイドコロ」は家族




**図1　宅老所A改修前**　平面図1：200




**図2　宅老所A改修後**

全員が過ごす場であり、座の位置も主人の座（図1①）や女の座（図1④）と決まっている。それに対応する機能回復訓練室は、調査の結果、日中のほとんどを過ごす場であり、また一部利用者は「ダイドコロ」の用途や規範を守った過ごし方をしている。

70歳代認知症の女性Bさんは、集落のはずれで農業をして暮らしていたが、Bさんに認知症の症状が出始め高齢の夫だけでは世話ができないため、宅老所Aに毎日通い始めた。認知症が出始めた当初は夫が外で仕事をしていてBさんが自宅で何もしていないと、突然外に出たりすることがあった。宅老所でも何もしていないとそわそわして家の中を歩き回ったり、外に出たり、落ち着きをなくすことがあった。

同じ村で以前から顔見知りであった介護職員は、Bさんが今まで家事を丁寧にしっかりと行ってきたことを知っていたので、Bさんに料理や洗濯などの家事をお願いすることにした。この介護職員は一つひとつ作業の指示を出さないといけないが、Bさんは作業をしている間はそれに集中している。またBさんは昔からの住宅の規範にもこだわっている。女の座にしか座ることはせず、介護職員が主人の座などに座るよう言っても拒否する。作業の合間には土間と畳の間の境界の段差に腰掛けて仕事がないかと探している様子だ。

Bさんにとって宅老所Aが社会的居場所になった要因を考える。宅老所Aでは利用者が1日5人程度で、介護職員は一人ひとりを詳しく把握することができた「環境」、同じ村で暮らし、顔見知りであった職員が居る「環境」、Bさんに施したきめ細かい「ケア」、田の字型の間取りの機能と規範をできる限り残し、長年この地域に固有の住宅の規範に従った生活をそのままデイサービスにおいて継承した「環境」が挙げられる。いくつもの「ケア」や「環境」が複合的に絡み合って、Bさんの社会的居場所が成立している。

## ■コミュニティを基盤にする

高齢者が住み慣れた地域で最期を迎えるために、もう一点必要なことに触れておく。言うまでもなくコミュニティである。近年コミュニティケア（community care）という言葉を耳にすることが増えてきた。この2つの単語、コミュニティ（community）とケア（care）は、どのような関係で結ばれているのだろうか。コミュニティの中のケア（care in the community）、コミュニティのためのケア（care for the community）、コミュニティによるケア（care by the community）といった具合に様々に考えられる。なお、ここで言うケアとは、相手に提供する資源となるケアである。

これから求められているコミュニティケア（community care）とは、コミュニティの中のケア（care in the community）ではなく、コミュニティによるケア（care by the community）である[文3]。つい数年前まではコミュニティの中のケア（care in the community）で十分であっただろう。コミュニティの中に社会福祉法人やNPOなどによるデイサービスや訪問介護の事業所、集会所、老人憩いの家、サロン、さらには自治会、民生委員など資源となるケアは存在している。しかし孤独死の問題に象徴されるように、それらがただ単独に存在しているだけでは不十分である。必要なのは、コミュニティ全体を巻き込んで公私が参画した状態となるコミュニティによるケア（care by the community）である。コミュニティの中の様々な人、組織、建物など資源を積極的に活用し、連携と協働によるケアを行うことが必要である。

こうした実践例として「ひがしまち街角広場」「下新庄さくら園」や「はっぴぃひろば」を紹介する。「ひがしまち街角広場」については本特集の事例で紹介されている。「下新庄さくら園」や「はっぴぃひろば」については紙幅の都合上紹介できないので、関心のある方は「まちの居場所」（東洋書店、2010）を参照いただきたい。

## ■最後に

これから先、高齢者の居場所として建築は決して大きなものではなく、高齢者の身近なところにある小さなものが一層必要になってくる。そこにはコミュニティを読み解く目、「ケア」「環境」に配慮したきめ細かい仕掛けが必要だろう。

（まつばら　しげき）

事例1

# 地域のコモンズとしてのサードプレイス

## ～長崎県島原湧水群の共同洗い場より～

大阪大学大学院工学研究科
特任研究員

吉住優子

島原市は、長崎県の雲仙山系を中心に広がる島原半島の東部に位置し、西側には眉山がそびえ、東側には有明海に面した約11.5kmの海岸線を持っている。こうした南北に細長く広がる市街地には、約60ヵ所の湧水源があり、毎日コンコンと水が湧き出ている。湧水源では、水が汲める井戸、共同洗い場、共同水路、水屋敷など、それぞれの場所・建物ごとに特色ある利用形態をつくりだしており、大変豊かな街並みを形成している。

### ■共同洗い場「浜ん川」

島原湧水群の共同洗い場では、毎日、日常的な湧水利用の光景を目にすることができる。洗濯物をカゴに入れてすすぎに訪れる人や、水を飲みに来る人、ふらっと訪れて世間話に立ち寄る人など、いつも人々が集う場所として賑わっている。島原市の中で最も利用者が多い「浜ん川」と呼ばれる共同洗い場では、１日に約100人の利用者がおり、夏はもちろん、冬の雪の日でも季節を問わず利用がなされている。自宅に水道があり、洗濯機がある生活であっても、長年人々に愛され利用が続けられているのである。

朝の洗い場はまるで洗面所のような様子で、日が昇ると歯ブラシをくわえた人や、タオルを首に掛けて石鹸を持った人が寝巻き姿で訪れる。口をすすぐだけ、顔を洗うだけであっても屋外に訪れ、浜ん川で出会う人々と当たり前のように挨拶を交わしている。

その後しばらくすると、寝巻き姿から着替えた人々が、洗濯物（すすぎ前の洗濯物が多い）を持って訪れる。洗剤の残った衣類をザブザブと湧水に浸してすすぎ、ねじりながら絞って持ち帰っていく。自宅に洗濯機があるのに、わざわざ出向くのは面倒じゃないかとたずねると、「ここですすぐと気持ちよかけん。洗濯機ですすぐよりキレイになる気がする」と笑いながら、何度も足を運んでいた。雨の日には傘をさして訪れる人や、指を怪我していても包帯を巻いて訪れる人もおり、集まった人々は世間話に花を咲かせ、賑やかな時間を過ごしている。

洗濯が一段落ついた頃、午後の暑い日差しが照りつけるようになると、漁などの仕事を終えた男性たちが訪れ、足を洗い場に浸して



「浜ん川」で洗い物をする女性たち



「浜ん川」で水を飲む子どもたち

くつろぐ姿が見られる。洗い場の中には麦茶や西瓜が冷やしてあり、のんびりとした時間が流れている。子どもたちも学校が終わると洗い場に訪れ、冷たい湧水にどれだけ長く足を浸していられるか、我慢比べをして遊んでいる。

そして夕方になると、魚をさばく人や、食器の後片付けのための人が、まな板やバケツを持って訪れるようになり、人々が行き交う共同炊事場のような時間帯となるが、日が暮れはじめるのと同時に人足も途絶えていく。

### ■水神様を介した緩やかな信頼関係

島原の洗い場には、ほとんどと言って良いほど水神様が奉ってある。水神様は自然資源に対する感謝や畏敬の表れであるとともに、弁財天・稲荷・蛇などの信仰が変形した意匠であると考えられている。水神様をお奉りしている場所をたずねると、「湧水が出るところには、どこにでも置いてあるよ」ということであった。

また水神様の奉り方については、それぞれの洗い場ごとで異なっている。浜ん川では毎朝かかさず水と榊を替え、大事に奉られているが、その他の洗い場では、お経をあげる、米をまくなどの供養も行われている。利用者の中には、水神様にお祈りするようになって



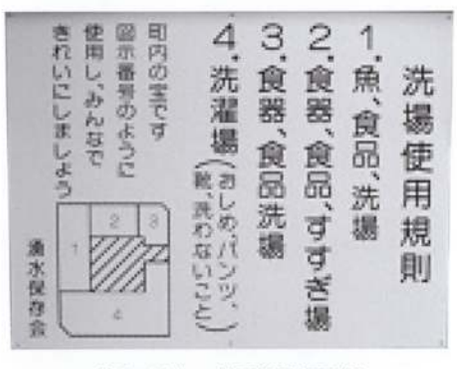
「桶川の洗い場」の水神様

病気が治った、水を粗末にすると祟りがあるなどと信じている人も多く、水神様の存在により、湧水を大事にしなければならないという緩やかなモラルが形成されている。これは誰の目に対しても明らかな役割は持たないが、地域の中だけで通じる規則として生きており、水神様はコミュニティを支える重要な存在として位置付けられている。

## ■地域に根ざした維持管理システム

洗い場での利用方法をたずねると、「流れ川三尺」という言葉をよく耳にする。「川の流れは三尺」などとも言われ、微生物や魚による自浄作用によって、水が元のきれいな状態に戻ることを意味している。この言葉だけを聞くと、洗い場の利用方法は無秩序なのかと考えてしまうのだが、実際は、洗い場に持ち込めるものについてなど、周辺住民により育まれたルールが、美しい湧水を維持する仕組みにつながっている。

また浜ん川は、４つの枠で区切られた石張りのつくりになっており、使用規則の掲示に従って、洗うものが決められている。区切られた枠ごとに、カミ手からシモ手にかけて汚れものの度合いが変化するよう定められている。




「浜ん川」の使用規則掲示板

しかしながら浜ん川における人々の利用を見ると、それに伴った利用が行われているのではなく、ややシモ手にずれた、規則とは異なった利用が行われている。また、このシモ手にずれたルールは掲示などで明示されてはいないが、当たり前のように、利用者の間で共有されたルールとして存在している。なぜシモ手寄りの利用なのかをたずねると、「カミ手を汚したくないから」という、湧水を大切にする思いにより、ついシモ手寄りの利用になってしまうということであった。

こうした維持管理にかかわる方法や根拠は、島原で世代を超えて継承された言い伝えや、長年築きあげられた価値観などにより成立している。持続的な利用の中で生み出されたルールや、日々のコミュニケーションにより判断された内容が、洗い場に根ざした維持管理システムとして存在し、さらに今後も更新され続けていくと考えられる。



「桶川の洗い場」で洗い物をする女性たち

## ■40年前の豊かな島原を取り戻す

島原のまちづくり活動を支えている人々や、洗い場周辺の人々は、島原を、自分たちが子どもだった頃の環境に戻したいと考えている。もっと自然が豊かで美しかった時代の島原を目指すという、共通の目的意識を持ち、活動を行っているということである。

洗い場での湧水の思い出をたずねると、「お素麺でもね、昔、家族が多いから大きいお鍋で茹でて持ってくるでしょ。そして、ここに大きなザルを置いといて、ひっくり返してこうして洗うでしょ。そしたらね、そっち側に子どもがね、こんなして（座って）から待ってるんですよ。あげくね、出汁もかけんでチュルチュルチュルチュル。それが一番美味しい食べ方ね」と、良き時代の日常を教えてくれた。

島原では、1981年に国土庁より地方都市整備パイロット事業の一つである「水緑都市モデル地区」の指定を受け、島原城をはじめとする浜ん川等の整備に着手する運びとなった。また1990年の雲仙普賢岳噴火活動に伴い、湧水源の枯渇や観光客の減少といった被害が各所に及んだため、湧水に対する危機感と保全意識が高まり、1994年に市が「中心市街地マスタープラン」を作成、それを受け民間団体が中心となり「島原中心市街地まちづくり推進協議会」が組織され、その下に市民団体「げんごろう倶楽部」が結成された。さらに1996年に自治体と住民が一体となり「がまだす計画」が策定され、「街なみ環境整備事業」として住民の意見が反映されるようになった。

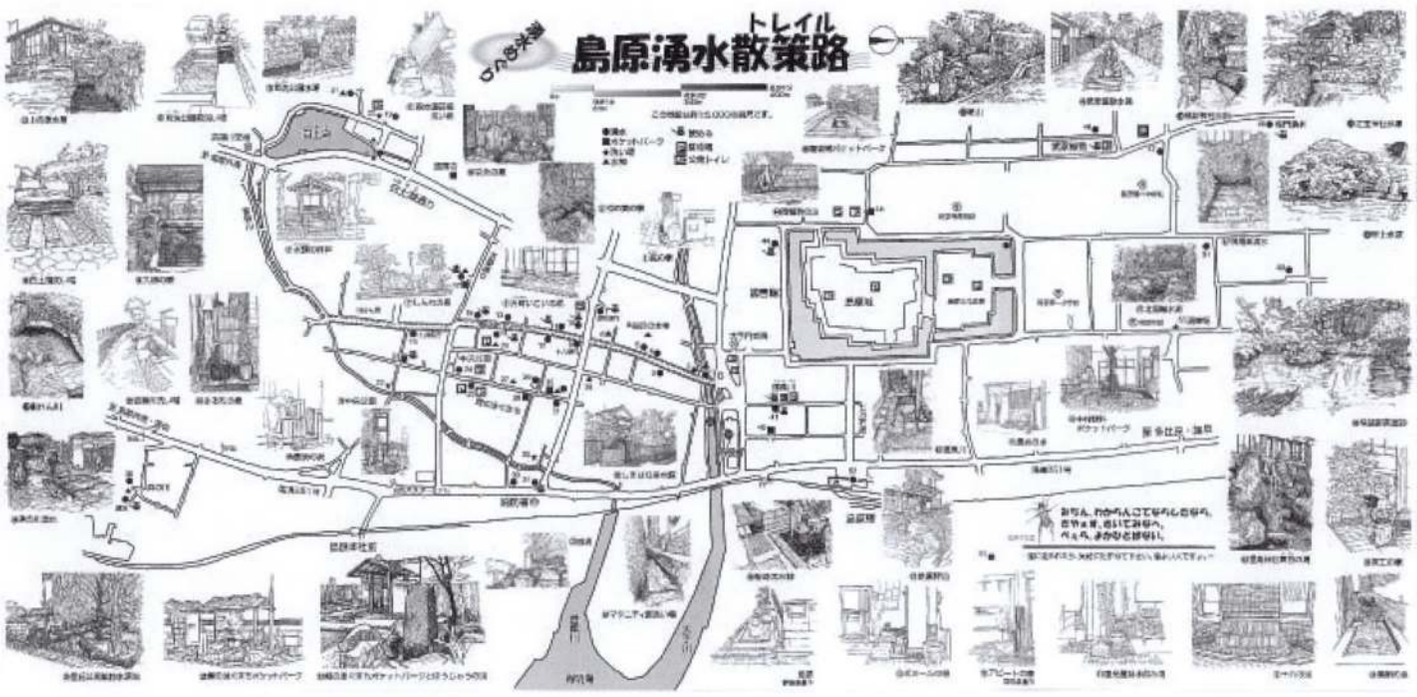
こうした経緯の中で、当時の島原市の活性化は市民団体の活動による影響も大きく、現在でもなお、自治体はそれをバックアップする形で介入している。まちづくりに対する住民の思いを直接的に反映できる体制と、住民側、自治体側の立場を生かした役割分担が、湧水資源維持のための意見交換を生み、さらにはまちづくりの活動をスムーズに運ぶ仕組みにつながっている。



「お地蔵さんの洗い場」で魚を捕る子どもたち

## ■子どもたちへの密やかな仕掛け

「げんごろう倶楽部」は、島原復興青年会議の中で、湧水に関心のある有志が集まり、1995年に結成された市民団体である。湧水源、洗い場、水屋敷などの実態調査といった、湧水の保全や湧水文化の継承、情報発信を主として活動を行っている。湧水マップ「湧水めぐり島原湧水散策路」作成や「島原湧水絵ハガキ」発行、「しまばら水のシンポジウム」開催など、島原の湧水の良さを住民に広く知ってもらいたいという考えから、湧水への関




「げんごろう倶楽部」発行の湧水マップ

心を高めるための活動を続けている。

またこうした活動の一方で、身近なところでの働きかけも同時に行っている。新しい湧水公園が再整備された際、まだ自然が少なかった水路や洗い場に、こっそり葦を植えたり、魚を放流したそうである。こうした植物や魚は、翌日にはすべて無くなっており、見つけた子どもたちが喜んで採取してしまうということであった。「ハヤ(魚)を放流したときも、みんな捕っていっとるけん。今度また山になんか採りに行かんと」と嬉しそうに話をしてくれた。

島原市ではそのほかにも、鯉や沢蟹の放流など、子どもたちが自然体験を行えるようなイベントや取り組みが、様々に工夫され行われている。こうした中で、げんごろう倶楽部により日常的に行われる密やかな仕掛けは、非常にユニークで温かく、島原における湧水と人々との身近なつながりを保つ役割を担っている。

## ■地域のコモンズとしてのサードプレイス

島原湧水群の共同洗い場では、日々の暮らしの中でお互いの存在を確認し、感じていることをさりげない形で行い、ともに生活していることを実感しあえる空間になっている。またそれらは、湧水を利用し管理する中で育まれており、地域に根ざした価値観や住民の知恵により生まれたものであると言える。

生活スタイルが日々変化している今日でもなお、日常的に利用が続けられ、人々の豊かな関係性を持つ共同洗い場は、「地域のコモンズとしてのサードプレイス」として、大変意義深い場所である。

(よしずみ　ゆうこ)



新千里東町の近隣センター



思い思いに過ごす人々

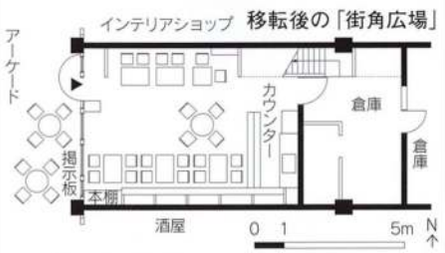
事例2

# ひがしまち街角広場

## ～ニュータウンの空き店舗を活用した地域の「ひろば」～

千里グッズの会、博士（工学）

**田中康裕**




■ひがしまち街角広場

［所 在 地］大阪府豊中市新千里東町（千里ニュータウン）
［オープン］2001年9月　＊2006年5月に移転
［運 営 日］月曜～土曜
［時　　間］11：00～16：00
［運　　営］ひがしまち街角広場運営委員会
［スタッフ］約12名のボランティア
［来訪者数］毎日30～40人
［建　　物］近隣センターの空き店舗を活用
［面　　積］移転前：約30㎡／移転後：約75㎡
［メニュー］コーヒー・紅茶・日本茶・カルピス・ジュース
＊すべて「お気持ち料」100円

### ■社会実験から自主運営へ

「ニュータウンの中には、みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所はありませんでした。そういう場所が欲しいなと思ってたんですけど、なかなかそういう場所を確保することができなかったんです」。「ひがしまち街角広場」（以下、街角広場）は、このような地域の人々の切実な思いから生まれた。

「街角広場」が開かれているのは、千里ニュータウンの一住区である新千里東町（1966年入居開始）の近隣センターである。近隣センターというのは、人々が徒歩で日常生活を送れるようにと考えられ、千里ニュータウンの各住区に計画された場所である。日用品を扱うお店や公衆浴場、銀行などが営業する場所であったが、モータリゼーションや各住戸への風呂場の設置等の生活環境の変化に伴い、次第に空き店舗が目立つようになっていった。

2000年、新千里東町が国土交通省の「歩いて暮らせるまちづくり事業」のモデルプロジェクトの対象地区に選定された。この事業で行われたワークショップで、「近隣センターを生活サービス・交流拠点へ」という提案があり、これを受けて豊中市の社会実験として「街角広場」の運営が始められることになった。当初は社会実験として半年間のみ運営される予定であったが、社会実験が終了する頃になると運営を続けて欲しいという声が地域からあがってきたため、この声に応えて、社会実験終了後も運営が続けられることになった。社会実験の間は豊中市から財政的な支援を受けていたが、これ以降は補助金を受けることなく「自主運営」されている。

2006年春、利用していた店舗の利用契約の期限が切れることになった。その後の運営のあり方について議論がなされ、近隣センターで運営しないのなら「街角広場」の意味がないという考えから、近隣センターの他の空き店舗に移転し、運営が続けられることになった。

「お客さんが来なくなって運営が継続できなくなるというのは、『街角広場』が地域で必要とされていないという意味だから、その時には補助金で下支えして無理に運営を続けるんじゃなく、潔く閉めましょうね」。「自主運営」を始める時にこう約束したと代表の赤井さんは話す。このような約束で「自主運営」が始められた「街角広場」も、今秋にはオープン10周年を迎える。

### ■気軽で自由な場所

私たちは、住む場所（ファーストプレイス）や働き学ぶ場所（セカンドプレイス）において多くの役割を担い、責任を負っている。サードプレイスとは、これらの役割や責任から解放される場所である。このような説明を聞くと、ここで紹介している「街角広場」は役割や責任を負う必要のない、気軽で、自由な場所だという印象を持たれるかもしれない。

もちろん、「街角広場」にも気軽で、自由な場所だという側面はある。毎日運営されており、またコーヒーや紅茶などが「お気持ち料」100円で提供されていることから、地域のお年寄り、小さな子どもを連れた母親など様々な人々が気軽に立ち寄り、思い思いに過ごせる場所になっている。学校帰りの子どもたちが「おばちゃんお水ちょうだい」と立ち寄る場所にもなっている。それまでニュータウンになかった「みんなが何となくふらっと集まって喋れる、ゆっくり過ごせる場所」を実現したという意味で、気軽さ、自由さが「街角広場」の魅力であることには違いない。けれども、気軽さ、自由さという側面からだけでは「街角広場」が地域で担っている意味は語り切れない。

### ■地域への入り口

「街角広場」の日々の運営は2～3人のボランティアによって担われているが、ボランティアとそれ以外の来訪者との関係が固定さ



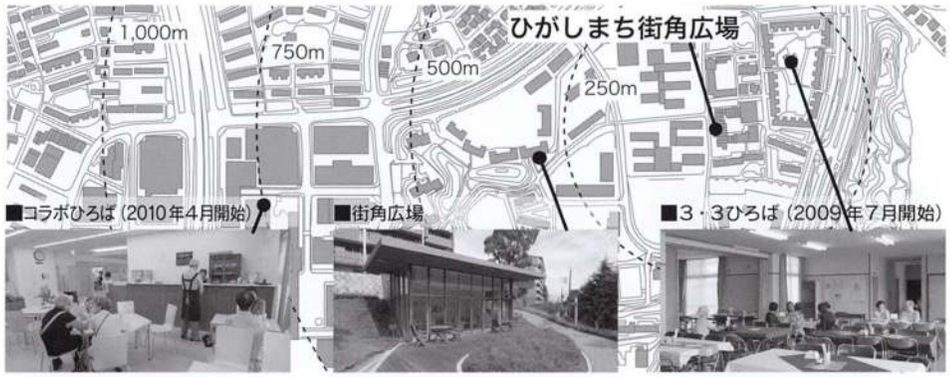
学校帰りに水を飲みに立ち寄る子どもたち



多くの人々の協力により行われた移転作業



毎年10月の周年記念行事




［運 営 日］火曜～土曜
［運営時間］10：00～17：00
［建　　物］千里文化センター「コラボ」
＊「千里文化センター市民実行委員会」のメンバーやボランティアにより運営され、「絵本カフェ」「多文化カフェ」「エコカフェ」の「テーマ型交流カフェ」、住まいの相談の活動も行われている。

［建物］分譲マンションの共用施設
＊2005年に入居がはじまった分譲マンション。「ひがしまち街角広場」を訪れた設計者が、マンションにもこのような場所が必要だと考え、計画した。

［運 営 日］第2水曜・第4金曜
［運営時間］13：00～16：00
［建　　物］府営住宅の集会所
＊府営住宅の建て替えで一時移転している人、一人暮らしの人がお茶を飲みながら、おしゃべりできるようにと開かれた。ボランティアによりお茶・コーヒー・紅茶・カルピスなどを100円で提供。

新千里東町に開かれた「ひろば」

れているわけではない。時間がある時はボランティアも来訪者と一緒に座って話をする。逆に忙しくなれば、来訪者がコーヒーを運ぶのを手伝ったり、テーブルの後片付けを手伝ったり、水を汲みに行ったりする。写真や絵画を展示したり、手づくりの竹細工を持って来たり、お土産などを差し入れたりする人もいる。日々の運営だけでなく、毎年10月に行われる周年記念行事や2006年の移転の際にも、多くの人々の協力がなされた。このように「街角広場」は多くの人々の協力によって成り立っているのである。代表の赤井さんは「来る方もボランティア、お手伝いしてる方もボランティアっていう感じで、いつでもお互い何の上下の差もなく、フラットな関係でいられるっていうのが一番いい」、「ここは常に未完成なんです。未完成なままでやってるから、次々と色んなことを取り入れることができるんです」と話す。

地域のために何か役に立ちたいと考える人は少なくないかも知れないが、実際に何ができるかを見つけるのは難しいし、それを実行するのはさらに難しい。けれども「街角広場」に行けば、飲み物を入れたり、水を汲みに行ったり、写真や絵画を展示したり、バーベキューの準備をしたり、ペンキを塗ったりというように、お手伝いできる具体的な役割をたくさん見つけることができる。つまり、「街角広場」は地域の人々がお客さんとして気軽に訪れ、思い思いに過ごせるというだけの場所ではない。人々が「私にはこれができる」という具体的な役割を見出す余地のある「未完成なまま」の場所なのである。人々はそうした役割をきっかけとして地域に関わっていくのであり、同時に、人々により少しずつ担われる役割の積み重ねによって「街角広場」は成り立っているのである。

居心地の良い場所を誰かに提供してもらうのではなく、自らが当事者となり、何らかの役割を担うことによって地域を良いものにしようと働きかけていくこと、自らにとっての豊かな生活環境は、そのような働きかけを通してしか築かれない。ニュータウンは隅々まで計画され、極力無駄が排除された、言わば完成品としての街である。そんなニュータウンだからこそ、「未完成なまま」であるがゆえに、人々が地域へ関わるきっかけとなる具体的な役割を見出す余地がある「街角広場」のような場所が必要なのである。

## ■地域の場所としての具体的なかたち

「ひがしまち街角広場」の運営が始められた後、新千里東町には新たな「ひろば」が生まれている（上図参照）。「ひがしまち街角広場」は近隣センターの空き店舗に、「コラボひろば」は公共施設である豊中市千里文化センター「コラボ」の一画に[1]、「3・3ひろば」は府営住宅の集会所に、「街角広場」は分譲マンションの共用施設として開かれた場所であり、それぞれ運営方法も運営体制も異なるが、いずれも「ひろば」と名づけられている。

先ほどの表現を用いると、地域のための場所をつくりたいと考える人は少なくないかも知れないが、実際にどのような場所をつくればよいかを考えるのは難しいし、それを実現するのはさらに難しい。「ひがしまち街角広場」はそのような人々に対して、特定の活動やイベントの時だけ人が集まる場所ではなくお茶が飲める日常的な場所が大事であること、そのためには広いスペースや高価な設備は不要であり、ささやかでも自分たちの手でつくっていくことに意味があること、というように地域のための場所の一つのあり方を、目に見えるかたちで示している。

地域に「ひがしまち街角広場」が開かれたことの意味は、気軽で、自由な場所が近隣センターの空き店舗に完結された世界として実現されたということにとどまらない。新千里東町にいくつかの「ひろば」が生まれているように、その住民手づくりの場所は、地域のあり方にも影響を与えているのである。

注
1）「コラボ」は、千里公民館、千里図書館、千里老人福祉センター、千里保健センター、新千里出張所の5つの機関が入居する複合施設で、千里中央地区の再開発に伴い、2008年2月にオープンした。

参考文献
・日本建築学会編『まちの居場所』東洋書店、2010
・田中康裕ほか「日々の実践としての場所のしつらえに関する考察―『ひがしまち街角広場』を対象として―」・『日本建築学会計画系論文集』No.620, pp.103-110, 2007.10

（たなか　やすひろ）



写真1
子ども広場
（西淀川子どもセンター）



写真2
団地内で開かれるバザー
（西淀川子どもセンター）

事例3

# 団地内の空きスペースを活用した地域住民の居場所づくり

大阪大学大学院建築工学科講師
㈱大林組

**飯田　匡・上田明法**



写真3　集会所を利用した子育て支援事業
（あっぷるはうす、都市再生機構 アルビス旭ヶ丘）



写真4　団地内施設を借りての活動（JUMP）

近年、居住者の減少や高齢化に伴い、公営住宅団地における空き家率の増加が問題となっている。それに伴い、集会所等の団地内施設の利用率も低下している。これら空きスペースの増加は、治安の悪化やコミュニティの衰退にもつながりかねない。もちろんこうした状況に団地の管理者である自治体や都市再生機構は手をこまぬいている訳ではない。

特に平成19年の地方自治法の改正※1が追い風となり、様々な取り組みがなされている。なかでも生活支援施設やコミュニティ施設の誘致は、地域コミュニティに直接的に作用しうるという点においても重要である。そうした施設は地域住民の居場所、すなわち「まちなかのサードプレイス」としての機能も期待できる。

本稿では著者らの調査※2に基づき、大阪市営住宅および都市再生機構における空きスペースを地域のための施設として有効活用する取り組みについて紹介する。

## ■大阪市営住宅における取り組み

大阪市では市営住宅の再生に際し、「市営住宅」から、より多くの市民に支持される「市民住宅」へと再編することをめざしている。具体的な目標として、「ストックの効率的な活用」「コミュニティの再生」「公平・公正な管理の推進」「地域のまちづくりへの貢献」が挙げられている。空き住戸や利用率の低下した空間の活用も、「市民住宅」に向けてのそうした取り組みの一つである。その一例として、「空き住戸を活用したコミュニティビジネス活動拠点の導入事業」※3がある。

これは、団地や地域コミュニティの活性化に向け、市営住宅1階の空き住戸をコミュニティビジネスの活動拠点として、NPO法人等に貸し出す事業である。非営利団体に対しては家賃を半額に減免するなどの優遇策もある。平成20年度の事業開始から2年以上が経過し、これまでに7団体がこの事業者に選定されている（平成22年度にも4団体が選定され、順次活動開始を予定している）。それぞれ子育て支援やまちづくり支援といったコミュニティビジネスを団地内で立ち上げ、活動している。7事業者のうち、子育て支援・子ども相談を主な活動とするものが4、まちづくり支援、知的障害児・者の支援、生活保護費受給者の支援がそれぞれ1事業者である（**表1**）。

事業者は、外部委員により構成される審査

**表1　大阪市営住宅におけるコミュニティビジネスの活動団体**

| 団体名 | 所在地 | 団地名 | 活動内容 |
|---|---|---|---|
| NPO法人<br>西淀川子どもセンター | 大阪市西淀川区 | 御幣島住宅3号棟<br>101号室 | • CAP活動（子どもへの暴力防止）<br>• 子ども相談室（電話相談・寺子屋プロジェクト・子どもの広場・文庫活動等）<br>• 地域セミナー<br>• リサイクルバザー<br>• 講演や研修 |
| NPO法人<br>JUMP | 大阪市東淀川区 | 日の出第3住宅1号棟<br>105号室 | • 自転車によるまちづくり（ツーリング、メンテナンス講座など）<br>• 高齢単身者のための惣菜ケータリング（予定） |
| NPO法人<br>女性と子育て支援グループ<br>pokkapoka | 大阪市東淀川区 | 井高野第3住宅3号棟<br>101号室 | • お母さんたちが集まり交流を深めたり、相談できる広場<br>• 保育活動<br>• つどいの広場 |
| NPO法人<br>にしよど　にこネット | 大阪市西淀川区 | 福第2住宅2号棟<br>104号室 | • 子育てサークル<br>• サークルサポート（運動会開催など）<br>• つどいの広場事業<br>• ひろば事業<br>• 子育て情報誌等の作成<br>• 学習交流<br>• 保育者養成講座<br>• にしよど冒険遊び場 |
| 社会福祉法人<br>大阪自彊館 | 大阪市西成区 | 萩之茶屋第2住宅<br>107・108・109号室 | • 交流施設<br>• イーゼル作業所 |
| 社団法人<br>大阪市シルバー人材センター | 大阪市旭区 | 高殿西住宅1号棟<br>110号室 | • 子ども一時預かり施設 |
| NPO法人<br>エンパワメント・プランニング | 大阪市東淀川区 | 東淡路第2住宅3号棟<br>111号室 | • 知的（発達）障害児・者への支援のあり方や関係性について、理論的・実践的に追求する活動を実施 |

委員会によって選定される。審査の際には住民も参加できる公開プレゼンテーションが行われ、応募者が活動内容に関するプロポーザルを発表する。利用期間は最長4年、それ以降も活動を継続したい場合は、再度プロポーザルに応募し審査を受けなければならない。平成22年度の募集事業は、高齢者の生活支援等を目的とする活動、子育てサービス等の提供を目的とする活動、その他、地域コミュニティの活性化等を目的とする活動とされた。

「西淀川子どもセンター」（**写真1**）では、子どもの話を聞くだけでなく、ほかにより所を見つけられないような子どもたちの居場所として、あるいは小学生の子どもたちの放課後の遊び場として、週に数日施設を開放している。この施設が子どもたちにとって新たな居場所となるだけではなく、今まで入る機会のなかった団地内の屋外空間が子どもたちの新しい遊び場にもなっている。また、団地内のスペースを利用してバザー等のイベントも行っている（**写真2**）が、入居している空きスペース以外にも様々な活動に利用できるスペースがすぐ近くにあることは、団地内に施設を構えることのメリットの一つと言える。

「西淀川子どもセンター」では月に一度ネイルサロンを開き、近所の高齢者にも利用されている。そのほかにも、子育て支援を主体としながら、高齢者の支援にも取り組む事業者や、血圧のチェックや健康相談を通して高齢者とのコミュニケーションを図る事業者もある。あるいは、団地に住む高齢者がスタッフとして参加している施設も見られる。

子育て世代と交わることのできる貴重な場所が高齢化の進む団地内にできることは、高齢者の生活の質を考える上でも、重要であろう。

## ■都市再生機構における取り組み

一方、都市再生機構では一部の住宅団地において「チャレンジスペース事業※4」を実施している。この事業も団地内の空き店舗や利用率の低下した集会室等の積極的な活用をめざすものである。団地内の空きスペースを商業施設や社会福祉支援施設、コミュニティ活性化向けた活動を行うNPO団体などに対し、まずは半年間無償で貸し出すことによって、こうした事業の立ち上げをサポートする。

こちらは各地域で随時事業の募集を行っており、店舗や業務用としても使用可能である点など、大阪市の取り組みとはかなり異なる。ただし、保育所、放課後児童クラブ、集いの広場、子育て相談窓口等の子育て支援事業を実施しようとする事業者に対しては、大阪市と同様に賃貸料を半額とする優遇策がある。また、都市再生機構が情報や意見交換の場を提供するなどのサポートを行っており、生活支援施設を重視し積極的に誘致しようという姿勢が見られる（**写真3**）。

団地によっては集会所で住民主体のコミュニティサロンが週数回行われているほか、以前より高齢者がいつでも気軽に立ち寄って、談話や趣味などの交流の場としても利用できる「Eラウンジ」（Elder＝年長者）を集会所に隣接して設置している。

## ■団地内の施設を利用することのメリット・デメリット

管理者にとって空きスペースの有効活用が大きなメリットとなることは言うまでもないが、団地内の他のスペースの利用頻度が増加する点も見逃せない。すでに述べたように、空き家に開設された施設を利用する子どもたちが屋外でも遊ぶようになったり、あるいはイベント開催時に集会室等を利用するなどがその例である（**写真4**）。これは、事業者にとっても普段の活動場所のすぐ近くに様々な用途に利用できる場所があるということで、活動内容の拡大につながる可能性がある。

また、賃貸料に対する優遇措置などがあるため、これまで拠点を持つことのできなかったNPO法人が、比較的少ない負担で拠点を持つことができるようになることも重要である。審査委員会による審査を経て事業者として選定されるため、公に認められた施設ということで、地域住民の施設に対する信用度が上がるという指摘もあった。また、団地住民の目があるため、防犯面で安心感があるとの意見もみられた。ただし、事業者はこうした利点について入居時には特に意識しておらず、団地内で実際に事業を開始してから実感する団体が多かった。

一方、デメリットとしては、施設の老朽化や、自由に改装を行うことができないことなどが挙げられた。改装を行う場合は事前に管理者の承認を得た上で、利用者が費用を負担する必要がある。生活支援施設を地域に定着させるためには、より使いやすい空間をつくれるように、改装に対する制限を緩めることを検討する必要があるのかもしれない。

立地条件が悪いという意見もあった。一つは、団地自体の立地の問題である。すなわち提供しようとするサービスと地域のニーズとのマッチングの問題である。これについては地域のニーズをくんだ上で誘致するサービスをある程度絞っていくという方法もあるかもしれない。また、立地に関しては、団地内のどの空きスペースを提供するかという問題もある。開設される生活支援施設の多くは団地外の住民も利用対象としているため、団地外からの利用動線等も考慮し、団地内の適切な場所に賃貸スペースを設定することも重要であろう。

## ■まとめ

以上、団地内の空きスペースを活用した生活支援施設やコミュニティ施設が、団地や地域の住民にとって新しい居場所となっている状況について、主にスペースを提供する立場から述べた。

公営住宅をとりまく状況は厳しく団地の縮小も検討され始めているが、今後も団地内の空きスペースは増加することが見込まれる。そうしたスペースを地域のための施設として転換し有効活用していくことは、団地にとっても地域にとっても今後ますます重要になるものと思われる。

※1　民間活力を導入して行政財産（自治体の所有する不動産等）を効率的かつ有効に利用できるように、行政財産の貸し付け範囲が拡大された。

※2　上田明法：集合住宅団地における低・未利用空間の有効活用事例の運営と利用実態に関する研究、大阪大学大学院修士論文、2011

※3　大阪市：http://www.city.osaka.lg.jp/toshiseibi/page/0000027487.html

※4　都市再生機構：http://www.ur-net.go.jp/tenant/youkou/index.html

（いいだ　ただす・うえだ　あきのり）



デスカットは主要なビジネス街である東京駅、品川駅、新宿駅前に立地しており、多くのビジネスパーソンがサードプレイスとして利用している

事例4

# まちなかの会員制レンタルオフィス

コクヨファニチャー㈱
オフィスシステム統括本部
首都圏OS本部DESK@グループ
グループリーダー

**中村智一**





デスカットはコクヨファニチャー㈱が運営する時間貸しのレンタルオフィスである。施設においては個人で使用するワークスペース（席）をオープンタイプからブースタイプ、さらに遮音性を高めた個室タイプの3タイプを用意し、利用者のニーズに応じて選べることができる。また打ち合わせやセミナー、面談など多目的に使用できるミーティングスペースを用意し、プリントアウトやコピー等のビジネスサービスを提供し、ワーカーが仕事をするうえで最適な環境を提供している。

デスカットは1998年に東京駅北口の改札そばに1号店が誕生、JR東日本㈱と共同の事業としてスタートした。目的は当社の営業マンのモビリティを高めることと、モバイルワークの先駆けとしてワークスタイルを実践していくことにあった。もうひとつには自社オフィスをダウンサイジングしオフィスコストの削減を図ることを目的とした。オープン当初の98年はモバイル環境が始まったばかりで、携帯・PHSをパソコンにつなげ、会社にアクセスし、作業していた。現在はその当時の環境は遠い昔話のようで、ITCの進化はわれわれワーカーの働く環境を場所や時間を選ばない自由な環境へと導いた。しかしデスカットは駅前という好立地に拠点をかまえ、あえてワーカーに場所を選んでいただくため、単なるアクセスできる空間ではなく、プリントアウト、電源、セキュアな運用を確保して、カフェとは一線を引いた『まちなかの安心・安全・快適な空間』なのである。

## ■デスカットを利用する理由

デスカットでは、必ず身分認証のうえ登録し、特定多数の中、IDカードを発行してセキュアに運営している。現在法人会員は約100社、個人会員は1万人以上の登録の中でアクティブな利用者として約2500人が毎月利用している。

主な利用シーンとしては外出（出張）時の立ち寄り拠点であり、顧客訪問の間に立ち寄り活用することで移動時間が削減され、その時間を有効活用できることから、多くのワーカーに利用されている。また集中業務できる拠点として、マネージャーの方の仕事場としても活用されている。これらのメリットを効果としてとらえ生産性につながると考える企業は、法人契約をして企業のサテライトオフィスとして活用している。

## ■デスカットの評価と展望

デスカット利用者の平均利用時間は約2時間で、単なるメールチェックだけではなく、何らかの仕事をして活用されている。ある利用者は「会社では電話や上司、部下から声をかけられることもしばしばあり、集中して作業できないことが多い。集中して作業をしたい時は、デスカットにきて作業する」と語る。

デスカットは2009年10月にグッドデザイン賞（仕事領域の部門）を受賞している。受賞理由は「都市型生活者の多くはナレッジワーカー（知識労働者）だと言えるが、彼らはオフィスに座って事務をこなすことでは価値を生まない。人々と交わり、ネットワークの中から新たなアイデアや利益関係を生み出していく。彼らが働くのは、自社や顧客のオフィス、自宅、あるいは都市内のカフェやこの『デスカット』のようなモバイルワーク拠点、いわゆる「サードプレイス」をインターネットで繋いだ『場』である。こうした拠点のサービスのレベルを上げることは大きなデザインにとっての課題だし、また、まだ多くの価値が生まれる余地がある」（審査委員コメント）と評価されている。デスカットを利用するワーカー、企業の担当者からは東京の主要な駅、空港、そして全国の主要な都市に展開してほしいと言った声をいただいている。

サードプレイスのニーズは今後ITCの進化、クラウドに代表されるように少ない投資でITインフラを活用できることから、大企業から中小企業へと裾野が広がっていくだろう。われわれが目指す「安心・安全・快適なサードプレイス」を広げていくため、経営リスク分散の視点で、様々なパートナーとわれわれの運営ノウハウをジョイントし、協働で新たな付加価値モデルを創出していくことができればと考える。ワーカーに合ったワークプレイスの選択肢を広げることから個人の満足度が増し、企業の生産性にもつながり、結果、社会が元気になっていくことを願っている。

（なかむら　ともかず）

事例5

# くつろげる移動空間を目指して

## ～新幹線新型車両の取り組み～

西日本旅客鉄道㈱
車両部車両設計室課長

影山真佐富

住居と職場、あるいは職場と職場をつなぐ経路上に位置する新幹線の車内は、移動空間そのものであり、必ずしもオルデンバーグ氏の提唱するサードプレイスの姿とは一致しない。しかし、旅行される多くの方にとって移動空間も、実は大切な「第三の場所」であるのかもしれない。

本稿では、様々なお客様のニーズに応えるためのJR西日本の新幹線新型車両の取り組みを紹介することにより、サードプレイスを語る上での一助としていただきたい。

### ■山陽・九州新幹線直通用新型車両

2011年３月12日、九州新幹線の博多～新八代間が開業となり、JR九州と当社とで新大阪から鹿児島中央まで直通運転を開始した。直通運転を行っている車両は、両社で新型を開発、投入している。その際に目指したのは、列車に乗っていることを感じさせない心地よさ。――ただ移動するだけでなく、くつろげるひとときをすべての人に――をテーマとしている。家庭や職場から解放された移動の空間＝車内で、睡眠、親しい同行者との語らい、ツアーで偶然一緒となった方と意気投合……といった様々なシーンでくつろいでいただけるものと考えている。

以下、ベースとなっている東海道・山陽新幹線用の従来のN700系車両のコンセプトから紹介していく。

### ■従来のN700系車両のコンセプト

従来車両の運転区間、特に東京～新大阪間はビジネスユースのお客様が多いことから、A4ノートパソコンが置ける大型テーブルやコンセントの設置等、「高速移動オフィス空間」をコンセプトの一つとして、働く場所＝第二の場所を意識したデザインとなっている。

### ■新型車両のコンセプト

九州への直通運転では、観光での需要喚起を期待していることもあり、お客様の多様なニーズにお応えすることを目指した。そこで、N700系車両の機能は保持しつつ、「日本的なおもてなしの心地よさ」をコンセプトに、上質さとくつろぎ感を取り入れた車内設備とした。具体的には、一部に本物の木材を用いるなど、木目や日本の伝統的な柄をあしらって和のイメージを表現している。

### ■新型車両のデザイン

**●グリーン席**　重厚感漂う贅沢な雰囲気としている。深みのある古代桜を基調にして、テーブルや手すりに本物の木材を用いて統一感を演出。通路には金茶色の花唐草模様を使用。シートには濃藍色の花唐草模様の消臭効果のある生地を使用したほか、新たにレッグレストと枕を設置し、心休まるひとときを味わっていただける空間とした。



**●指定席**　落ち着いた優しい雰囲気としている。朱桜調の木材をテーブルや手すりに採用。シートの生地に濃菜種色の遠山模様を使用して日本の山並みを表現。山陽新幹線のひかりレールスターで好評の２＆２サルーンシートをさらに改良し、背もたれの動きに連動して座面を動かして腰部をサポートし、長時間でも快適な座り心地を提供できるようにした。



**●自由席**　モダンでやわらかな雰囲気としている。荷棚部などに若桜調の木目を使用。シートは季節感にあふれた桜の花柄と市松模様の茜色と縹（はなだ）色の生地を使用した。

**●新たな設備**　女性から要望があった女性専用トイレとパウダールームを新たに設置。車内でくつろいだ後、化粧直しや身だしなみのチェックができる空間も設けている。

（かげやま　まさひさ）



事例6

# 居場所を設計する

## ～吹田市立子育て青少年拠点 夢つながり未来館～

㈱東畑建築事務所設計部長

**北村　潤**

### ■広場をつくる

吹田市立子育て青少年拠点「夢つながり未来館」は、青少年の居場所づくりを目指して吹田市によって企画された施設である。施設の設計についてはプロポーザルが実施され、設計者が選定された。

敷地は阪急北千里線山田駅西に近接し、周辺は高層の集合住宅が並ぶ地域である。計画地の一部は、山田駅と住宅地を結ぶ公共通路として使われており、施設計画にあたって、公共通路を駅前広場であるとともに施設のエントランスプラザを形成する広場として、開かれた場所とすることが私たちの提案におけるひとつの骨子だった。

施設は図書館、子育て支援機能、青少年の拠点という大きくは3つの機能を持ち、駐車場、駐輪場を屋内に設けている。図書館の閲覧室はワンフロアに収めることが求められていたが、1階に広場を設けることと考え合わせて、図書館は地階に配している。地階にあることによって外周温度が安定していること、直射光が入らないことは、本にとっては好ましい環境とも言える。

一方、利用者の快適性を確保するにあたっては、広場からの自然光を採り入れるよう光庭を設け、光庭の一部をウッドデッキ仕上げとし屋外での読書スペースとしている。光庭からの柔らかな光は地下であることを感じさせず、落ち着きのある雰囲気を図書館に与えている。

広場には直接図書館に通じるガラスのボックス状の階段室を据え、光庭とともに図書館と広場との密接な関係をつくっている。

広場の隣地との境界沿いには壁面緑化を立ち上げて、夏にはミストを噴霧して広場に涼を与える。広場が通路として機能するだけではなく、広場に気持ちのいい場所をつくる装置である。



光庭のある図書館

### ■施設の空間構成

地階図書館以外のフロア構成は、1階に子育て支援施設を配し、2階から6階が青少年拠点施設である。

1階エントランスホールと子育て支援施設との間のガラススクリーンには森をイメージしたデザインフィルムを張って、子供たち独自の世界をエントランスに滲み出させている。



1階エントランスホール

2階は青少年からの相談に対応するゾーンであり、通常のルートを通らずに外部から直接のアプローチが可能なルートを確保している。

3階からの上部階が青少年の活動領域であり、3階の中央部は交流ロビーとして様々な用途に使うことを想定した3階から5階までの3層吹抜けの空間である。各フロアの諸室はこの空間を中心に展開しており、3階の交流ロビーはいわばこの施設全体のリビング空間と言える。

3～5階の学習室や会議室は、ロビーに対してはガラスの間仕切りで、部屋での活動が見えるようにしている。吹抜けを通しても各フロアでの動きが相互に見えることで、空間に界隈性をつくりだすことができるだろう。

交流ロビーや吹抜けを中心とした回遊性を持たせた場所こそは青少年の居場所である。天井を金網のメッシュとしていることや、壁をパンチングメタルとして、どこからでも情報を発信できる仕上げとしていることは、空間に仮設性をもたらしている。未完の状態であることが、青少年の居場所としてふさわしいと考えたからである。

6階は約200人が集える平土間の多目的ホールで、バドミントンや卓球などアリーナと



3層吹抜けの交流ロビー

しても利用できる。スタジオ、多目的リハーサル室、多目的ホールなど相互の室間遮音や建物外への音対策のため、浮き床や二重、三重の壁、天井仕上げとしている。青少年の活動拠点として、これら防音仕様の部屋が多くあることが、この施設固有の性能である。

## ■青少年の「砦」

本施設は各フロアの多様な機能に応じた床面積が要求され、それを満足するよう吹抜けを中心として配していった結果、建物のいろいろな面に様々な張り出しを与えることになった。

その姿はいろいろな大きさの箱が積みあがったような形態とも見える。それぞれの箱に様々な仕上げを与えているのは、まさしく青少年の活動拠点らしいアクティブな様相をつくりだすことを意図している。

そうして私たちはこの姿を青少年の「砦」と呼ぶこととした。「砦」とは「拠りどころ」だろうし、居場所とは居心地のいい場所である。青少年にとって居心地のいい場所として「砦」のイメージがふさわしいと考えたのだった。

## ■居心地のいい場所

居心地のいい場所とは、青少年あるいは私たちにとってどういう場所であるのだろう。

そこはまず、私たちが自由に使うことができる場所だろう。そのような場所として、たとえば外であれば原っぱ、内部であればガランドウのような場所が思い浮かぶ。

しかしこれらの場所は何も拘束がない自由な場所と言うことはできるだろうが、「砦」あるいは居心地のいい場所とは言えないような気がする。何もない場所がはたして、居心地のいい場所と言えるかということなのだと思う。

何もない場所とは、言い換えればアノニマスな場所であって、名づけられていない場所である。そこは使う者が、自分たちで自分たちの場所をつくっていける場所である。つくられていない場所であるがゆえに自由性が保証されているが、空白の場所である。

私たちにとって居心地のいい場所とは、地下室であったり、屋根裏部屋であったり、ある特別な場所性を持っている空間ではないのだろうか。その場所は、隠れ家と言えるような濃密な空間性が感じられる場所ではないのだろうか。

地下室や屋根裏部屋は日常の場所とは異なるレベルにある。その場所から眺める外の風景への視点の位置が、見るものに常に新しい発見をさせる。普段意識しない外部との関係が露呈してくることによって、内部が意識されるのである。

地下室では取り囲む壁が、屋根裏部屋では狭さが与える不自由さが、その場所の内部性あるいは空間性を高めるよう作用している。したがって、こうも言えるのではなかろうか。居心地のいい場所とは内部であり、閉じられた場所である。

実に「砦」とは内部によってのみつくられた場所であり、自らを閉じ込める場所であった。

## ■親密な場所

地下室や屋根裏部屋、あるいは隠れ家と言えるような場所は私たちにとって、親密な場所と言えるだろう。親密な場所とは、私たちが自分の固有の場所として、言い換えれば、その空間を所有していると認識できる場所である。

所有された空間とは自由に使うことができる場所ということだろうが、ちなみに私たちにとって、私たちが使う場所とは常に設計された場所として現れる。他方、設計された場所とは、制度化された場所と言えるだろう。

制度化は常に私たちに不自由さを押し付ける。したがって自由な場所とは何もされていない場所ではなく、制度がある意思をもって覆された場所なのである。制度が使い手によってズラされた場所、反制度化された場所である。

たとえば、倉敷のアイビースクエア、洲本の図書館、最近の事例では瀬戸内海の犬島にできた「精錬所」などは、かつてあった工場に新しい機能を与えて、魅力的な空間をつくりあげている。工場という制度を覆して新しい制度化を図ったと言える。ここで重要なことは、かつての制度すなわち工場が認識されながら、新しく制度化されていることである。ここでは制度の重層化が行われていると言えるだろう。

制度化されていることを前提として、反制度化されていることが認識される場所は、当初の空間の意味がズラされて変換されることによって重層化された場所である。そしてそのような場所だからこそ、私たちにとって魅力的な何ものかを与えると思えるのである。

設計とは制度をつくることであった。一方私たちにとって魅力的な場所は反制度化された場所である。とするならば、設計者は常に魅力ある場所をつくれないという自己撞着の中にいることにならないだろうか。

先の実例のような重層化されて魅力的な場所は、当初の制度である工場が魅力的であるからこそ、反制度化されて優れた結果をもたらしたのだと思う。設計者においては、ズラされるに値する強い制度化をなさなくてはならないのだろう。のれんに腕押しでは困るのである。ふわふわした空間では変換のやりようがないのである。

変換される可能性を秘めた場所こそが想像力が働く場所である。ある意味では将来の重層化に対しては未完の状態でフリーズされた空間と言える。

変換された後につくられるであろう、そのような場所を予感して、私たちは親密性を感じるのかもしれない。

（きたむら　じゅん）

エッセイ

# 私のサードプレイス

本誌編集委員

## サードプレイスとしての移動空間

大阪工業大学教授
**吉村英祐**

私は外を出歩くのが好きだ。仕事がら自室でパソコンに向かい、膨大なメールを日々処理し、さまざまな資料を作成し、学生や来客の応対をし、会議に出るのがほぼ日課であり、あっという間に1日が終わる。そうした日々の反動なのか、半ば無意識に精神的バランスをとろうとするためなのか、とにかく外を出歩きたくなる。

あらためて考えてみると、私にとってのサードプレイスは、喫茶店やバーなどではなく、外出時の移動空間のような気がする。移動手段は歩行、電車・バス、自動車など、何でもよい（飛行機はめったに乗らない）。私にとって、移動空間は誰にも邪魔されずに考えを整理する、原稿をチェックする、読書をするなどの貴重な場所であり、時間である。したがって、移動中は携帯電話を持っているという意識がきわめて稀薄になり、電話やメールの着信に気づくのが非常に遅くなる。私の携帯に連絡して、すぐに電話に出たり返信があったりすれば、相当「幸運」なかたである。

移動時間が短すぎると、いいサードプレイスにならない。地下鉄なら2駅間くらいまでなら歩く。まとまった時間を歩くことで無心になれるし、健康にもよい。毎回ルートを変えれば、新しい発見もある。東京出張もほぼ100%、新幹線を利用する。車中での2時間余りの時間と空間は、まさに至福に近いひとときであり、アイデアが浮かぶ知的生産の場でもある。

ところで、この3月12日に山陽新幹線と九州新幹線が1本でつながり、新大阪から鹿児島中央まで最速3時間45分で行けるようになった。飛行機から乗客を奪うためもあってか、新幹線車両のインテリアデザイン、快適性、乗り心地の進歩はめざましい。鹿児島出張のときは飛行機にしようか、それとも多少時間がかかってでも新幹線に乗ってみようか、そのときは何を持っていこうか。新たなサードプレイスへの期待か妄想か、早くも心が躍る。（よしむら　ひでまさ）

## 自分を成長させてくれた場所

㈱日建設計プロジェクト開発部門計画部
**守井　辰**

サードプレイス。家庭と仕事から解放されるパブリックでインフォーマルな空間。その有用性を語る議論は、家庭や職場・学校から解放されたいと思う人が多いことの裏返し。老若男女を問わず、世の中は厳しくて大変なのだ。

そう考えると、これが私のサードプレイスという確たるものが見当たらないのは、実は幸せなことなのかも知れない。けれども、幸せがいつまでも続くとは限らない。親が要介護になり目を離せなくなったらどうする？　退職したときの自分の居場所は？　仮定の話だが、明日にでも本気でサードプレイスを探すようになることもあり得るだろう。

ただ、個人的には、サードプレイスという概念を安易に使うことは自重したい、と思っている。場所・空間の問題とするのではなく、家庭人として、職業人として、趣味人として、自分をうまく使い分け、それぞれを充実させることで自らの生活の質を高めていきたいと思うからだ。そのためには、働くことや住まうことを再定義しながら、日々の生活を構築していかねばならない。サードプレイスに逃げたら、肝心なところと向き合う勇気を失う気がしている。

しかしながら、家庭や職場以外で自分を成長させてくれる場所をサードプレイスと捉えることを許してもらえるなら、私にとってのサープレイスは還暦を過ぎた白髪のバーテンダーが一人で開いていたバーだった。カウンターしかない小さな店で、通ったのも数えられるくらいだったが、毎回、白髪のバーテンダーとのおしゃべりと彼が勧めるお酒を通じて、奥の深い酒の文化や歴史を教わり、大人の男の遊びや心意気を教わった。粋な時間を過ごせるそのバーは、自らを進化させるきっかけも与えてくれた数少ない場所の一つだ。

（もりい　しん）

## IT時代のサードプレイス

阪神電気鉄道㈱開発営業室
**三宅次郎**

今回のテーマはサードプレイスということで、早速検索エンジンで調べてみた。元は1989年にアメリカの社会学者レイ・オールデンバーグが……というのは他稿に譲るとして、人事・労務関係の用語として紹介しているホームページが多いのに気づく。住み場所と働き場所ばっかりじゃ息がつまって……。だから、カフェやパブに行って自由にリラックス、というのは意外に難しい。私自身、行きつけの店はあったが、最近ご無沙汰である。どうしても仕事の話になったり、家の愚痴になったり、それはいいとしても、結局妙にコミュニティができて、そこに足を運ぶこと自体ある程度の「気合い」が必要な場所に、知らない間になってしまった。そんな経験、多いのではないでしょうか？

適度な距離感で人とのつながりを感じる手立てとして思い出すのが、SNS（ソーシャルネットワークサービス）。例えば2007年にサービスが開始されたTwitter、その利用率は日に日に加速化し、多くの人や企業が鮮度の高い情報収集・発信の手段と認識している。小売業界では様々な企業がEコマースに参入、小売市場規模は変わらないのに、ネットで購入されている金額は増えている状況に入りつつあるが、そのどのホームページにもTwitterのバナーがあり、それを介して口コミが広がっていく……。物理的な「プレイス」はローカルなものであるが、この広がりは、コンピュータを結ぶネットワーク全体が「居場所」となった状態のようだ。まさに、コミュニケーションの「クラウド」化である。

ITがコミュニケーションツールとして確立された現在、より豊かになるべきは「ファーストプレイス」「セカンドプレイス」なのかもしれない。居場所がたくさんあるほうが人生は楽しいけれども。

（みやけ　じろう）

## 私にとってのサードプレイス

京都工芸繊維大学ベンチャーラボラトリー研究員
**松田奈緒子**

よく考えてみると、「ファースト」も「セカンド」も定まっていない私に、「サードプレイス」を語れるのだろうか。

そして、もっとよく考えてみると、リーマンショック以来、「ファースト」と「セカンド」を確保できている層は、どれほどいるのだろう。派遣村には、「セカンド」を失い、「ファースト」すらない人たちが数多く集まった。彼らは、街なかにしか居場所がない。

今、低成長の時代でありながら幸せに暮らす人々として、フランス人が盛んに取り上げられている。先日、パリに暮らす日本人にたまたま聞いた話だが、彼女の職場のフランス人たちは、定時に仕事を終えた後、どこにも寄らず、家に直帰するのだと言う。実際、家族をなによりも大事にし、自身で創り上げた家庭に誇りを持っている人たちも多い。やはり、「ファースト」と「セカンド」が整っていれば、おのずと「サードプレイス」は生まれて来るのではないだろうか。

もちろん、街なかにも居場所がたくさんあるに越したことはない。ただ願わくは、「サードプレイス」とは、与えられたり用意されたりするものではなく、あくまで「偶然出合った」「自分だけが知っている」という（実際はそうでなくとも）秘密基地的な存在であって欲しいのだが、どうだろうか。

最後に私だが、見知らぬ街を一人で歩いてめぐることが好きである。縁のない街を歩いて、いろいろ眺めていると、いつの間にか自分の本来の居場所を見つめ直して、懐かしく思えてくるのである。こういう思いが、私にとってのサードプレイスと言えるのかもしれない。

（まつだ　なおこ）

## 多様な人との出会いで育むこうべUD広場

摂南大学教授
**田中直人**

かつて地域の中では、生活の場面においてなんらかのコミュニティとのつながりで生活を共有し、支えあう状況が存在していた。近年、無縁社会における都市居住者が問題となっている。そこでは一人暮らしの高齢者に限らず、種々の事情により孤立した生活環境に身を置く人たちが存在する。多くの人間が集まって住んでいても、そのような人たちを受け止める場は少ない。つながっていない人間関係を少しでも改善しようと、コミュニティ広場や集会スペースが増えても実際はあまり活用されていない事例も多い。地域を活性化する方策として、集合住宅の建設や商業施設を中心に再開発するようなまちづくりが盛んに進められているが、かつてのコミュニティが有していたような地域の人たちがふれあい、支えあうような生活の共同空間としての活気は蘇ってはいない。むしろ、かつて存在していた市場や商店街といった、対面型の日常会話の声掛けコミュニティ空間は減少し、消滅している。

地域に暮らす誰もが気楽に集まる広場、そのような空間や集まりのきっかけを通じて、それまでの自分の能力や活力を周りの人たちと共に学びながら、高めあい、できることから地域の主役となって、限りなく続けられる活動の場、そのようなイメージの場に身を置き、職場と自宅の行き来だけでなく、多様な人と共に生活を楽しめる地域の縁側的な場が、これからはもっと必要になると考える。

このような考えを少しでも実践すべく、阪神大震災の経験のあと、私の住む神戸で呼びかけ、多様な人との出会い広場である「こうべUD広場」の活動を十年近く前から続けている。地域の中でのふれあいや支えあう仕組みは一律でなく、これからも山や海に広がる各地の個性を活かした多彩な場の試みが展開されるものと期待している。

（たなか　なおと）

# 見えないサードプレイス

人と防災未来センター 研究主幹
**紅谷昇平**

忙しい毎日、職場と自宅との往復が日常生活であり、「サードプレイス」と呼べるような場所はなかなか思いつかない。そもそも世間の人はそんなに住む場所、働く場所に閉塞感を感じているのだろうか、職場や家庭が充実していればサードプレイスは必要ないんじゃないかな、とも思う。

しかしあえて「第三の場所」を挙げるとするなら、昨年から始めたツイッターだろうか。これまで電車で携帯電話をのぞき込んでいるのは「あまり見栄えのいい姿じゃないなぁ」と思っていたのだが、最近は、その仲間入りをしている。140字という制限はあるし、機能を使いこなしている訳でもない。それでも久しぶりの知人・友人と再会したり、職場の同僚の意外な素顔に触れたり、興味ある分野のイベントやニュースを知ることになったり、普段の人間関係とは異なるユニークなコミュニケーションの場として楽しんでいる。

既存メディアは、大学入試のカンニング事件のようにネットを悪として報道する傾向がある。某公共放送の「無縁社会」の特集に対しても、出演者が「『ネット縁』に対して前向きに考えて出演を承諾したのに、『無縁だからネットに逃げ込んでいる』ような演出をされてしまった」と苦言を呈している。私自身、建築というリアルな学問を学んだ身としては、バーチャルな場というものには、多少の戸惑いと限界を感じているのも事実である。

しかしチュニジアのジャスミン革命のように、インターネットのコミュニティが政権を倒し、国の形すら変える時代になった。バーチャルな世界が、実社会にも大きく影響を及ぼし始めてきている。コンピューターのシステムの設計・構造も「アーキテクチャー」と呼ばれるように、名前が付けられた時からリアルとバーチャルな空間は、いつか出合うことになっていたのかもしれない。

（べにや　しょうへい）

# 大阪の都心にて

大阪市計画調整局
**高橋和也**





仕事上、大阪都心のターミナル駅近傍で行われる大規模な民間開発プロジェクトの計画段階において、デベロッパーの方と協議することが多い。

その中で、周辺地域との回遊性が高くなるように歩行者ネットワークを充実してもらうこととあわせ、これと最寄りの主要な駅を結ぶ動線との結節点となるような場所には、人々の交流や憩いの場となるような広場などといった公共的な空間が創出されるよう、事業者の方と調整させてもらうことがある。

住む場所と働く場所との経路上に、人々が日々の生活を営む上で必要な「サードプレイス」をつくり出すのであれば、自分も、まちなかにサードプレイスと成り得るような種を蒔いている仕事に関わっているのかなという気がしている。

事業者の方々によって、あるいは場所、規模などにもよるが、広場のコンセプトは様々で、歩行者のたまり空間、待ち合わせの空間、憩いの空間、イベントなどの空間、賑わいの空間、その空間を感じるために訪れる空間、シンボリックな空間、屋外空間、屋内空間…など。

自分のイメージとして、「まちなかのサードプレイス」は人によりいろいろな場所が成り得ると考えるが、不特定多数の方が最大公約数的に該当する空間は、こういった広場的な空間になるのではないだろうか。

待ち合わせなどで相手を待つ間に物思いに耽る、または、仕事の移動中や帰宅途中に夕日や景色を眺めながら佇む…、都心にそういったスポットが少しずつでも増えていけばと考えている。

（たかはし　かずや）

484

法令コーナー

# 京都市の景観政策の進化

岡田圭司

京都市都市計画局都市景観部景観政策課企画係長

山紫水明と称えられる豊かな自然と1200年の悠久の歴史に育まれてきた京都の美しい景観が日ごとに失われてきていることから、京都市では、歴史都市・京都にふさわしい景観の保全と創造を目指し、平成19年９月から「新景観政策」を実施し、３年半が経過した。この間の景観政策に対する市民の皆様や事業者の方々の意見を踏まえ、政策全体について改めて点検した結果、50年後、100年後の京都の将来を見据えて策定した高さ規制をはじめとする基本的な枠組みは維持しつつ、以下の３つの点を中心として、景観政策を進化させることとした。

## 市民とともに創造する景観づくり

新景観政策では、景観法の制度である景観地区などを活用して、市街地の建築物のデザイン規制を行っている。しかしながら、地域での景観は、地域の歴史やコミュニティの広がりにより様々であり、京都市が定めた景観地区などの地域区分では十分な対応ができない状況がある。このことから、地域での景観づくりの取り組みを評価し、その成果をデザイン基準に組み込む仕組みが求められていた。

そこで、地区計画にデザイン基準を定めた場合、その基準を景観法に基づき条例化し、当該地区での建築計画については、認定を要することとし、認定を受けた建築計画については、京都市が定めたデザイン基準を適用除外とすることとした（図１）。

また、地域でのデザイン基準が定まっていない場合でも、住民が主体的に景観づくりに取り組む場合、その組織と当該地域での景観方針を定めた計画書を市長が認定し、当該地域で建築をする場合、地域組織と意見交換をすることを義務付ける制度をつくった（図２）。

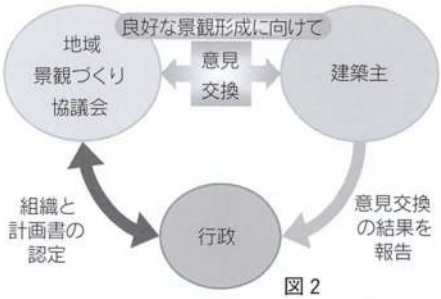



図２

この制度の特徴は、地域にふさわしいより良い建築物を誘導することができるところにある。もちろん、意見交換なので強制力はないが、地域と建築主や設計者が景観について話し合いながら、良いデザインの建物が建つことを期待している。

## デザイン基準の更なる充実

京都市では、約3,431ヘクタールの景観地区を指定し、地域の特性に応じて、８つの類型に分けて、デザイン基準を都市計画に定めている。今回の景観政策の進化に当たり、よりきめ細かなデザイン基準とするため、設計関係の業界団体と一緒になって、現地調査を行い、デザイン基準の検討をしてきた。

その中で、地域特性が明らかになったところについて、デザイン基準の変更をする。

１つは、歴史的な建物が立ち並んでいる岸辺地域である。河川沿いは、緑豊かな景観の形成を目指していたが、京町家が連担している地域もあり、その歴史的な風情を継承することができるデザイン基準となるよう充実を図った（図３）。

もう１つは、高層建築物が立ち並ぶ可能性がある幹線道路の沿道である。京都の建物の特徴として、勾配屋根があることが挙げられるが、これを踏襲する形で、これまでは中・高層建築物についても勾配屋根若しくはそれに代わるものをデザインの基準としていた。しかしながら高層建築物では、屋上の景観として、スカイラインが整っていることが美しい場合もあり、必ずしも勾配屋根を必要としないことから、水平庇によるスカイライン形成をデザイン基準に加えた（図４）。

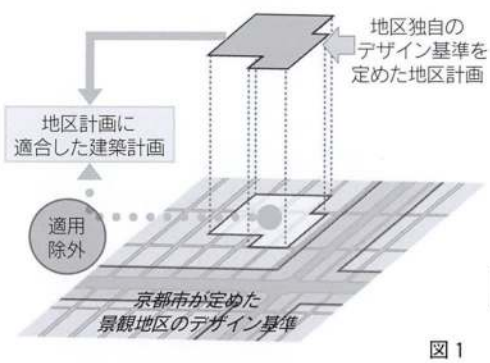



図１




図３




図４　スカイライン形成のイメージ

## 優れた建築計画の誘導

新景観政策で、地域特性に応じたデザイン基準を細かく定めたことから、デザイン基準に合致した建物が増えつつある一方で、その基準にあわすことだけを考えて設計が行われる面が出てきた。もちろん、細かいデザイン基準の中でも、工夫次第では様々なデザインが可能であるが、より良いデザインへのチャレンジをしようとする芽を摘んでしまっているのではないかという危惧が生まれてきた。

このことから、素晴らしいデザインの建築物を積極的に誘導するために、計画の早い段階から、専門家も交えた協議ができる仕組みを整えた。

また、一定のまとまりのある敷地で、複数の景観規制区域にまたがる場合や、優れた既存建築物がある場合など、現在のデザイン基準をそのまま適用すると、敷地全体の調和が取れない場合において、総合的な計画の下で、デザインの調和を図ることができる制度も設けた。

## おわりに

京都の美しい景観は、京都市民のみならず、わが国国民の共有財産であり、世界の宝である。この美しい京都の景観を、未来の世代に継承することは、現在に生きる私たち一人ひとりの使命であり責務である。

京都市では、今後も市民の声に耳を傾け、新たな課題に迅速に対応し、「日本に京都があってよかった」と実感していただける魅力あふれる京都の景観づくりに全力で取り組んでいく。

（おかだ　けいじ）

388
設備の頁

# ポンプのトラブル事例とその対応

仲　信吾
テラル㈱技術部設計課長

ポンプは取り扱う液体により、ポンプ内部の羽根車１回転当たりの吐出流量が変化する非容積式と、羽根車１回転当たりの吐出流量が一定である容積式に大別され、非容積式は水を、容積式は油を主に取り扱っている。

非容積式ポンプは大半が遠心ポンプであり、その設置方式により、陸上設置型・水中設置型に分類される。また、陸上設置型ポンプは非自吸式と自吸式に分類され、非自吸式が主に使用されている。

建築設備においては、下記の通り多岐にわたり使用されている。

- 給水設備：給水ユニット（上水用・中水用）井戸用ポンプ
- 排水設備：汚水用、雑排水用、汚物用（水中ポンプ）
- 給湯設備：給湯循環用
- 空調設備：冷温水循環用、冷却水循環用、補給水用
- 防災設備：消火栓用、スプリンクラー用
- 水景設備：ろ過装置用

これらのポンプは、当然ながら可動部・摺動部を有しているため、適切な調整・メンテナンスが不可欠である。

今回は陸上ポンプと（排水）水中ポンプにおける代表的な調整・確認項目を、トラブル事例を交えて紹介する。

## ポンプ振動事例

共通ベース上に横型うず巻ポンプ本体と汎用電動機が組み付けられている、**図１**のような汎用ポンプの振動事例について紹介する。

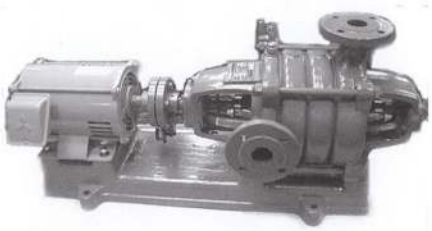


図１　汎用ポンプ

電動機トルクをポンプ軸に伝える伝達装置として、フランジ形たわみ軸継手（JIS B 1452）が多用されている。個々に回転バランスの取られたポンプ、電動機であっても、その軸芯が適切に調整されていなければ、異常振動、異常音を発生し、軸受、軸継手ブッシュ（ゴム）等が早期損傷を発生する。

メーカー工場出荷前に、軸芯は調整されているが、現地基礎、配管荷重等の影響により軸芯は、ずれる可能性が高いため、現地にてポンプ据え付け完了後、ポンプ軸と電動機軸の軸芯確認・調整を必ず行う必要がある。

**図２**に、フランジ形たわみ軸継手の芯ずれ許容値を示す。

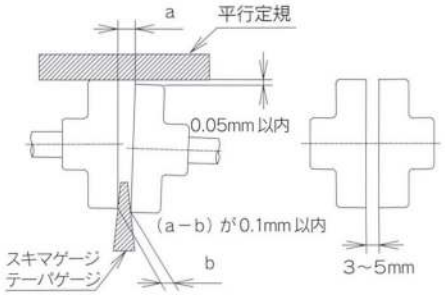



図２　芯ずれ許容値

## メカニカルシール漏れ事例

ポンプ軸封装置として採用される、メカニカルシール（**図３**）（JIS B 2405）は“全く水が漏れない”軸封装置であると認識されていることがあるが、正常な使用範囲内であっても微少漏れが発生することがあるので、ここで紹介する。

メカニカルシールとは、軸に垂直な２平面（摺動面）を高速摺動させ、回転部密封を行う装置である。平滑精密に仕上げられた摺動面を、スプリング圧により押し付け、摺動面間に１μm以下の微小隙間を形成させ、焼き付き、漏れを防止している。微小隙間に入り込んだ流体は、摺動面の焼き付きを防止するとともに、蒸気となり、大気側へ流出する。一般的には、この漏れは目視確認できないため、問題とはならないが、ラギング等で密閉されている場合は、微少な漏洩水が確認されることがある。これは正常なメカニカルシールである。

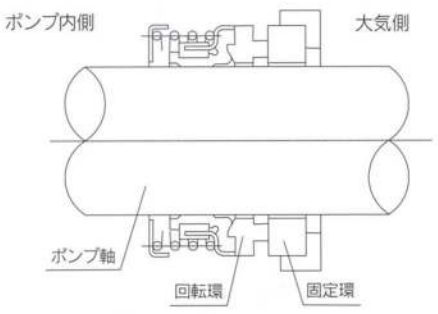



図３　メカニカルシール

また、いかに精密に仕上げられた摺動面でも、その組み合わせによっては、粗さ、うねりによる隙間が生じることがあり、使用条件によっては“初期漏れ”を発生することがあるが、数時間の運転による“なじみ”で漏れが止まる。これも正常なメカニカルシールである。

## 排水水中ポンプ過電流事例

一部の排水水中ポンプで逆回転運転をすると、過電流運転となり、過負荷保護装置を動作させることがある。

一般的な遠心ポンプでは逆回転運転をすると、著しく吐出水量、吐出揚程、ポンプ効率が低下するため、揚水不能（不足）となる。その結果、ポンプは仕事をしないため、過負荷保護装置が動作することはない。また、陸上ポンプでは、回転方向の目視確認が可能なため、問題解決が容易である。

しかし、セミボルテックス、ボルテックス排水水中ポンプ等（**図４**）の場合、逆回転運転をすると、吐出水量、吐出揚程、ポンプ効率は低下するが、逆回転でもある程度のポンプ能力を有するため、過電流運転となり、過負荷保護装置を動作させることがある。また、ポンプは水中に設置されており（**図５**）、回転方向の目視確認が困難であり、問題を抱えたまま使用される例がある。



図４　ボルテックス羽根車

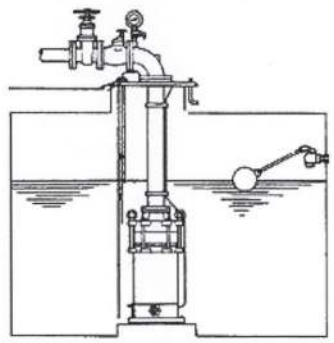


図５　排水水中ポンプの設置例

排水水中ポンプの回転方向の正否を確認する最も適切な方法は、吐出水量を確認することであり、吐出水量が多い方が正回転運転である。

（なか　しんご）

25

再読　関西近代建築

モダンエイジの建築遺産

# 大阪中央郵便局

橋寺　知子

所在地／大阪市北区梅田
設計／逓信省営繕課（吉田鉄郎）
施工／清水組
竣工／昭和14年
構造／鉄骨鉄筋コンクリート造
規模／地上7階、地下1階
種別／郵便局

建築の価値を述べるとき、その地域固有の外観をしていたり、建築が建てられた時代の特徴を色濃く示していると、説明がしやすい。反対に、「普通」の建物の場合、その特徴を分かりやすく伝えるにはどうしたらいいのか、非常に迷う。今回取り上げる大阪中央郵便局はその典型だ。「大阪らしさ」は微塵もなく、箱みたいなごく普通のビルで、鉄筋コンクリート造ラーメン構造の見本のようである。大阪の玄関口・大阪駅の駅前広場の一辺を構成する建物にもかかわらず、色彩が少し暗色だからか、一般の人々の印象にはあまり残っていない。一方で、築70年を超えるのだが、古さも感じさせない。ここ数年で大阪駅周辺は大きく変わり、新しい阪急ビルや大阪駅ビルが目をひく。その中で、超高層ビルへの建て替えが発表され、郵便局機能は既に移転して、空き家になっているが、戦前期の唯一の生き残りとして存在する大阪中央郵便局庁舎を、今回は見ておきたい。

## ■大阪の駅前広場

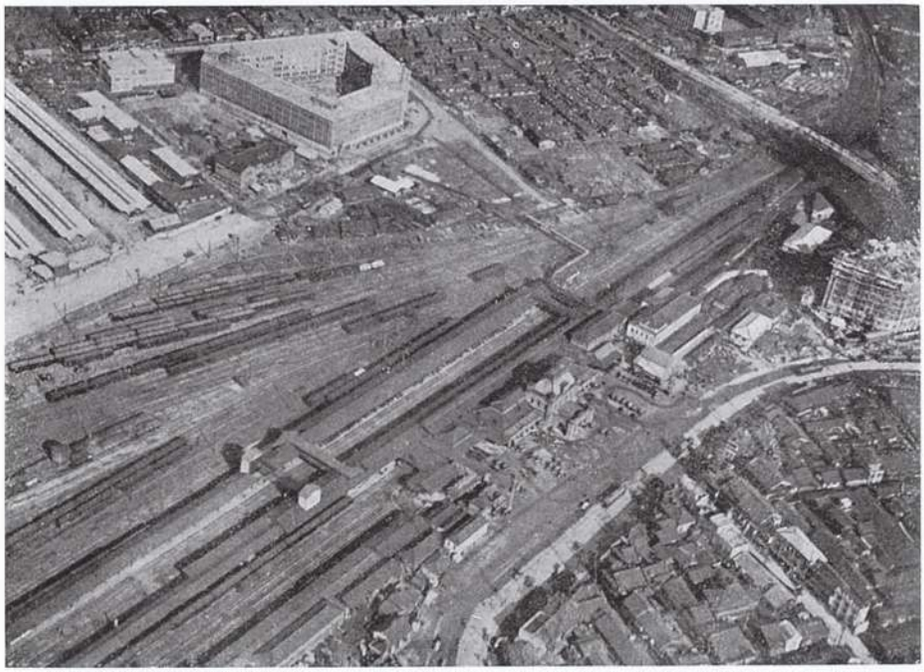
大阪―神戸間が開通し、大阪駅が開業したのは明治７年である。当時、鉄道駅や路線は、周辺住民の反対によって、都心から離れた所に設置されることが多かった。明治初年、梅田にはほとんど何もなく、第１次市域拡張までは大阪市域ではなかった。初代の大阪駅は、ちょうど大阪中央郵便局舎あたりにあったが、明治34年に現在のアクティ大阪の位置に、煉瓦造の二代目大阪駅が竣工した。駅前には木造の土産物屋や飲食店、旅館等が建ち並び、にぎやかにはなってきていたが、玄関口にふさわしい景観とは言えなかったようである。大正９年に、大阪市は大阪駅周辺の改造・整備や、市電網・道路網の整備を含む第１次都市計画事業に着手し、昭和３年、「大阪駅付近都市計画事業」がまとまる。この計画では、駅前の東西に走る道路を拡幅して最大54間とし、4200坪の大きな駅前広場を設置するとともに、地下には国鉄、阪急と阪神を連絡する地下広場も盛り込まれていた。駅南側の地区は、低層の木造家屋ではなく、東京駅前・丸の内のような、壮麗な高層ビル街にすることが求められた。土地区画整理事業により、コツコツと整備は進められ、東への延伸を長年熱望していた阪神電車は地下工事を進め、昭和14年、阪神梅田駅地下駅舎が完成した。大正期から大阪駅の高架化が計画され、それに応じて５階建てでホテルも備えたモダンな第三代大阪駅が計画された。しかし戦争の影響から、昭和15年、未完成の３階建てで使用開始となった。戦後、駅前は闇市と仮設的な復旧建物に埋め尽くされ、玄関口にふさわしい都市景観の形成には、さらに長い歳月がかかった。

4200坪の駅前広場は、市電やバス、タクシー乗場のスペースや大阪駅前の人車の交通量を考えると、ゆったりした広場ではなかった。近年のリニューアル工事では、南側空地空間に駅ビルが増築され、外部の広場空間がなくなってしまった。代わりに駅ビル内部やこれから開発が進む北側にゆとりの空間が計画されている。駅南側の景観は、100年の間、定まることなく揺れ続けたと言える。

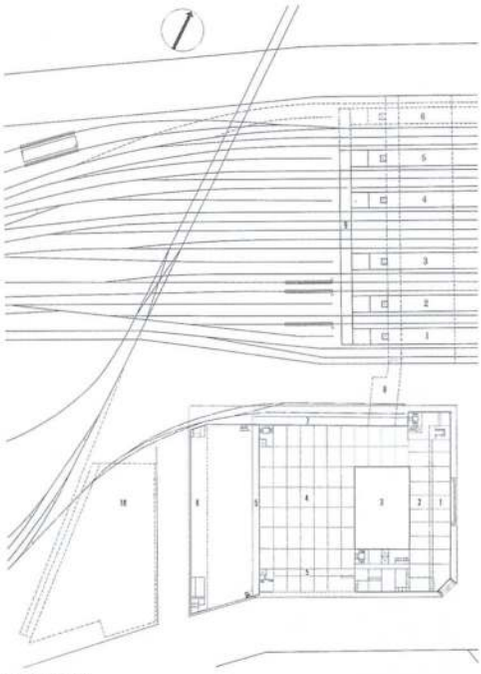
大阪中央郵便局の敷地は、大阪駅付近都市計画事業の範囲外であり、大阪市の都市計画に関する資料にはほとんど表れない。第三代



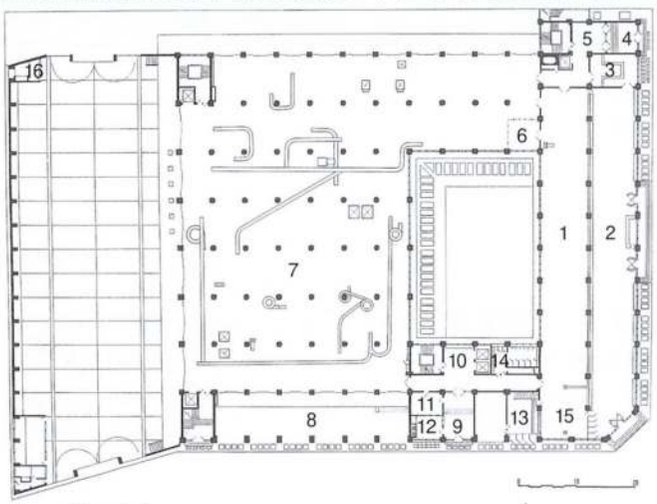

①**外観**（現在）高層化する街並みに埋もれつつあるが、力強さがある。



②大阪中央郵便局建設前の大阪駅。右端に阪急ビルディング（『建築と社会』昭和4年12月号より）



③配置図



④一階平面図

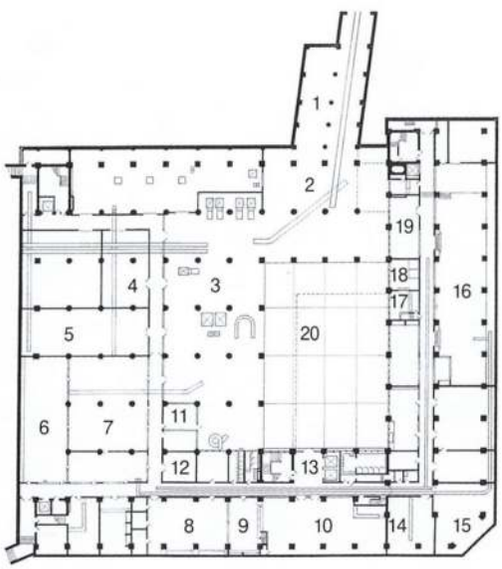
1．窓口事務室
2．公衆室
3．私書函室
4．第二玄関
5．第二広間
6．税付小包保管室
7．通過郵便及小包郵便現業室
8．発着室
9．第一玄関
10．第一広間
11．応接室
12．第一監視員詰所
13．電配及速達通送手控室
14．便所洗面所
15．公衆電話
16．監視員詰所



⑥大阪駅南側（現在）　広場はなく、奥右側の郵便局が小さく見える。

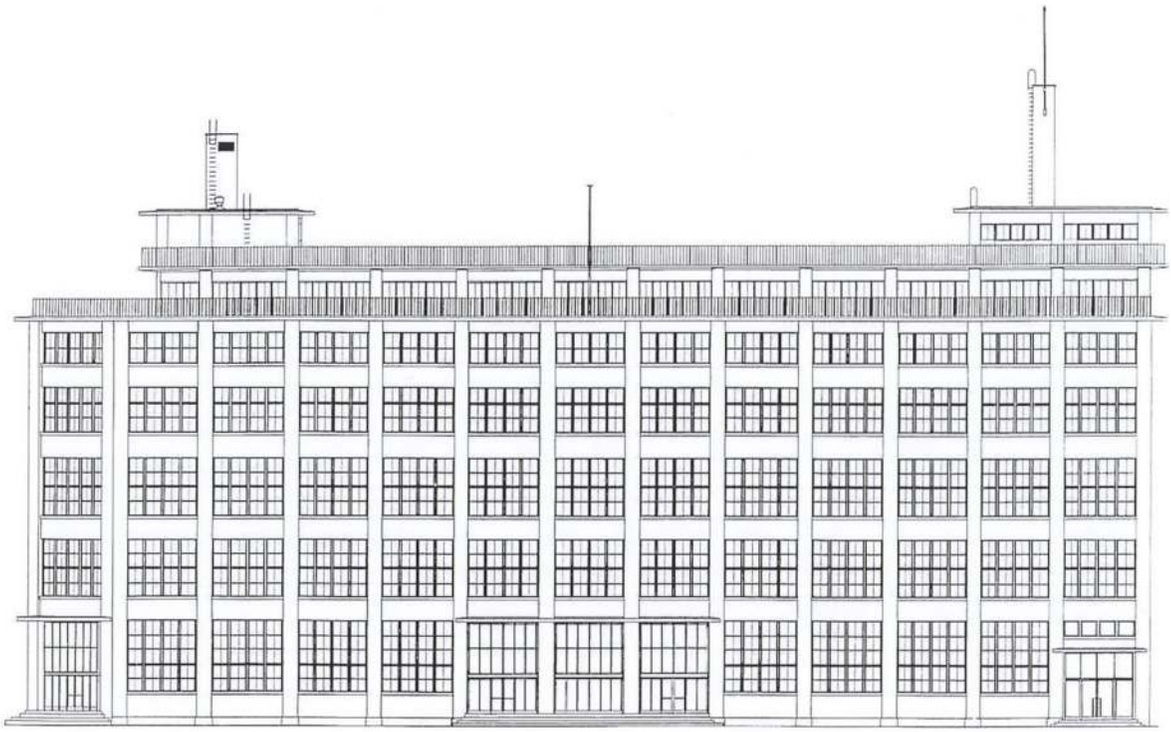
⑤地階平面図

1．地下道
2．通路及び三輪車置場
3．現業室
4．第二倉庫
5．第一倉庫
6．郵便外勤控室
7．郵便外勤更衣室
8．厨房
9．第二配膳室
10．第二食堂
11．鉄郵受渡係室
12．物品保管室
13．広間
14．売店
15．鉄郵倉庫
16．暖房汽缶室
17．第二脱衣室
18．第二浴室
19．第三倉庫
20．中庭

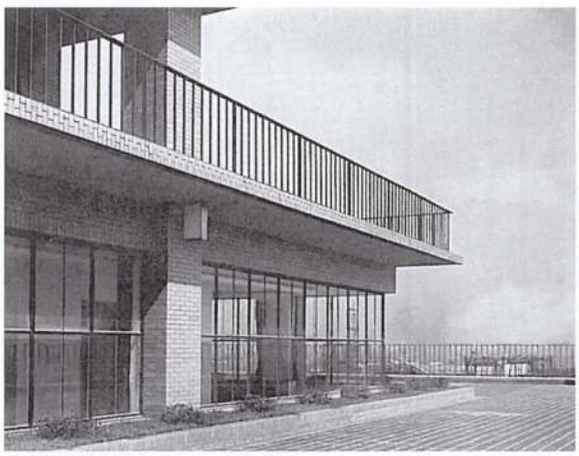




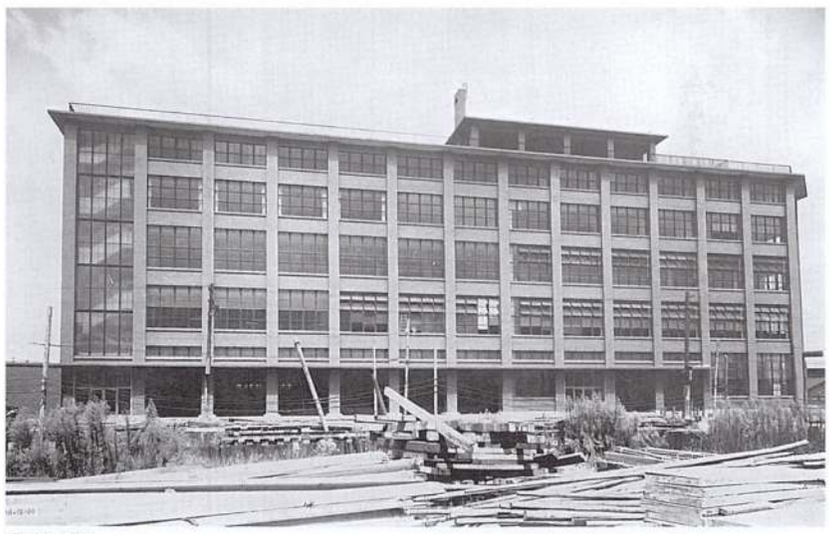
⑦窓回り（現在）



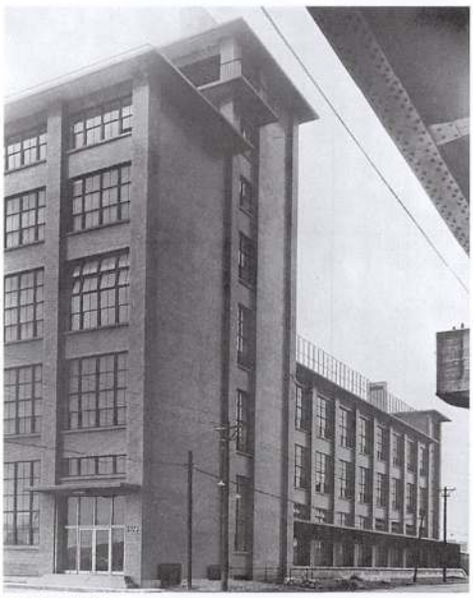
⑧正面･東立面図



⑨6階バルコニー



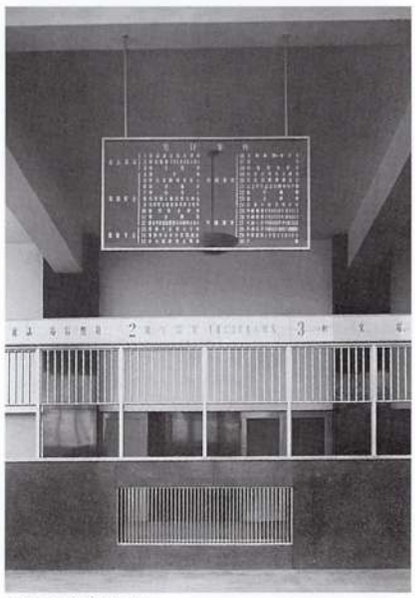
⑩南外観



⑪東北外観



⑫1階公衆室



⑬窓口と案内板

の大阪駅新築工事と合わせるように、駅西側に中央郵便局が新築された。区画整理等の規制は直接受けないが、大阪駅前に求められた景観を意識して設計された[注1]。当時、郵便物は鉄道で輸送するため、中央局は鉄道駅に隣接して設置された。大阪中央郵便局の立地は、鉄道と郵便の関係を思い起こさせる近代化遺産としての価値がある。郵便事業の普及は、国家の近代化のバロメータでもあった。

## ■逓信建築と吉田鉄郎

日本の近代化は、政府や官庁によって、強力かつ迅速に推し進められた。郵便制度もその一つで、明治４年に創設され、徐々に体制を整え、明治18年に駅逓・電信・燈台・管船の事務を所管する逓信省が設置された。逓信省の建築は、それ以来の長い歴史を持つが、特に大正期から昭和初期には、山田守や吉田鉄郎等が入省し、先進的な建築思想で、初期の日本のモダニズム建築を推進した。逓信省営繕課は、日本の近代建築史を語る上では欠くことのできない組織である。吉田鉄郎に薫陶を受けた後輩諸氏による研究や書籍[注2]を見ると、初期のドイツのセセッション風の庁舎から、モダニズムへの吉田のデザインの遷移がよくわかるが、それは建築界の流行に乗ったのではなく、かなり複雑な機能を満たさなければならない逓信省の建築に、真正面から取り組んだ成果だと見える。

## ■手の切れそうなモダニズム建築

実は竣工時、『建築と社会』には大阪中央郵便局の記事が掲載されていない。昭和戦前期、伊藤正文ら大阪市の若手技師たちは、『建築と社会』誌上で都市問題や新興建築を盛んに語っているが、逓信省の技師は登場せず、作品紹介でも郵便局や電信局の掲載がない。そこで本稿では、昭和43年に発行された『吉田鉄郎建築作品集』[注3]をもとに、竣工時の大阪中央郵便局庁舎を振り返りたい。

大阪中央郵便局の設計で、何よりも重要視されたのは、いかに大量の郵便物を合理的に迅速に処理するか、であった。作品集に転載された『現代建築』昭和14年12月号の「計画の概要」の記述のほとんどは、郵便物の処理の方法や流れに関してである。大阪中央郵便局は鉄道幹線の主要受渡局であり、同時に大阪市内の一、二等局を連絡する伝送便の集中局であった。１階の大半は、郵便物を取り扱う現業階で、北側には63mの貨物線プラットホーム、西側には68mの自動車用発着場、南側には34mの大型郵便引受の発着台が設けられている。現業階は１階にはとどまらず、２階から地階まで続く。到着した郵便物は、すべて２階に一旦引き上げ、適宜処理をしながら下階へ降ろし、最下階（地階）では、搬送用地下道で、大阪駅の各プラットホームにつながっていた。短時間で合理的に、多量の郵便物が捌けるよう、苦心した設計である。

２階の東側半分と３階以上には、事務室や会議室、局長室、宿直室や浴室等の福利厚生施設が整然と配置されている。６階は宿直室が並ぶ階だが、壁面の位置が下がり、シンプルで美しい手すりに縁取られた広いバルコニーがある。昼夜問わず動き続けている広い郵便局舎内とは思えない、人間的なスケールの空間になっている。昭和14年８月に関西を訪れた板垣鷹穂は、「吉田氏の仕事らしく念入りに出来、割り切れた感じが快く、如何にも局員の健康を保護する建物のやうに見受けられた」[注4]と述べている。

１階東側は、一般利用者のための窓口空間である。客溜まりはモノトーンでシンプルな意匠だが、大きな窓から光が十分に入り、明るい空間であった。窓のスチールサッシュも当初のまま保たれており、線は細いが力強い印象を与えている。作品集に、窓口と上部の案内板を写した写真が掲載されている。逓信建築独特のレタリングは、少し縦長で清廉な感じがあり、モダニズムの建築によく合う。

作品集にはさまざまなアングルからの写真が掲載されている。掲載された写真を見て感じられるのは、無駄のなさと手の切れそうなエッジの鋭さである。外観は、柱と梁以外はすべて開口部で、これ以上そぎ落とす贅肉がない。直線的な影がつくり出す立体感がよく写し出されている。それぞれの窓下の窓台のちょっとした出が、細いがくっきりした影を作る。外観で最も大きな特徴は、５階開口部上部に設けられた庇だ。東京中央郵便局にも庇のような突起があるが、その位置は４階と最上階の５階の間で、庇というよりは、西洋の様式建築の軒蛇腹状で、モダニズムの過渡的状況とも見なされる。大阪中央郵便局の突起はまさしく庇であり、雨の多い日本の気候風土を捉えたものと言われる。戦後の郵政建築に、各階に庇が廻らされた「郵政スタイル」と呼ばれるスタイルがある。戦後の日本の庁舎建築やオフィスビルに広く見られるが、観音克平は、「日本の近代建築における鉄筋コンクリート造の庇の初出は、部分的ではあるが、やはり大阪中央郵便局（昭和14年）であろう」[注5]と述べている。

「計画の概要」で、外観について述べられているのは、「局舎の外装は純粋な無理のない表現を目標とした。煤烟の多い大阪市として汚れの目立たぬ様特に灰紫色のものにした」という部分だけである。板垣鷹穂も「外装の防空色は、通信関係の中心建物としては必要かも知れないが、それ以外に、接近する大阪駅の操庫（ママ）場から来る煤煙を考慮する限り、明色を使うことは事実上不可能であるらしい」[注6]と述べているように、大阪の煤煙問題は深刻で、合理性を考えた色の選択であったのだろう。今日、周囲には白く明るい建築、あるいは透明度の高いガラスのカーテンウォールの建築が多い。一方、大阪中央郵便局には電気が灯っておらず、一層暗く感じられる。しかし近くで見ると、壁面のタイルはいぶし銀のように美しい艶があり、よくメンテナンスされ、しっかりとしている。窓台まで、すべてタイル貼りで仕上げられていて、タイルの寸法を単位として、建物のすべての寸法が決定されていることがわかる。

## ■モダニズム建築の保存

モダニズムの建築は、大量生産可能な工業化製品で作られており、求められる機能に忠実に設計すれば、その形は自ずと出来上がり、誰が作っても同じになると思えてしまう。大阪中央郵便局も、複雑な機能を背負っていながら単純明快で、これしか解はないように思える。しかしこの完成度は、吉田鉄郎の建築家としての情熱とセンスによるものであり、違った意味で、「職人の技」である。吉田鉄郎は「見て嫌にならない建築」を目指した。普通にみえる建物ほど、そこに至るまで、考え抜いた時間と手間がかけられている。

モダニズムは、過去と決別し、永遠性や記念性よりも、機能性と合理性を求めた。歴史性や象徴性を捨象して生まれたモダニズムの建築の保存は、パラドクスなのだろうか？我々が歩んできた歴史を知る上で、モダニズムの建築も、マイルストーンとしての存在価値があるのではないだろうか。

注１　橋爪紳也：大阪中央郵便局と大阪駅前の都市計画、『ヒストリア』、平成22年８月、pp.32-37
注２　向井覺：『建築家吉田鉄郎とその周辺』、昭和56年、相模書房、向井覺、内田祥哉編：『建築家吉田鉄郎とその周辺』、昭和44年、鹿島出版会
注３　吉田鉄郎建築作品集刊行会編：『吉田鉄郎建築作品集』、昭和43年、東海大学出版会
注４　板垣鷹穂：新京阪雑考、『国際建築』昭和14年９月、p.405
注５　観音克平：郵政建築の軌跡、『郵政建築　逓信からの軌跡』、平成20年、建築画報社、p.29
注６　前掲誌（注４）

（はしてら　ともこ／関西大学建築学科准教授）

# 澤田 充　—MITSURU SAWADA—




「本町ガーデンシティ」にて

学歴
関西学院大学卒業

経歴
1960　兵庫県生まれ
1984　リクルート
1993　ケイオス設立

主な活動
大阪市都市再生アドバイザー
景気動向懇談会（関西電力・財団法人関西社会経済研究所主催）委員
淀屋橋WEST プロデューサー
大阪商工会議所流通活性化 委員
北船場くらぶ 代表
「食の都 大阪」推進会議 委員
船場地区HOPEゾーン協議会 理事

主なプロジェクト
大阪梅田商業施設「イーマ」プロデュース
大阪「淀屋橋WEST」プロデュース
東京丸の内「東京ビルディング トキア」商業ゾーンプロデュース
東京丸の内「新丸ビルディング」物販及び飲食コンサルティング
大阪「高島屋大阪店新本館」コンサルティング
淀屋橋WEST「淀屋橋odona」プロデュース
大阪中之島「京阪中之島線」4駅プロデュース
大阪「本町ガーデンシティ」商業ゾーンプロデュース
大阪「フコクフォレストスクエア（大阪富国生命ビル商業ゾーン）」プロデュース
「名古屋インターシティ ダイニングテラス」プロデュース
福岡イムズ20周年リニューアル「イムズダイニングテラス」プロデュース

聞き手　奥　貴人（安井建築設計事務所）
写真撮影 河合止揚

## 一軒の店から街は変わる

数年前に一緒に仕事をした時の澤田さんの印象は、相当な覚悟をもった本気の人である。こちらも常に強い気持ちで挑む必要があった。気さくで物腰の柔らかい雰囲気をもちながら、情熱的な言葉を放つ。その言葉は、緻密な調査と日常の探究心・好奇心から得た情報を編集し組み立てられ、竣工後も色褪せない大木のように建物とともに根付いている。
現在も数多くの街づくりや商業プロデュースを手掛ける澤田さんに、「北船場」にあるケイオスの事務所にて、その経歴からお話を伺った。

リクルートに入社後は、オフィスビルの企画や新規テナント事業に携わり、大半は飛び込み営業の日々であった。数年後に一念発起し、当時日本では馴染みのなかったインテリジェントビルに着目し独学で学ぶ。文系の出身のため工学的な要素は知人に教えを乞いながら最先端の知識を身につけ、会社での「存在意義」を確立した。そして数件の大型プロジェクトを任されるが、リクルート事件を発端に社内失業してしまう。他部署のリーシング支援などの後、経理部門へ異動となる。上司に異動の理由を詰め寄るが「経理に向いているかは知らん」の一言に妙に納得し、いずれは起業する思いもあり、4年間経理の経験を積んだ。その後、ある建築雑誌の「一軒の店から街は変わる」というフレーズにも背中を押され、「街をつくる仕事」を実現させるため「ケイオス」を立ち上げた。半年間で受注がなければ、サラリーマンに戻る覚悟だった。

クライアントもノウハウもない独立初期、知人の紹介でカラオケ店のマーケットリサーチを受けた。毎日何軒もの店を渡り歩き、店内のサービス、客層、空き状況など、日々の定点観測だからこそできる詳細な資料をつくりあげた。その後も依頼が続き、場所性を加味した出店計画提案も（勝手に）行い、信頼をさらに獲得するとともに、現場調査の経験の蓄積と商業プロデュースの手応えを掴んでいった。
澤田さんの注目を得る契機となったのが「梅田イーマ」である。地道な調査から掴んだ、9割の人が地下を歩く「地下の街」というイメージを払拭するために、駅に背を向けた南側に吹抜けの主玄関をつくり自然光を地下まで導いた。従来のセオリーを覆す手法であった。この仕事が様々な出会いを呼び、新たな依頼が殺到した。自発的に行う街づくりとして、澤田さんの代名詞となっている「淀屋橋WEST」の始まりも、その一つである。現在47店舗まで広がり、大阪の街に新しい風景をうみだしている。

「常に使い手の代弁者でありたい」と澤田さんは言う。建物の竣工後の姿をイメージして、想いを吹き込んでいる。インタビュー当日に訪れた「本町ガーデンシティ」でも、他の建物に増して各所に案内サインが配され、使い手の視線から建物をつくり込む姿勢があった。街の構成要素の一つとして建築を捉え、「ここ、いいよね」という空間を感じる感覚を大切にしている。提案したいことは最初に直感でイメージできる。その直感を検証・分析し理論を構築して、人に伝えるための言葉にする。クライアントには「言葉をあげる」のだという。常にどういう視点で物事をみているかが問われ、またどんな依頼でも対応できるよう、自分の引き出しの中に様々なストックが用意されている。

独立して18年、「まだ見ぬ風景を創り続けていく」ことが、数多くのプロジェクトを並行して進める原動力となる。自身の今後については、「大器晩成でありたい」と無邪気に微笑む。その姿からは、「使い手が自分のペースで歩き、楽しむことができる街づくり」を、その街にくらしながら着実に進めていく覚悟が伺い知れた。

日本建築学会近畿支部
環境保全部会

8

公開研究会REPORT

# 都市空間デザインの展望
## -日伊の比較を通して-



●講師からのメッセージ

①日本の街並みはなぜ美しくならないのかという問題に対し、ある街はなぜ美しいのかと考える視点も必要だ。

②イタリアでは、歴史的市街地の定義、保全あるいは保存の対象、保全すべき地域の範囲などが明確に規定され、徹底されている。その点、日本では不十分なのではないだろうか。

③美しい都市景観も重要であるが、面白い都市景観も大事である。面白い街には活力を生み出す効果があり、美しい街には癒し効果がある。


■日本建築学会近畿支部環境保全部会

主査：三好庸隆（武庫川女子大学教授）

幹事：伊丹康二（大阪大学大学院助教）

上山　卓（株式会社コープラン）

北尾靖雅（京都女子大学准教授）

高岡伸一（大阪市立大学都市研究プラザ特任講師）

八木康夫（関西学院大学教授）


日本建築学会近畿支部環境保全部会では、平成20年度から、「なぜ日本の住環境は美しくならないのか」という問題意識のもと、重要と考えられるテーマを取り上げ、そのテーマについて先端的な取り組み、研究をされている講師をお迎えし、公開研究会を行っています。

●

## 第11回公開研究会

第11回となる公開研究会は、「景観から景観まちづくり、そして、まちづくりへ」について、関西学院大学総合政策学部教授の加藤晃規先生を講師に迎えて開催しました。（開催日：2010年7月8日、会場：大阪市立大学　文化交流センター・大セミナー室）

なお、本公開研究会は、㈳日本建築協会の後援を得ています。

加藤先生はこれまで、イタリア都市を比較論的に研究され、都市マスタープランの策定やランドスケープデザイン分野で活躍されてきました。その経験をもとに、次世代型都市に、政策的視点、計画的視点、デザイン的視点から、身近な都市づくりにおける住環境やその美しさについて考えます。

●

## 講演

日本の街並みはなぜ美しくならないのかというテーマ設定だが、今回は、イタリアの街はなぜ美しいのかを説明したい。

### ■都市景観から風景計画へ

### 1．イタリアの景観まちづくり

### （1）ウルビノモデル

歴史的中心市街地とその周辺地区、さらにその外側に位置する農業地区に分けてゾーニングする手法は一般的な手法であるが、ウルビノ市では「新開発地区」を含めてゾーニングを行った。

イタリアでは、産業革命以前の街を歴史的中心市街地（チェントロ・ストリコ）として定義している。

ウルビノ市の歴史的中心市街地は、1960年ごろから空き家が50％を超えるなど荒廃していた。そこで1968年、ウルビノ特別法という、建物機能更新や観光施設整備のために国庫補助を行う法律が制定された。すべての建物の構造や用途から道路の勾配など、詳細に調査しており、その情報をもとに建物機能再生計画を策定している。現在、歴史的中心市街地内のすべての建物は、学校や公共施設など13種類のみの利用用途で再生されている。

### （2）ボローニャモデル

歴史的中心市街地内で「ローコスト庶民住宅事業」を展開し、住宅を含めて景観保全や歴史

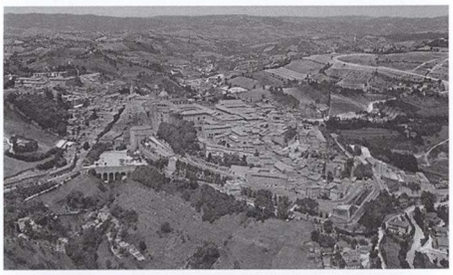


写真1　ウルビノ市の歴史的中心市街地

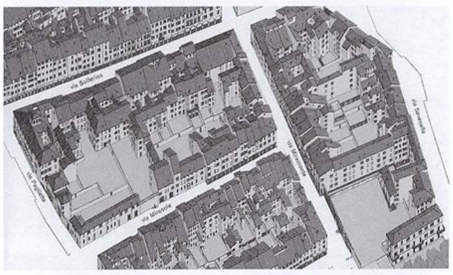


写真2　ボローニャの歴史的中心市街地



写真3　ローマのコンドッティ通り

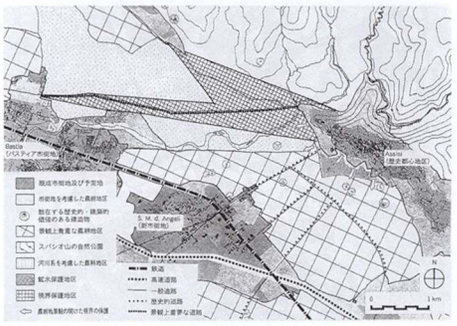


図1　アッシジ地区の風景計画




図2　内戦後の建物被害（ドゥブロブニク）

的雰囲気を保全した点が特徴である。

また、社会的保存として、3つの保存テーマを掲げている。①（街の凍結保存ではなく）建物の形態類型の保存②地区の機能類型の保存（住機能や中小職人企業が提供する都市サービスの維持）③居住者の社会的類型の保存（戻り入居を勧めるなど地区の人口構成や社会階層の保存）―である。

歴史的中心市街地内にあるソルフェリーノ地区は、1960―1970年代に住宅修復事業の類型学的保存が行われた地区で、現在でも、一定の真正性（オーセンティシティ）をもった、それなりの景観が残されている。また、この地区では修道院などの宗教施設が多かったが、外観や内部構造は継承しつつ、現代的用途への転用により再生されている例が多い。例えば、大学施設、寄宿舎、ミュージアムなどである。

（3）ローマモデル

ローマでは、歴史的中心市街地を中心に保存ゾーンが広がっている。1860年以前の建物が多くを占めるAゾーンの周辺に、20世紀前半に開発された近代郊外住宅地であるBゾーンが広がっている。このBゾーンは準歴史的市街地とされており、歴史的環境として近代も含まれ、保全の対象となっている点が特徴である。

Aゾーンでは、建物高さや容積の変更は認められず、広告物には4種類のランクが設けられ、厳しい規制が設けられている。Bゾーンにおいても、既存建物の外観や容積の維持が原則とされるなど規制がかけられており、上質な住環境が維持されている。

一方、特定の敷地においては、ザハ・ハディドの国立21世紀美術館やレンゾ・ピアノのオーディトリアムのように世界的文化的価値がある建築物に限り、その形態などにかかわらず認められる。ただ、このオーディトリアムも最高高さが指摘され、5mほど低くせざるを得なかった。

（4）アッシジモデル

イタリアでは、1947年、戦後すぐに憲法で風景美の保護を規定した。1977年に風景美保護の管轄は州に移され、1985年には通称ガラッソ法が制定された。この法により、海岸線から300m以内の地区など13カテゴリーの風景を州の規制下におき、改変したい場合は州の風景計画の策定を義務付けた。

アッシジ地区は、そのガラッソ法の適用地域である。アッシジは町全体が世界遺産になっており、「地域の景観」という概念で保全を行っている。隣町や鉄道駅からの遠望を確保するため、視界保護地区が設定されている。京都市の景観計画はこの考え方を採用している。環境保全という場合に、風景美まで対象にしている点がポイントである。

2．世界遺産都市のまちづくり

クロアチアのドゥブロブニクは、世界文化遺産都市である。この都市は1667年の大地震により壊滅的な打撃を受けたほか、1990年代のユーゴ内戦により甚大な被害を受けた。しかし、内戦後はわずか数年で大規模な修復が行われた。基本的な街の構造は1000年以上変化していない。

■成熟社会の美しい国土づくり

1．私権制限と景観法

景観法は、各自治体が条例で行ってきたことを法律で私権に踏み込んだという点が特徴的である。

2．美の効用

真（科学）・善（宗教）・美（感性）の中で、殺し合いに発展しないのが「美」であり、世界共通の物差しがあるのも「美」である。美は余裕や癒しの効果が強い。

3．街のイメージづくり

（1）美しい都市景観VS面白い都市景観

美しい都市景観も大事であるが、面白い都市景観も大事である。面白い都市の例として、多様な都市活動や不安と緊張、異文化体験が可能なニューヨーク、自由闊達な商業都市であるアムステルダム、ヨーロッパ的景観とアジア的景観、イスラム教とキリスト教が混在するイスタンブールなどが挙げられる。美しい都市の例として、安定的な都市環境やガバナンスが存在するシドニー、安心感のある歴史的街並みや公共空間の豊かさがあるリスボン、コンパクトな都市国家で清潔感のある緑環境を有するシンガポールなどが挙げられる。

しかし、街路の景観に着目すると、同じ都市の中でも美しい街路と面白い街路があることがわかる。ニューヨークではソーホー地区（面白さ）と五番街（美しさ）、道頓堀仲通（面白さ）と御堂筋（美しさ）、神戸南京町（面白さ）と旧居留地（美しさ）などである。

面白い街には活力を生み出す効果があり、美しい街には癒し効果がある。ビジターは両方の街に訪れ、定住者は美しい街を選択する傾向がある。

（2）メインストリートの景観動向

各都市におけるメインストリートの景観づくりでは、いくつかの動向が見られる。①ミュンヘンの歴史的中心市街地などの歩行者空間化②札幌大通り公園のように公園機能やイベント空間をつくり出す緑道・公園化③御堂筋ギャラリーのように歩道内のポケットパークのほか、オープンカフェの立地などによる滞留空間化④フライブルグのように都心に路面電車を導入するなど弱者に優しい交通施設の導入⑤ソウルの清渓川のような水環境の導入―などである。

4．都市ビジョン

都市のビジョンとして、自然親和型、自立連携型、安全安心型の3つのタイプがある。美しい街づくりは、安全安心型に始まり、安全安心型で終わると思っている。

●

## 質疑応答

Q1．京都市では、詳細にデザインコードを設定しているが、なかなか美しい街になっていないように見える。

――保全するべきものが何なのかが不透明なのではないか。例えば、観光客が期待するものが街の雰囲気だと考えるならば、すべてを凍結保存しなくても、形態保存でいいとも考えられる。もちろん、重要文化財などは別の論理から残すべきである。

Q2．日本の宗教建築は用途転用が可能と考えられるか。

――ボローニャでは、宗教団体所有の建築物が多い。宗教建築は「コンテナ」と呼ばれ、比較的自由に様々な用途で使用されている。崇高性があるというのがポイントである。日本では蔵や倉庫、小学校などが用途転用の可能性が高い建築物といえるのではないか。

Q3．イタリアには既存不適格という考えはないのか。

――日本では構造や防災の点から既存不適格といわれる。しかし、イタリアにはそのような考えはない。新しく建築されたものが「不適格」だといわれる。

Q4．ウルビノ市のように、街は時間をかけてつくった方が美しくなるのか。

――日本では、事業決定されてから設計などの計画を始める。だから実現を急がざるを得ず、十分に設計や計画が練られる時間がない。イタリアでは、計画がないところに開発はない。まず設計、計画を行うため、その計画が中止になることも多いが、その分、時間をかけて計画することができる。

Q5．美しい観光地のスケールはどの程度と考えればいいか。

――観光地は市全域ではなく、地区を限定した方がいい。イタリアなどではおよそ1㎢である。その範囲に集中投資した方がいい。

（文責：伊丹康二／大阪大学大学院助教）



REPORT

# 藤山宏著『プロが教える住宅の植栽』出版記念講演会もよおしの記

山田　修
出版委員会委員／修建築事務所

表題の会が、今年2月3日（木）18：00～20：00、TOTOテクニカルセンター（大阪市中央区久太郎町・御堂筋ダイワビル2F）で開かれました。場所は、地下鉄御堂筋線本町駅から徒歩5分と便利で、上々の雰囲気を持っている会場です。

はじめに、上原正行氏（出版委員会委員長／U建築工房）より講演者の簡潔な紹介がありました。司会・進行はもちろん上原氏です。

藤山宏氏は、すでに『住宅エクステリアの100ポイント』という本を出版されている方で、当講演会は二度目となります。

が、多方面で講演活動をされていますから、お茶の子さいさいという風情でした。

## 欅って?

定時に開会。

司会者の「いま“緑”の勉強は必修科目」の推薦文が気に入りました。緑（りょく）：植物系の暖かいミドリ、碧（へき）：青空系の冷たいミドリ、翠（すい）：宝石系の光るミドリ、ですが、緑（りょく）なしでは「碌（ろく）なしの一戸建て住宅」となります。これは、筆者も体験済み…。

「“はじめに”の文章をよく読んでくださいね」の著者のお願いがありました。「大きくなりすぎたゴールドクレスト、無残に切り詰められたケヤキ、隣地側に大きくはみ出しているミモザ、門周りの表札やカメラホーンまで隠してしまったオリーブ…」が、著書のはじめの書き出し文です。奇抜な出だしが、目を引きつけました。

筆者は、ケヤキとは「日本特産の落葉高木で、太くてまっすぐな幹と枝がほうき状に立ち上がる。ケヤキ林・ケヤキ並木・ケヤキ長火鉢（木目がきれい）を思い出した。楕円形のギザギザの葉っぱも描ける」と理解していました。が、“欅”の漢字はむずかしく、意味深長です。

「木目の美しいところからケヤケキキ（異木）の義、カヨキ（香好）の転声（日本語源大辞典より）。音符で擧・キョ、大きい意→巨（新字源より）。木十音符（手を揃えて持ちあげる）の会意形成文字で、手を挙げた形に伸びる大木（学研漢和大辞典より）」。

筆者はケヤカ（貴・尤）きわだって立派な様子（字訓より）の方が、樹形に合っている、と思いました。難解な漢字が中国から日本に渡り、左端に木をつけてケヤキと読ます、はすてきな日本文化です。訓読みの変化は、漢語を日本語になじませました。

小学生向きには、「ハーイ、手を開いてまっすぐ上に伸ばしてください。それがケヤキの立ち姿です」の一言で、冬の樹形の夢が広がるように思いましたが…。

しかし、ゴールドクレスト→金の会員証？、ミモザ→サラダ？、オリーブ→小豆島？と、片仮名の植物名を言われても、ちんぷんかんぷんの答えしか出てきませんでした。己の植栽の無知を恥じ入り、当書物でしっかりと学習してみようと決心した次第です。

## 「聞く」と「読む」

著書は、多くの写真例・スケッチ（一部カラー頁）を示し、記述は講演調のデス・マスを用い、コラムを4頁にはめこんでいます（図・写真入り）。コラムという息抜き頁にも出合えて幸せでした。

これは、「聞く」と「読む」の違いを意識されたのだと思います。「聞く」は生理的で簡単ですが、「読む」は文化的で複雑です。「読む」を「聞く」に近づけることは、難しいです。



パソコンを操作して語る藤山氏

パソコンには出版本の頁数が印字されているから、会場画面に示された拡大を見て、本を開きやすかった。
筆者は、画面に出てくる図をすべて出版本上で鉛筆で囲みこむ。同時に話の要点を落書きする。
それは手をフルに動かして、眠気防止を兼ねていた。
新本は、読者が徹底的に汚すものである。



活気に満ちた受講者の顔・かお

今回の受講者は60名。うち20名が女性である。ありがたし。
久しぶりに盛大で活力のこもった講演会だった。女性層の多い講演会は、講師も張り切らざるをえまい……。
講師の張り切り方が伝わってくる雰囲気を、筆者も感じた。

が、72～73頁の4例の写真を使っての演習形式の「カジュアル系の門周りの植栽」は、むずかしさをやさしくするテクニックを示されている、と思いました。著者もあわてずさわがず、語りに余裕と幅を持ち進行されている状況…。

講演者は余りに熱中されて、途中5分の休憩を忘れられたほどです。司会者の判断で19時10分より5分のトイレ休憩がありましたが…。

## 著者、編集者の工夫を垣間みる

ところで、字だけの本はダメですねぇ。いくらいい事が記述されていても、目が疲れます。やはり、現代の本は、写真・図をメインに使った本でないと、読者がついていきません。それだけ著者に負担をかけることになりますが…。

80～81頁の6例も良かったです。編集者のご苦労も十分に察知できました。

住宅を建てるとき、予算の関係もあって庭の植栽は後回しになります。しかし、一戸建て住宅では、どうしても庭と緑は欠かせないものです。住む人に喜びと安らぎを与えてくれる緑（みどり）は、「住宅と共存して欲しい」と、改めて理解し、勉強した講演会でした。「一戸建てにはミドリが密着する義務がある」と結論が出た次第です。

気持ちよく当講演会を演出してくださった関係各位には御礼を申し上げます。感謝！

（やまだ　おさむ）

お知らせ Information

## ▶調査・研究助成、普及事業助成（第１回）応募受付

㈶建築技術教育普及センターでは、平成23年度の下記の助成の受付を行う。

**■調査・研究助成**

**[助成対象]**

①建築設計、工事監理業務等（建築設備、インテリアに関わるものを含む）に関する調査・研究

②建築教育、資格制度等（建築設備士、インテリアプランナーに関わるものを含む）に関する調査・研究

③建築技術者の資質の向上、活用方策等（建築設備士、インテリプランナーに関わるものを含む）に関する調査・研究

④①から③までのうち、２以上の分野にまたがる調査・研究

⑤その他、建築技術の教育普及に資する調査・研究

**[応募資格]**

団体、グループ、個人を問わない

**[助成件数]**

12～15件

**[助成金額]**

原則として、１件100万円を上限とする

**[応募締切]**

2011年４月28日（木）必着（当日消印有効）

**■普及事業助成（平成23年度第１回）**

**[助成対象]**

建築設計・工事監理業務、建築教育・資格に関わること（建築設備、インテリアの分野を含む）をはじめ建築技術者の資格の向上・活用に関する普及事業。国民の建築技術者への理解や信頼を深めるなどを目的とする事業も対象とする。（事業区分：講習会、講演会、シンポジウム、展示会、見学会、広報、表彰、コンペ、出版等）

**[応募資格]**

団体またはグループ

**[助成件数]**

10～12件程度

**[助成金額]**

原則として、１件100万円を上限とする

**[応募締切]**

2011年４月28日(木)必着（当日消印有効）

**問合先**　㈶建築技術教育普及センター情報・普及部普及課助成係
〒104-0031 東京都中央区京橋2-14-1
兼松ビルディング
TEL.03-5524-3105
FAX.03-5524-3223
http://www.jaejc.or.jp

## ▶没後150年　歌川国芳展

歌川国芳（1797-1861）は、画想の豊かさ、斬新なデザイン力、奇想天外なアイデア、確実なデッサン力を持ち、浮世絵の枠にとどまらない広汎な魅力を持つ作品を多数生み出した絵師である。国芳の魅力は、なんと言っても、その画想の自由さ、限りなく広がるイマジネーションの世界にある。物語の夢と冒険とロマンの世界を具現化する手腕においては、国芳は他に並ぶもののいない卓越した才能を示し、まさに、江戸のグラフィックデザイナーとも称することが出来る。本展では、今年国芳没後150年を記念して、彼の代表的な作品、これまで未紹介の作品をあわせ400点余りを紹介する。

会　期　2011年４月12日(火)～６月５日(日)
９：30～17：00（入館は16：30まで）
月曜日休館（５/２開館）

会　場　大阪市立美術館（天王寺公園内）
大阪市天王寺区茶臼山町1-82

観覧料　一般1,300円、高大生900円
中学生以下と市内在住の65歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料
［要照明］

招待券は日本建築協会（06-6946-6981）へ。

※会期中、展示替えを行う。（５/９月曜日）



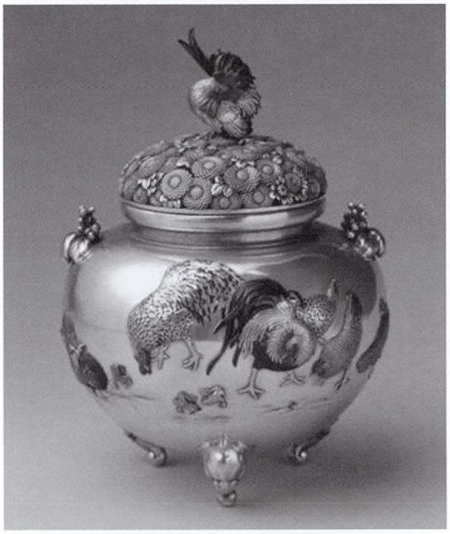
「みかけハこハゐがとんだいゝ人だ」（全期）

## ▶幕末・明治の超絶技巧 世界を驚嘆させた金属工芸―清水三年坂美術館コレクションを中心に

幕藩体制の崩壊とその後の廃刀令（1876年）によって大きな後ろ盾を失った刀装金工たちは、自らの技術を芸術世界に高めることで生き残りを図る。この時期の金工界を牽引した

加納夏雄、海野勝珉、正阿弥勝義、塚田秀鏡、香川勝広ら刀装金工から彫金芸術の世界へと飛躍した彼らが制作した緻密な作品は、国内外の美術愛好家に驚きを持って受けとめられた。清水三年坂美術館は、このように海外で評価された幕末・明治期の工芸作品を国内で再評価することを願い、設立された。本展では、名品約170点を紹介する。

会　期　2011年 4 月13日(水)～ 5 月29日(日)
9：30～17：00
休館日火曜(5/3開館、5/6休館)
会　場　大阪歴史博物館6階 特別展示室
観覧料　一般800円、高大生600円、
招待券は建築協会（06-6946-6981）へ。



群鶏図香炉（ぐんけいずこうろ）
正阿弥勝義（しょうあみかつよし）
明治時代　清水三年坂美術館所蔵

## ▶特別展
### The Birth of Chinese Civilization
### 誕生! 中国文明

中国王朝発祥地である河南省は、12世紀ころまで中国の政治・経済・文化の中心地として栄え、高度な技術を駆使して作られた工芸品が次々と生み出され、書画・彫刻などの伝統芸術が発展した。本展では、正倉院宝物の源流を思わせる華麗な工芸品や、東大寺大仏と深いつながりをもつ唐代の石仏・宝冠如来坐像など約150件の至宝を展示し、古代日本に大きな影響を及ぼした中国文明の誕生と発展の軌跡をたどる。

会　期　2011年 4 月 5 日～ 5 月29日(日)
9：30～17：00(入館は16：30まで)
4/29以降の金、土曜日は19：00まで
休館日月曜（5/2開館）



金縷玉衣（きんるぎょくい）前漢　前1世紀
長さ180cm、河南博物院蔵

会　場　奈良国立博物館
奈良市登大路町50
観覧料　一般1400円、高大生1,000円
小中生500円
招待券は日本建築協会（06-6946-6981）へ。

## ▶「松園の描く唐美人」
### ～唐美人に託した想い～

品格を重んじた女性像を確立し、近代日本画壇に大きな足跡を残した上村松園。松園にとって唐美人は深い精神性をたたえた女性像であり、理想とする女性像に近い存在であった。明治期は唐美人を模写することで技術を磨き、大正期は崇高な精神性を学び、昭和期には、唐美人を確立する。本展では、「楊貴妃」をはじめとする様々な唐美人作品を通して、唐美人に託した想いを明らかにする。

会　期　2011年3月15日～ 5 月15日(日)
10：00～17：00　休館日月曜
会　場　松伯美術館
奈良市登美ヶ丘2-1-4
TEL.0742-41-6666
入館料　一般（高大生含む）800円
小中生400円
＊会期中一部展示替え有り。
招待券は日本建築協会（06-6946-6981）へ。



「梅下佳人」上村松園　大正13年　個人蔵

## ▶受贈記念
### 水彩の魅力　青山政吉展
### 日本百景・万葉百景

青山政吉は、京都市立絵画専門学校で日本画を学ぶかたわら、黒田重太郎のもとで洋画を学び、1954年に滞欧を果たし、二紀会の同人になる。退会後は美術団体には所属せず、やがて水彩画による風景画を描くようになる。それは日本画の繊細さと洋画の緻密さは構成力を充分発揮できるものであった。
1974年「近畿百景」シリーズに始まり、やがて代表作になる「万葉百景」へと繋がっていく。本展は、2009年度に「万葉百景」ならびに「日本百景」の寄贈を受けたことを記念して開催する。

会　期　2011年 4 月 2 日～ 5 月22日(日)
10：00～17：00
水曜日休館(5/4開館、5/6振替休館)
会　場　西宮市大谷記念美術館
西宮市中浜町4-38
TEL.0798-33-0164
入館料　一般500円、高大生300円
小中生200円
招待券は日本建築協会（06-6946-6981）へ。



青山政吉「大沢池」1991年

## ▶江里康慧・江里佐代子展
### 仏像と截金
### ―光 放たれるとき―

現代の仏師を代表する一人である康慧氏と「截金」の重要無形文化財保持者（人間国宝）であった佐代子。本展では、二人の卓越した技が生む荘厳な輝きを湛えた作品をご覧いただく。なお、本館和光ホールにて康慧氏の「釈迦如来三尊像」など、品格に満ちた作品と佐代子が晩年に切り拓いた技法である截金透塗の作品を展示。並木館和光並木ホールでは、工芸品に截金をほどこし創意溢れる佐代子の作品を展示。

■江里康慧
1943年京都市に生まれる。1962年京都市立日吉ヶ丘高等美術課程彫刻課を卒業、大仏師松久朋琳師・宗琳師に入門。1965年独立し父、江里宗平（仏師）に師事。1985年には三千院（京都府）より大仏師号を賜る。現在に至る。

■江里佐代子
1945年京都市に生まれる。1978年北村起祥師に師事。伝統截金の手ほどきを受ける。1982年和光ホールにて初個展。その後数々の賞を受賞。2002年重要無形文化財「截金」保持者認定。2005年紫綬褒章受賞



江里康慧　聖観音菩薩立像

会　期　2011年4月2日～18日(月)
10：30～18：00（最終日17：00）
会　場　㈱和光本館6階　和光ホール
並木館5階　和光並木ホール
地下鉄東京メトロ銀座駅A10出口すぐ（本館）
料　金　無料

## ▶ベルギー　木の匠の技

本展では、ベルギー南部のワロン地方の建築を中心に、隣接する地域の解説も交えながら、幅広くヨーロッパの木造建築と技術を図面をはじめとして模型や道具、映像などで紹介する。

会　期　2011年3月29日～5月15日(日)
会　場　竹中大工道具館
神戸市中央区中山手通4-18-25
入館料　一般300円、高大生200円、
小中生100円

■セミナー
ヨーロッパ大工の技―ベルギー、フランス、ドイツの木構造について―
講師：ダヴィッド・ウブレクト（ベルギー芸術遺産協会研究員）
日時：2011年5月7日13：30～15：00
場所：神戸市教育会館
定員：80名

## Gallery銀座一丁目展示会

■佐原啓子「墨＋金属」
会　期　2011年5月5日(木)～5月10日(火)
■Nature Dreams 2　藤本かずみ展
会　期　2011年5月12日(木)～17日(火)
11：00～19：00(最終日17：00まで)
(共通)
会　場　Gallery銀座一丁目
東京都中央区銀座1-9-8奥野ビル4F
問合せ　TEL.03-3535-0522
www.ginza1.net

## ▶膜・空間デザインコンペ作品募集

㈳日本膜構造協会では、高齢者を含む多くの市民の健康に有益でエコにも有効な、膜構造・膜材料による空間のデザインを募集する。
このコンペでは、提案に共感した自治体などが実際に建設したくなるような、プロのエンジニアのサポートを得ることで実現可能な「膜・空間」のデザイン提案を求める。
■応募資格：2011年5月31日時点で大学(短大含む)、大学院、高等専門学校、専門学校、工業高校の教育課程に在籍する個人または、そのグループ（国籍・資格不問）
■応募方法：㈳日本膜構造協会ホームページ（http://www.makukouzou.or.jp）から事前登録のうえ、A1縦長（イレパネ入り）1枚に提案をまとめ、電子データとともに事務局に送付。
■締　　切：登録締切5月2日、応募締切5月31日
■賞及び副賞：最優秀賞1点 副賞50万円、優秀賞2点 副賞10万円、佳作7点以内 副賞記念品
■審査委員：審査委員長/小嶋一浩（シーラカンス アンド アソシエイツ代表）審査委員/乾久美子(建築家)、佐藤淳(建築構造家)、平田晃久（建築家)、トム ヘネガン（東京藝術大学教授）
■問　合　せ：㈳日本膜構造協会
TEL.03-3501-3535

## ▶建築社会研究/Architecture-Society Studiesプラットフォーム開設のお知らせ

人間・環境学会（Man-Environment Research Association/MERA）に設置されている「建築社会研究委員会」は、その研究活動を広げ深めるために、「建築社会」のあり方に関心ある人々が参加し、各種の関連する活動や意見を交流するための場として、建築社会研究/Architecture-Society Studiesプラットフォームを開設する。
■ホームページ
http://iwasaki.eng.niigata-u.ac.jp/pass/
■問合せ
舟橋國男（e-mail：funahashi@hcn.zaq.ne.jp）

## 理事会

**第７回常任理事会**
２月23日（水）16：00～17：30
出席者　中井会長ほか５名
議　事（１）平成23年度事業計画（案）
（２）平成23年度収支予算（案）
（３）後援名義等の使用承諾
（４）新社団法人申請工程表について
（５）役員の推薦依頼
（６）その他報告事項等

## 編集委員会

**第11回編集委員会**
２月９日（水）18：00～20：00
出席者　設楽委員長ほか６名
議　事（１）３月号特集「東海支部」の報告
（２）４月号特集「まちなかのサードプレイス」の報告
（３）５月号特集「新しい生活空間」の報告
（４）６月号特集「ECO」の報告
（５）７月号特集「建築と土」の報告
（６）各小委員会・分科会からの報告
（７）その他
（８）収支状況報告

**第１回特別編集委員会**
２月23日（水）17：45～19：30
出席者　設楽委員長ほか３名
議　事　８月号特集　企画案検討

**第11回法令分科会**
２月16日（水）15：00～17：30
出席者　吉田純幹事ほか６名
議　事（１）「法令コーナー」の企画
（２）2011年10月号法令特集の企画
（３）新年度分科会体制
（４）情報交換

**第９回構造分科会**
２月10日（木）18：00～19：10
出席者　石田幹事ほか３名
議　事（１）「構造の頁」の企画
（２）12月号構造特集の件

**第８回施工材料分科会**
２月１日（火）17：00～18：00
出席者　中川幹事ほか４名
議　事　2011年11月号特集

**第４回建築系分科会**
２月７日（月）19：00～21：00
出席者　静幹事ほか５名
議　事　2011年７月号特集企画案検討

**第５回建築系分科会**
２月25日（金）19：00～21：00
出席者　静幹事ほか３名
議　事　2011年７月号特集企画案検討

**第９回設備分科会**
２月２日（水）18：00～20：10
出席者　赤澤幹事ほか３名
議　事（１）「設備の頁」の企画
（２）講習会の企画
（３）見学会の企画
（４）2011年６月号設備特集の企画
（５）新企画の提案
（６）超高層・高層マンションやオフィスビル計画時への提案
（７）“測定機器シリーズ”

**第２回インテリア・住宅系分科会**
２月８日（火）18：30～20：20
出席者　神谷幹事ほか３名
議　事　５月号“新しい生活空間”特集の企画

**第３回インテリア・住宅系分科会**
２月16日（水）18：30～20：30
出席者　神谷幹事ほか２名
議　事　５月号“新しい生活空間”特集の企画

**第10回作品作風小委員会**
２月24日（木）19：00～20：45
出席者　池上副委員長ほか５名
議　事（１）作品の選定
（２）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（３）「gallery」掲載報告・予定
（４）前回の編集委員会の報告
（５）その他

**第11回広告企画小委員会**
２月９日（水）17：00～18：00
出席者　前田副委員長ほか３名
議　事（１）３月号特集「東海支部」
（２）４月号特集「まちなかのサードプレイス」
（３）５月号特集「新しい生活空間」
（４）６月号特集「ECO」
（５）７月号特集「建築と土」
（６）新シリーズ頁検討「素材特集」
（７）収支状況

**第11回10年委員会**
２月３日（木）18：30～20：00
出席者　設楽委員長ほか５名
議　事（１）大阪「かくれたええとこ」そうせい（創生）プロジェクト
インタビュー予定の橋爪紳也氏へのインタビュー内容の検討
（２）学生のための現場見学会

## 出版委員会

**第10回出版委員会**
２月３日（木）17：00～17：30
出席者　上原委員長ほか10名
議　事（１）プロのノウハウと特装本の経過報告
（２）進行中のテーマについて
（３）その他

## 特別委員会

**第19回　群　像**
２月７日（月）15：40～19：30
出席者　永野一朗（インタビュアー）ほか８名
議　事　関西の建築界「群像」登場者の人間像に迫るためのインタビュー
関西大学環境都市工学部建築学科
末包伸吾　氏

## 講　座

**『プロが教える住宅の植栽』出版記念講演会**
２月３日（木）18：00～20：00
場　所　TOTOテクニカルセンター
講　師　藤山　宏　氏
参加者　48名
出席者　上原委員長ほか10名

●訃報
〔名誉正会員〕
片倉健雄 氏　平成23年２月25日
逝去・享年81歳

## 東北関東大震災義援金について

今後の救援・復興作業を支援するために、個人義援金の提供にどうぞご協力くださいますようお願い申し上げます。
一例として、日本赤十字社の受付要領をお知らせします。
現金によるご協力は、最寄りの郵便局・ゆうちょ銀行にて、
**口座記号番号：00140-8-507**
**口座加入社名：日本赤十字社**
**東北関東大震災義援金**
平成23年９月30日㈮まで受け付けています。
（宛先住所記入不要、手数料無料）
日本赤十字社ホームページ
http://www.jrc.or.jp/

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業 ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業 SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作

株式会社NPCコーポレーション

本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代)　fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代)　fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代)　fax:(03)5776-7733
（旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱）

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

# デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

HIRATA TILE CO,LTD. 水回りとセラミックタイルのデザイン提案から施工まで。住まいの総合企業 株式会社平田タイル。
本　　社■〒550-0011 大阪市西区阿波座1-1-10　TEL:06-6532-1280　FAX:06-6532-1230
東京営業所■〒160-0022 東京都新宿区新宿2-19-1 ビックス新宿ビル10F　TEL:03-3350-8922　FAX:03-3350-9875
www.hiratatile.co.jp





世界最新のハイグレードなご提案。
ハイセンスなデザインセラミックタイル



個性豊かな住空間を創り出す
ユニークなハンドメイドセラミックタイル



水栓金具・洗面ボウル・アクセサリーetc.
こだわりのサニタリーセレクトショップ



住宅用外壁タイルの製造から施工まで。
本物にこだわるサンクレイ・タイル

プロが教える

# 住宅の植栽



藤山　宏 著　B5判・176(カラー32)頁・定価2940円

1947年生まれ。鳥取大学農学部農学科卒業後、電鉄系造園会社、住宅会社造園課、外構造園工事会社を経て、1994年㈲造景空間研究所を設立。エクステリア・ガーデン工事の営業、設計、施工管理のキャリアを活かし、社員教育、技術研修等で活躍中。E&Gアカデミー副学長。著書に『住宅エクステリアの100ポイント』(学芸出版社)、他。

**門廻り、アプローチ、壁、インテリア、屋上、住空間で緑(樹木・草花)を効果的に使いこなすための知識と考え方**

実例・図面満載



●目次

第1章　植物の基礎知識
第2章　現地調査と植栽計画図の作り方
第3章　部位別植栽の考え方
01　門廻り
02　アプローチ・階段スペース
03　垣・塀・フェンス等
04　法面・擁壁
05　駐車スペース
06　坪庭・中庭
07　デッキ・テラス・ベランダ・バルコニー
08　壁・屋上
09　インテリア
第4章　イメージ別ガーデン植栽の考え方
第5章　施工・メンテナンス

学芸出版社
〒600-8216 京都市下京区木津屋橋通西洞院東入
tel 075-343-0811　fax 075-343-0810
http://www.gakugei-pub.jp/　E-mail info@gakugei-pub.jp